

---

# ポケットモンスター ブレイカ

作者

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポケットモンスター ブレイカ

### 【Nコード】

N 6 2 7 1 Q

### 【作者名】

作者

### 【あらすじ】

#### 【第一部】

イッシュからやってきましたカントーに！  
そんでもって旅に行くことになったぜ！  
突然すぎるだつて？

お前ら俺を誰だと思っていやがる！  
よっしゃ行くぜえ！

#### 【第二部】

世間が私を否定した。

だから事私は否定した連中の象徴になる！

このホウエン地方の英雄に私はなる！

The fight is inevitable.

（別にあらずじの元ネタだけでは進みません他のもあります）

後キーワードが入りきらないものがあつたため

いろいろと略しています。3つ程度。

後、アニメの設定などが混ざっています。

主人公以外の恋愛もたらふくあります。

なんか趣向が偏っています。

エキサイト翻訳だから英文があっているか不安

後、キャラ紹介で3サイズとか詳しく書いてたりするのってどうな  
んだろう。

## この小説について

この小説についてですが一応は原作前の話となっております  
ジムリーダーが別人出会ったりしたりします。

さらには原作キャラクターの家族構成が変更があったりします。  
オリジナルキャラの子供がいたりなどします。

ポケモンバトルよりもストーリー重視です。

ポケモンバトルのシーンはかなり考えるのに時間がかかるので。

第一部・第二部・第三部……と何部かに分かれており

一部ごとに根本的なストーリー目的が違います。

最終的にはポケモンリーグ優勝という目標があります。

キャラクター設定に書かれているキャラクターの声優の声優ネタを  
使うことが時折あります。

できれば確認して覚えておいてください。

と言うかキャラクターの名前は声優が演じたキャラから取っている  
ものが多いです。

とっていない物もいくつかあります。

あと、読んだら感想をくれるとうれしいです。

ではよろしくお願いします。

## オリジナルキャラクターの名前の由来（前書き）

あくまで名前の由来でありキャラクターの性格には全くないとは言えませんが

影響はあまりないと思ってください。

## オリジナルキャラクターの名前の由来

### 【第一部】

マサムネ    なんとなくかつこいい感じの名前である。

ミズホ    他小説のキャラの名前の流用である。

シモン    グレンラガンの主人公の名前

トガミ    とある魔術の禁書目録の上条    当麻

カナデ    なんとなく

カミカ    声優のかないみか

カナブ    カナブン

カイのしん    昔な感じに

ガイト    舞人+凱÷2したもの。（勇者シリーズの檜山さん声

の主人公）

ガオイン    上記の搭乗ロボットの名前を組み合わせたもの。

ユウミ    勇者をもじったもの

カミコ    とある科学の超電磁砲の御坂    美琴

シャドウ    ソニックシリーズに登場するライバルキャラ

サユキ    桜+雪

ウルサ    煩い

キイガ    黄色

トラスケ    昔ながらのカッコよさ

ウリカ    ポケモンのタマムシジムリーダーのエリカ

エリノ    同上

エカミ    同上

リュボ    コンボイ+龍神丸    （玄田哲章さんが演じた主役ロボ）

アサノブ    平凡さを出したかった

コウイチ    鉄のラインバレルの主人公

## 【第二部】

トウガ 超重神グラヴィオンのメインパイロットの名前

ナギサ CLANNADの古河 渚

ヤヨイ アイドルマスター XENOGLOSSIAの高槻や

よい

レジ 鉄のラインバレルの森次 玲二

レン 交響詩篇エウレカセブンのレントン・サーストン

クロウ 第2次スーパーロボット大戦Z 破界篇の主人公

ノマル ノーマル

第一壊 え？旅に出ろって？引越してきたばっかよ？（前書き）

結構ノリノリで書いてます。



第一壊 え？旅に出るって？引っ越してきたばっかよ？

【トラックの中】

《ガダッガタガタッ》

「……いくらなんでもここはないよなあ。旅費けちりやがって……」  
トラックの中にいる少年はぶつくさ言っている。

「これじゃ俺も引っ越しの荷物みたいじゃねえかよ……」

少年は引っ越しの真っ最中。

親が旅費軽減のため荷物と一緒に乗せたのだ。

《ガタッガタガタッ》

「ああっ！ しかも乗り心地最悪じゃねえかどちくしょう！」

少年は内心疲れ切っていた……

【マサラタウン】

「ここがマサラタウンか…… イッシュとは違って田舎なところだな」  
少年はイッシュ地方からカント 地方に引っ越してきたのだ。

「うんうん 昔ながらって感じがしていいわねえ」  
「そうね。お袋……親父が転勤でカント に行くことになってよかったね……」

父親がカントーで仕事することになりここに引越してきたのだ。

「ふむふむ。イッシュで見たことないポケモンたちに出会うのも楽しみだぜえ」

「そうね。この際だから旅にでも出る？」

「……旅ね。確かに10歳から旅をするって良くあることだけど。いろいろあつて俺は15歳。いまさはどうなんかな」

「そうやって何時もしぶっちゃって。怪我で時期がずれただけなのよ」

「しかし……」

少年は渋る。

「年下の子たちに交じって旅と言つのをなあ」

「結構くだらないわよその理由」

「やあ、ヨ コさん。引越してきたんじゃないのう」

少年が渋々と悩んでいるところに誰かがやってきた。

「あら、オーキド博士。お久しぶりです」

「うむ。おや、君はマサムネ君か。大きくなったのあ」

「え、あ、はい」

少年ことマサムネは大きくなったと言われたがオーキド博士に会った覚えはない。

「む？その顔は覚えておらんとでも言いたそうな顔じゃな」

「いや、そんな。えと……」

「うゝむ……わしは別にいいんじゃないがな。ミズホのことは忘れておると困るのじゃが」

「え？ミズホ？あれ、なんか昔小さいころと一緒に遊んでた記憶が……」

「おお、覚えておったかね。まあワシは最後に会ったのが3歳のころじゃったかのぉ」

（ミズホって言えば確か俺の後をお兄ちゃん、お兄ちゃんと言ってきた子かなついな）

小さい頃マサムネと一緒によく遊んだ女の子である。  
結婚の約束などをしたことがあったような気がするが……

（あれ、これはフラグなのではないか？）

マサムネは事故で入院してた時はポケモンのことについていろいろ学んでいたが

ついでにその手のゲームにも手を出していたのだった。

「オーキド博士。忘れるわけありませんよ」

「む、そうかそうか。それはよかったわい」

（計算すると今の年齢は10歳のはず……そして今の話し方からしてまだ旅に出てないのかもしれない。ふむふむ）

マサムネの脳内ではいろいろな妄想が膨らんでいく……

（10歳の女の子……10歳……10歳……）

「ま、マサムネ君？大丈夫かね？」

「じゅ……うえっへ！？ 大丈夫ですよ！？」

「な、ならいいんじゃないが……」

マサムネは大変なことになっている。

ちなみにマサムネはロリコンでもペドでもない。

年下の女の子が大好きなのである。

さすがに幼稚園児には興味はない。

「そ、それでミズホちゃんはまだこの街にいるんですか？」

「む？来週には旅に出る予定でな。今日に引っ越してきてくれてよかったわい」

（チャンス！）

「あら？ちょうどいいじゃない。いっしょに旅に出れば？」

（ナイス！ お袋ナイス！）

マサムネはちょうどいいタイミングで旅立つことを提案してきた母親に感謝した。

「うゝむ……一人ってのは少し嫌だったけど旅する仲間がいれば別かな」

「おおっ！ そうかそうか、それはよかったわい。ミズホも喜びそうじゃ」

（よし。後はミズホちゃんが可愛いことを願うだけだ）

その時のマサムネの顔はすごかった。

母親ことヨ コはその顔を見てやれやれと言う感じの表情になった。

（まあ、旅にださせるいいきっかけになったね。利用させてもらってごめんねミズホちゃん）

「あ、そうそう。マサムネ、あんたのパートナーはこの子よ」

「えっ？ もう決まってるの？」

「お父さんがね。あなたのためにつてね」

そう言いながらヨ コはマサムネにボールを渡す。

「俺の相棒か…… よしっ出てこい！」

マサムネがボールを投げる。

そして中から出てきたのは。

「モグ、リユ―！」

「モグリユ―かぁ。うし！ よろしくな！」

「モ、モグリユ―！」

マサムネがモグリユ―に手を近づける。

それにモグリユ―は少し驚きながら自分の手もだした。

「そうだ。名前をつけてやろう。そうだな……よし、シモンにしよう！ よろしくなシモン！」

「モグリユ―！」

そんなこんなで一人と一匹の旅はここから始まるのである！

「さて、ミズホちゃんに会いに行こうかあ」

「モ、モグリユ……」

次回に続く

**第一壊 え？旅に出るって？引っ越してきたばっかよ？（後書き）**

今回のネタだけで突き進むと思うなよ！

と言つかネタだけで突き進むと思うなよ！

面白くない話もあるかもしれませんが……

挽回は確実にします！

技やポケモンの重さなどはアニメ基準で行きますので

4つ以上・重いからかかえたりするのは無理などは

問題はないということで行きます。

## キャラクター紹介（第一部版 序盤）（前書き）

第一部（序盤時）でのキャラ紹介です

序盤時ですので中盤ごろからには対応しておりません。

女性キャラだけ身長と3サイズを書いてあります。



## キャラクター紹介（第一部版 序盤）

主人公

マサムネ（15） 妄想CV：緑川光（仮） 出身：イッシュ

年下好きの少年（もう青年と言うべきか？）

事故により10歳に旅に出られなかったために今の今まで旅に出ていなかった

熱血タイプで考えると言うことはあまりしない。

が、ポケモンが関係することになると頭の回転が速くなる。

入院中の楽しみがギャルゲーであつたためにそういうことには敏感である。

そういうことにもも頭が回るようになった。

見た目としてはマクロスFのアルトのような髪型つまりはポニーテール

だが顔は男前であり女には見えない。

身長などは年相応である。

ちなみにポニーテール好きでもある。

相棒

シモン（モグリュー） 妄想CV：柿原徹也

熱血的な性格だが少し臆病なところがある。

マサムネの事を兄貴分のように慕っている。

背中にサングラスのような模様がある。

文字が書けるのでそれにより人間と会話ができる。

サユキ（チュリネ） 妄想CV：丹下 桜

元気な性格だが何かあると恐ろしく好戦的になる。  
ボールから出るとマサムネのそばから離れようとし  
ない。  
始めてであったときはなぜか怪我をしていた。

シャドウ（コイキング） 妄想CV：遊佐浩二（友人の直感  
で）

親父さんからもらった色違いポケモン。  
普通のコイキングとは色違い以外にも違いがある。

ヒロイン

ミズホ（10） 妄想CV：桑島 法子 出身：カントー

身長144cm B85（H） W48 H80 化け物である。  
3歳の頃にマサムネと出会い、マサムネが事故に会う前までよく遊  
んでいた。

10歳になったからマサムネは旅に出ただろうと会いに行くこと  
をやめた。

母親も忙しかつたので事故の事をミズホには教えていなかった。  
ちなみに遊びに行く時はオーキド博士の助手とともに行っていた。  
なお、かなりの一途でありマサムネ以外の男を男として見ていない  
ところがある。

そしてかなりの妄想癖がある。

相棒

トガミ（ゼニガメ） 妄想CV：阿部 敦

不幸だったり幸福だったりするゼニガメ。

シモンの良き親友ポジションキャラである。

トガミもサングラスを所持している。

シモンの協力により文字を書き会話することが可能。

カミコ（ピカチュウ） 妄想CV：佐藤 利奈

カナブの勘違いにより弱っていたところをミズホに捕まえられた可哀そうな子

勝気な性格であり、特にトガミに対してはすぐに手と言っより電気が出る。

電気が効かないシモンは普通に話すことができる。

後何やら普通ではないことがあるようだ。

ボーイツシュ少女

カナデ（10） 妄想CV：池澤春菜 出身：ホウエン

145cm B70（AA） W56 H76 他の女性キャラと

比べるのはかわいそうである

頭脳派タイプ。

スタイリッシュな男の子というような服装をしている。

かわいい系のものは一切持っていない。

マサムネたちに少し興味を持っている。  
空気を読むということをよくするが、読めてないときが多い。  
今現在家族はニビシティに住んでいる。

相棒

カミカ（クチート） 妄想CV：かないみか

愛想を良くふりまく元気な性格  
だが、怒ると恐ろしいことになる。  
歌うことが好きである（別に相手を眠らせることはできない）

サムライ鎧のむしとりしょうねん

カナブ（10） 妄想CV：白石 涼子 出身：カントー

モデルは初代アニメのサムライしょうねんであるが  
外見はイケメンと言えるほどの少年。鎧以外は別物。  
何やらサムライと言うよりは忍者と言うような行動をとる時もある。  
虫好きなのは親からの遺伝のようなもの。

相棒

カイのしん（カイロス） 妄想CV：難波 圭一

カナブが親からもらったポケモン。  
通常のカイロスからは考えられないほど俊敏。

似ている少年

ガイト（15） 妄想CV：檜山 修之 出身：シンオウ

熱血系男子。いろいろなところがマサムネと似ている。  
ただし髪型はポニーテールではなくロング好きである。  
過去にマサムネと同じような事故を経験している。

相棒

ガオイン（リオル） 妄想CV：池澤春菜

勇敢な性格。回転を使った攻撃が得意。

ほんわか少女

ユウミ（10） 妄想CV：長谷川明子 出身：シンオウ

身長145cm B88（G） W53 H81 なにも言っていない

ガイトの従妹である。

ほんわかとしていてガイトの事は呼び捨てで  
ガイトの事が好きである。



第二壊 青春かぁ……うん！ 青春だぁぁぁぁぁ！

【オーキド家：玄関前】

「こおおおつこにミズホちゃんがいるんすねっ！」

「そ、そうじゃが……何やらおかしいノリになってないかの……」

マサムネのスーパーハイテンションにオーキド博士は少しひいている。

「えええ〜？ 別にそんなことないすよあ〜」

「モ、モグリユ？」

「どうしたよシモン〜なにそんな『ほ、本当に？』みたいな鳴き声はあ〜」

「モ、モグリユリユ」

シモンの言葉はマサムネに通じているようだがマサムネは気にしていない。

「あつて間もないポケモンと意思疎通しておるのにできてないように見えるの……」

「なにを言ってるんです博士！ 早く入りましょう！」

「う、うむ」

そしてマサムネ達は家の中に入った。

【オーキド家：玄関】

「あら、お帰りなさいおじい様」  
「うむ」

玄関に入るとお姉さんといった感じの人が出てきた。

「博士。この人は？」  
「む、ああ、ナナミじゃ。ミズホの母親の妹の娘になるかのぉ」  
「ああ、従姉妹なんですね」

（てか、ミズホちゃんの母親の妹の子供なんだよな……すると姉であるミズホちゃんの母親って……）

「マサムネ君？ どうしたの？」  
「えっ！？ あ、いや、別に……」

マサムネはつつい「ミズホちゃんの母親は行き遅れになりかけてたんだな」

などと考えていて周りが見えていなかったようだ。

「モ、モ、モグリユ！」  
「あら、カントーでは珍しいポケモンね」  
「え、まあ。モグリユのシモンです」

マサムネは頭にいるモグリユを胸に抱きナナミに差し出す。

「あらあら。かわいいわね」  
「モモモモモモモオオオオオ！」  
（ふっ、ナナミさんに抱えられて興奮しやがって……かわいいやつだ）



マサムネは年上に興味がない。

「おおっと、そういえばナナミよ。ミズホはおるかの？」

「え？ ミズホですか？ さっき出かけたと思いますけど……」

「む？ 入れ違いかのお。きっとマサムネ君の家に向かってしまっ  
たのじゃろう」

（なん……だとっ！ まだ俺を焦らすと言うのかミズホちゃああん  
！？）

マサムネは無表情だが頭の中では大変なことになっている。

「はっ！ ならうちに戻りましょう！」

「そ、そうじゃのお……」

そう言っマサムネはナナミからシモンを受け取りマサムネは駆け  
足で家の方に向かった。

「ふむ、青春と言っ物なのかのおこれは」

「さあ。わかりません」

青春まっただ中のマサムネ。

青春は人それぞれである！

年齢的にいえばナナミもまだまだ青春中である！

「うおおおおおおお！ 青春まっただ中ああああ！」

「モグリユアアアアアアア！」

家に向かい駆け足のマサムネ。  
振り落とされそうで必死に捕まるシモン。

「年下幼馴染恋人化フラグウウウウウウウウウ！」

「モ、モ！？ モオオオオオオオオオオオオオオ！」

「え？前に人がいる？って止まれんわあああああ！」

《プッピガン！》

「いててて。あゝ大丈夫ですか」

「いたたた。あゝ大丈夫ですよ」

「「あれ？」」

「も、もしや、君はミズホちゃん？」

「も、もしや、貴方はマサムネさん？」

（想像を超えたロリ巨乳少女ですか！？）

（想像を超えた長身美形男子ですよ！？）

「久しぶりだね！」

「久しぶりです！」

「元気にしてた！」

「元気でしたよ！」

「モ、モグリユ?!」

完全に意気投合している二人を見てシモンはただ驚くだけしかでき

なかった。

【マサムネ家：マサムネの部屋】

「いやあ。荷物の整理なんか手伝わせちゃってごめんねえ」

「い、いえ！ お礼なんて結構です！」

「モグリユウ……」

「ゼニ、ガメガメ」

「モグモグウ！」

「ガメガ。ゼニゼニ」

「モグウ！」

「ガメガメ！」

イチャイチャな青春空間を展開している持ち主を横に  
ポケモン同士でいろいろと慰めあっていた。

「あ、そうそう紹介します。私の相棒のゼニガメのトガミです」

「あ、そうそう紹介するよ。俺の相棒のモグリユウのシモンだ」

「ゼニゼニ」

「モグリユ」

「そうそう。旅に出るらしいね。俺も一緒に行ってもいいかな？」

「えっ？マサムネさんはもう15歳なのでは？」

ミズホがそういうとマサムネは少し下にうつむいた。

「いや、少し事故で怪我をね……」

「あつ……すいません」

「いやいや、いいんだよ」

少し静かになる……

「それでさ。一緒に旅に行ってもいいかな？」

「はい！ もちろんです！」

（うおっしゃ！計画道理！）

（予想外、でも最高です！）

「ゼニ」

「モグ」

そんなこんなで二人と二匹の旅は始まりを告げる……

『ご飯できたわよお。ミズホちゃんも食べていきなさい』

「「はあい」」

「モグ……」

「ゼニ……」

次回に続く

第二壊 青春かあ……うん！ 青春だあああああ！（後書き）

テンションについていけない二匹。  
テンションが高すぎる持ち主二人。

これが螺旋青春道……

書いててものすごい恥ずかしい。

第三壞 親って何なんですか？ 精神道徳って何！？（前書き）

バトルはまだ遠い……

### 第三壊 親って何なんですか？ 精神道德って何！？

【マサムネの家：リビング】

「どう？ おいしい？」

「は、はい！ おいしいです！」

マサムネ達はヨ コが作った特性料理を食べていた。

「なんかいつもより豪華だな」

「引越して初めてなうえにミズホちゃんもいるしね」

「わ、私なんかのために！ ありがとうございます……」

わんさかわんさかわきあいあいと盛り上がりを見せている。

「モグモーグモグモグ」

「ガメガメーメ、ゼニガア」

「モオオグ」

「ガメ！」

ポケモンたちはポケモンたちで何か盛り上がっているようだ。

「それで、一週間後に出発するのね？」

「はい。そういう予定でした。でもマサムネさんは準備などは……」

「いやいや、まったく無問題！」

「そ、そうですか。よかったです」

（マサムネ……見てると何だか……て言うかもう相思相愛状態なの？）

ヨ コは二人の様子を見ながら既に二人は互いに好きなんだと、感じた。

少し昔を思い出していた。

(しかしまあ……ミズホちゃんは10歳なのよね……)

「ヨ コさん？ どうかされました？」

「え？ いや、別になにもないわよ」

そんなこんなで時間は過ぎていく……

「あらもうこんな時間ね。ミズホちゃんどうするの？ 今日止まつて行ったりする？」

「え？ あの、ヨ コさん。家は近いので別に……」

「あらあら。もうすぐ二人で一緒に旅するって言つのに、恥ずかしいのかしら？」

その言葉とともにミズホは赤くなり爆発した。

「あつ！ ミズホちゃんが倒れたぞ！」

「やっぱり若いわね。育つところは育つても」

「なにさ言ってるだこの母親はあ！ ただし大正解です！」

さすが親子と言わんばかりのコンビネーションである。  
これを見ている人が一人もいないと言うのはもったいない。



「で、ミズホちゃんどうするの？」

「どうすると言われても……」

「じゃああなたの部屋と一緒に寝なさい」

「なっ……」

マサムネはすごく驚いた。

この母親は何を言い出すのだ。

「なによ、まだ10歳と15歳でしょ。なにを考えてるのよ」

「いや、10歳だけどね！？　なんですがね！」

「まったく……昔はこんなじゃなかったわよね」

「人間は成長して変わる生物なのです！」

マサムネはその場をくると回りながら叫び続ける。

「とりあえずあなたの部屋に連れていくわよ。と言うかベットは一つしかないし他に寝るものはないわよ」

「それをわかっていながら連れて行く母上様の考えがわかりません」

「なによ。子供が二人寝るだけよ。間違いでも起こるの？　なに？　いまどきは15歳でそこまで行くの？」

「いや、ないとは思うけど……まじでやるのですうか？」

ニヤリと笑いながらヨ　コはミズホを抱え。

「やるって何をやるのよ」

そう言いながらマサムネの部屋に向かった。

「うっ、うっ……うおおおおおおおおおおお！　お袋お  
おおおおおおお！」

マサムネの暴走限界はリミットブレイクした。

【マサムネの家：お風呂】

「うゝ何なんだあの母親は。本当に親か？ 人間か？ 子供の親か？」

風呂場でマサムネは体を洗いながらいろいろ考える。

「モグ。モグ」

「ああ、シモン。俺の理解者はお前だけだよ」

「モグリユ！」

「そろそろ上がろう。まだ脱衣所に人の影はない。あの母親がミズホちゃんをあおる前に」

そう言つてマサムネは風呂からあがり脱衣所に出た。

「ふう。しかし今日寝る時はどうなってしまうのか」

《ガラッ》

「へ？」

「あ！」

突然廊下への扉が開きミズホちゃんが現れた。  
そしてマサムネは何も着ていない。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおお！」  
「きやあああああああ！すいませええええええん！」

叫び声とともにミズホは走り去り、マサムネは扉を閉めた。

（なにこれ！ 普通逆でしょう！）

マサムネはその場にへたり込む。

「モ、モグリユウ……モ、モグモグ」

「ああ、ははっ！ ありがとうなシモン」

「モ、モグググモグリユ！」

熱い信頼関係は深まり、男と女の関係は深まったのかは分からない。

【マサムネの家：マサムネの部屋】

「あれ？お袋。ミズホちゃんは？」

「帰ったわよ……なにがあつたの風呂場で」

「お袋が考えてることとは違うと思うよ……」

そんなこんなで怒涛の一日は終わる。

次回に続く。

**第三壞 親って何なんですか？ 精神道徳って何！？（後書き）**

そろそろ旅に出ます。

時間がぐんと飛びます。

その間に起こったことをダイジェストで行きます。

第四壞　ダイジェスト。　でもいろいろあつたんだよ本当に（前書き）

いつもより短いです。

#### 第四壊 ダイジェスト。 でもいろいろあつたんだよ本当に

【それからそれから】

「簡易テントに懐中電灯と。なんかキャンプに行くみたいな用意だな」

「モグリユ。モグモーグ」

「はいはい。ポケモンフーズもね。大事だな」

マサムネは出発の準備をしている。

しかしあれからと言う物のいろいろあつた。

親達によるくつつけ合い

親達は父親・母親ともども知り合いだったらしく。どうやらマサムネとミズホをくつつけたいようだ。そのために何かあるたびに二人きりにしてくる。マサムネはそこはあえて何事もないように普通に進めた。ミズホは顔を赤くしていたが。あえてのスルーである。

ポケモン同士の友情

なにも言うまでもないだろう。  
二匹はマサムネ達が二匹きりにされている間  
これからについて話し合っていたのだ。  
いろいろ大丈夫なのかと……

二匹の心は一つになっていくのであった……

オーキド博士の3人目の孫

三人目の孫のグリーン君とマサムネは出会った。

彼はクールな少年のように感じた。

彼の母親はミズホの妹さん。

つまりはミズホのいとこである。

しかし好きなタイプの女性はミズホではなく

姉のナナミさんのようである。

報われない話だ。

そして父親から

マサムネは仕事で家にめったに帰ってこない父親から

送られてきた荷物をひらいた。

中には捕獲用のボール数種とマサムネ好みの服が入っていた。

父親からの思いを受け取りマサムネは《ちゃんとした》旅への思いが強くなった。

「じゃあ、行ってくるよ。チャンプになって帰ってくるわ」

「楽しみにしてるわよ」

いつもの信頼した親子関係。

「ミズホもがんばるのじゃぞ」

「はい！」

「これは仕事でこれなかったミズホからのプレゼントじゃ」

「お母さんからですか。大事にすると行って下さい」

何やら家族との関係が覚めているような感じた。

（ふむ。考えてみれば俺とミズホちゃんをくつつけようとしていた時も会話していたのは電話だった……親子であまり会えていないのか？）

ミズホの親はミズホのことが大事なのだろうが。

その気持ちをミズホはわかっていないのだろうか。

いろいろ成長していても10歳だ。

15歳のマサムネとは心の成長度は違うだろう。

「あ、うん。さて、ミズホちゃん。出発しようか！」

「はい！ 行きましょうマサムネさん！」

「おおっと。待ちたまえ二人とも」

いよいよ出発と活き込んでいるとオーキド博士が話しかけてきた。

「このポケモン図鑑を持っていくといい。未完成でカントのポケモンしか調べられんがの」

「図鑑ですか。ありがとうございます」

「ありがとうございます！」

そう言つて二人はポケモン図鑑をオーキド博士から受け取った。

「シモンの事は調べられないんだな」



「モグウ」

「すまんのおく他の地方の博士たちとの図鑑制作用データの交換が  
終わってなくての。間に合わなかったんじゃない」

「いえ、それでも嬉しいです」

そう言いながらマサムネはポケモン図鑑を服のポケットにしまった。

「では、気をつけていくのじゃぞ」

「マサムネも気をつけるのよ。おばあちゃんにはなりたくないわよ」

見送りの言葉にしてはおかしいものだ。

そもそも何度も言うが二人はまだ未成年で結婚できる年齢でもない。  
何かあったらそこで人生が終わりだ。

「なにもおみるわけありませんよ、お母様」

「わかってるわよ、そんな事」

「まあ、今はって言葉もつくけど」

「なら落としてきなさいよね」

「無論」

二人はこそそと会話しているのをミズホは少し離れたところから  
不思議そうに見つめていた。そして……

「では、そろそろ行くとしましょうか！ ミズホちゃん」

「あ、はい！」

そんなこんなで二人の旅は始まる。

その二人の背後には二匹のポケモン。

二人と二匹の長い物語はここからスタートするのである。

「おい。ミズホちゃん！ 下着忘れてるわよ。特注品でしょお！」

「なっ！ なあああああああ！」

ミズホは荷物をひとつ忘れていたのであった。

「あれ、勇みよく出発して盛り上がっていたのに……」

「ガメメメ……ガメガアアアアア！」

「モ、モグモグ？！モグモグモグモ？！」

そんなこんなで旅は始まる。

次回に続く。 続くったら続く！

第四壊    ダイジェスト。    でもいろいろあつたんだよ本当に（後書き）

いよいよ旅の始まりですよ。

第五壞 バトル？なんだよそれ。あるのは男の花道よ！（前書き）

タイトル。

## 第五壊 バトル？なんだよそれ。あるのは男の花道よ！

### 【一番道路】

「いやはや。災難だったねえミズホちゃん」

「はうううう……」

ミズホは顔を赤くしている。

言うまでもなく恥ずかしいのだ。

（はうううう。やっぱり私は普通じゃないんですう！ 嫌われますう！）

実際そんなことはないのだが、乙女心とは複雑なものである。

「それはさておき。ボールは持つてるよね？」

「あ、はい。お祖父ちゃんにモンスターボールをもらいました」

「ああ、普通のやつね。俺は親父からもらったこの数種のボール」

マサムネが持っているのはジョウト地方でぼんぐりと言う木の実に作られる

特性のボールである。マサムネの父親がガンテツ氏に頼み作ってもらったのだ。

「す、すごいです！ あの有名なガンテツさんが作った特性ボールですか！？」

「そう。これを用意してくれた親父には感謝せんといかんね」

「お父さんですか……」

「むっ……とにかくだよミズホちゃん！ ポケモンを戦わせ捕獲す

る！　それがポケモントレーナーと言う物だよ  
「はいです！」

マサムネは少しさびしそうな顔をしたミズホを元気づけた。  
それを聞いてミズホは元気に返事をした。そして揺れた。

「う、む。よし！　とりあえずトキワシティに行こう！」  
「はいです！」

そんなわけで草むらを歩いて行く二人。

「ポッポオ〜！」  
「おお、ポッポだ、ポッポ！」  
「つ、捕まえますか！？」  
「うゝん。ポッポだしなあ……」  
「モグリユ！」  
「お、やる気だなシモン。よし初バトルだ！」

「こうそくスピンで終わりだ！」  
「モグモグモグリユウウウ！」  
「ポオポオオオオ！」

あっさりとポッポを倒した。  
レベル差と言う物なのか。

「モググ！」  
「さすがだ。シモン……おや？　今度はコラッタの登場だ」

しかも4匹。コラッタの群れだ。

「あの、マサムネさん？ 4匹いますけど？」

「倒す！ 2対4だけど倒す！ 道理は俺達でぶっ壊す！」

「え、あ、それでいいんですか？」

「いいんだよ！ 行くぞおおおシモン！」

「モグツモ！ モグモ！」

そう言々とマサムネとシモンはコラッタの群れへ駆けだした。

「え、あ、ええと……行くよトカミ！」

「ガ、ガメガアアアアア！」

「へっへへ……ついたぜトキワシティ」

「あ、あうあう……あの、私が襲われそうになったところを助けてもらった時の怪我が……」

「ふっ！ 男つてのはなあ！ 少しぐらい怪我があった方がいいもんなんだよお！」

「モグウ！」

マサムネとシモンはミズホとトガミの前で仁王立ちして男らしく語っている。

「はあ、はううう」

（か、かつこよすぎます！）

「ぜ、ゼニィ……」

なおトガミはボロボロだ。

「へへっ。まアなんだな……ポケモンセンターに行こうぜ」  
「あ、はい」

そう言い、マサムネ達はポケモンセンターに向かった。

「しかし……ここにいるトレーナーは年下ばかりだなあ」  
「まあ、10歳から旅ができるという決まりになっていますし。すぐに出るこの方が多いんですよ」  
「なんか年上みたいに言うね」  
「私ももうすぐで11歳です。出発が一年遅れてたんです」  
「え？なぜ？」  
「……秘密です」

そう言うとミズホは少しうつむいた。

「ふむ……ま、人には知られたくない秘密ってのはあるもんだわな」  
「マサムネさんにも？」  
「おいおい。そう言うのは聞かないって話だろ」  
「そう、ですね」

二人の仲は少し進展したのだろうか……

「トレーナーにはタダで料理って言うからどんなものが出ると思っ



たらこんなものだったな」

「た、タダなんですから文句なんか言っちゃだめですよ！」

「あ、あの、声、小さくな」

別だん不味いというわけではないが、美味しいというわけではない。  
マサムネが自分で作るレベルの料理より下と言っくらしいの美味しさ  
なのだ。

マサムネの料理の腕は親直伝であり。そこらの家庭料理などは軽く  
超えるほどである。

「おやおや、大声で凄いいこと言っねえ」

「あん？ 誰だ？」

どうやらマサムネよりは年下だろっ少年だ。

「なんだあ、お前？ まア無礼ってのはわかるけどよ。 お前が  
出てくる必要があるのか？」

「いや、ただよくそんなことがいえるなっと思ってさ」

「ふ、俺の料理の方がうまいからさ」

「君がか。どうやら年上のようにだね」

「わかっててそのしゃべり方が」

マサムネは少し少年を睨む。

「マ、マサムネさん？ あの、喧嘩は……」

「いや、喧嘩はしてないよ。別にね」

「ふふっ。そうだね。僕が話しかけたのが悪かったかな」

「ただ年上へのちゃんとした対応ができてなかったのが気に障っ  
ただけだよ」

「ふふっ。ごめんなさい。 そうだね僕の名前を名乗っておくよ。僕

の名前は『カナデ』。よろしく」

「？カナデ？ 女の子みたいな名前ですね」

「……なあミズホちゃん。この子は女の子のようだ」

「ふえ？ ふええええ！」

「あ、あの、声、小さくな」

この出会いは一応の出会い。

これから先の出会いの一つにすぎない。

続くよ

**第五壞 バトル？なんだよそれ。あるのは男の花道よ！（後書き）**

戦闘描写は重要なときのみ。

なぜなら熱血度をたびたび消費するわけにはいかない。

第六壞 ヘルアノドヘウソツテのはこのことだよー！(前書き)

だいたいヘル。

## 第六壊 ヘルアンドハウンってのはこのことだよ！

【トキワシティ：ポケモンセンター宿場・集団個室A】

「いやあ、悪いね。二人だけの空間を邪魔して」

「ぺ、べべべ別に私達はそんななかではありませんからあ！」

（なにその否定。少し泣いてるようにも聞こえる不思議）

「そ、そうかい」

（カナデちゃんがちよつと引いてるじゃないか。バレバレだよ！）

トキワシティのトレーナー達が止まるための施設。

ここは二段ベットが4つあり4人まで泊まれる。

今日は満員まであと一人と言うまで宿泊トレーナーがいるらしい。

そのためこの三人でこの個室で泊まることになったのだ。

「そっぴや、カナデはこの出身なんだ？」

「僕？ 僕はニビシティ。と言っても引越してきたばかりなんだ」

「カナデもか」

「カナデもと言うと。あなたも？」

「ああ、イツシュからな」

「それは遠いところを。僕はハウエンさ」

「ハウエンかあ。俺の知らないポケモンもいるんだろっな」

「まあそっだね。僕のポケモンは明日にでも紹介しますよ」

カナデはマサムネに対してのしゃべり方は夕食時と違い丁寧になっている。マサムネの言葉が通じたのかもしれない。

「そうか。じゃあおやすみ」

「モグウ」

マサムネはシモンと一緒に寝ている。

ちなみにトガミはミズホと一緒に寝ていない。

以前に窒息死しかけるほどに苦しんでいたらしい。

「おやすみなさいです」

「おやすみ」

「ん……む、朝か」

「モグウ……」

マサムネは目が覚めてベットから出る。

「おや、カナデがいないな。顔でも洗いに行ったのか？」

「モグリユ？」

どうやらカナデはマサムネより先に起きていたようだ。

「いい時間だし、ミズホちゃんを起こすか」

そう言いながらミズホが寝ているベットに近づくマサムネ。

「ミズホちゃん。朝だよ」

「ふみゅっ」

「起きないなあ……ミズホちゃん！朝だって！」

「はあくみゅ！」

「グオボア！」

奇妙な声を発したと思った瞬間

マサムネはミズホに捕まってしまった。

「うお。こ、これはああああ！」

これぞトガミが窒息死しかけた技。

『地獄の楽園』である。

「く、こんな意志のない状態でやられてもうれしくない！」

そう言つてマサムネは『地獄の楽園』を自力で脱出したその時。

「ほえ？」

「あ！」

ブチュ？

ガチャ

「ふう、やはり朝は少し歩くのが……あ、ごめん。ごゆっくり」

パタン

「ふ、ふぎやあああああああああああ！」

「……ふぐう」

「モ、モグウ!？」

マサムネはその場に倒れた。

「ふぎゃあ……あ!マ、マサムネさあああん!」

「私のせいで……」

「いや、いいんだよ」

「いやあ、空気呼んだのにそのまま行かなかったのかい」

「いや、呼んだて……」

気を取り戻したマサムネは泣き続けるミズホと  
残念そうにしているカナデに言葉をかけていた。

「まあ、いい。とりあえず着替えよう。俺は少し席をはずすよ」

「あ、はい」

ガチャ

「しかし。なんかポップとコラッタの大軍以外と戦った記憶がない  
な。なんかもつと強い奴と戦いたい!」

「モグっ!」

少し戦いに飢えている二人。

マサムネはジャージ姿でポケモンセンター周辺の公園を走っている。



「かと言って旅始めだしなあ。適度な強敵いないかなあ」

「ならば拙者と勝負するでござる」

「え？ 誰？」

「拙者はむしとりしょうねんのカナブでござる」

鎧を身にまとったむしとりしょうねんのカナブが話しかけてきた。

「バトルの申し込みか？ しかし俺は旅を始めたばかりで」

「拙者も旅を始めようとしていたところでござる」

「お、そうなの？」

「うむ。拙者はトキワ出身トキワ育ちの虫好き男児でござる！」

何やらかつこいいポーズをとるカナブ。

「でもちょうどいいな。まあジャージ姿で悪いが。朝一バトルと行くか！」

「モグウ！」

「では行くでござる！ 行くでござるカイのしん！」

「ロオ ス！」

カナブはカイロスを繰り出した！

いよいよ戦いが始まる……

「おそいですね、マサムネさん」

「女にも何かあるように男にも何かあるものなんだよ」

次回に続く

第六壊 ヘルアンドハウってのはこのことだよ！（後書き）

むしとりしようねんのカナブ君

モデルは言わずもなが初代アニメ四話の

むしとりしようねんです。

サムライしようねんのほうが正しいのかもしれないけど。

見たのが当時放送していたものなので記憶があやふやです。

第七壞 熱血とは！ 心のつながりとは！ さあ、戦いだあ！（前書き）

読者のみなさん！ バトルですよ、バトル！

第七壊 熱血とは！ 心のつながりとは！ さあ、戦いだあ！

【公園：中央広場】

「カイのしんか。いい名前だな」

「そうでござるか？ そう言ってくれたのはお主が初めてでござるよ」

「でも名前ならおれのシモンも負けてはいねえ！」

「うむ。何やらかつこいい感じの名前でござるよ」

「だろお？ よっし！ノリノリになってきたとこで始めっか！」

「ござる！」

中央広場のフィールドでモグリユーのシモンとカイロスのカイのしんが向かい合っていた。どうやらやる気満々のようだ。

「行くぜっ！ ひっかくだ！」

「モオグリユ！」

シモンはカイのしんめがけて突撃する。

「ただの突撃でござる。そんなの横によければいいだけでござる！」  
「ロオス！」

俊敏な動きでカイロスは横によけようとする。

「ところがどっこいだ！ 緊急ブレーキでこうそくスピンロケット  
アタックだ！」

「モオオオグリユウウウ！」

ひっかく攻撃のために加速したスピードでその場にとまった瞬間  
ロケットのごとくカイのしんに向けてこうそくスピンをした。

「な、なんと！ でござる」

「加速+こうそくスピンによるロケットのようにつっこむ！」

普通のこうそくスピンのさらに倍速のこうそくスピン。  
まさに高速回転するドリルのごとく……

「モオグウウウウウウウ！」

「ロオオオオオス！」

カイのしんに攻撃は直撃する。  
しかしカイのしんは倒れない。

「ちっ。もともと威力の低い技だったからな……」

「モグア！」

「ロオス……」

「むむむ。旅始めとは思えないほどの戦法でござる……」

「旅始めとか戦法は関係ねえ！ 俺達は熱血で進むだけよ！」

「ふむ。ならば拙者らも負けられんでござる！ カイのしん！」

カナブがそう叫ぶとカイのしんはシモンに突撃してきた。

「突撃してきたら横によけるだけ。さっきおまえの言ったことだぜ  
！」

「そんなのわかりきってるでござる！ カイのしん、しめつけるで  
ござる！」

「モグリユ！？」

横によけようとしたところをカイのしんの腕につかまりしめつけられる。

「どうでござるか！ 手を伸ばせばよける前に捕まえられますぞー！」

「そうね。さすがだ。感動できた。だが、無意味だ！」

「モオグリユ！」

シモンはこうそくスピンによりしめつけから脱出した。

「な、なんでござるとお！」

「何でもかんでもきくと思うなよお！」

脱出したシモンは空中にいる。

「さあ！ これで終わりだぜえええええええ！ 超落下ひっかくううううううう！」

「モオグウ！モオオオオオオグ！」

「ロオオオオオオス！？」

落下速度が追加されひっかくの威力は倍増する。  
そしてっ！

「カ、カイのしん！？」

「ロオース……」

カイのしんは戦闘不能のようだ。

「俺達の勝利だっ！ ふふっ始まるぜ俺達の真の始まりが！」  
「モオオオグ！」

「か、完敗でござるよ。レベルもそれほど差がないと言つのに負け  
てしまったでござる。」

「いや、カナブの戦闘もなかなかだったよ」

「カナブ……うむ。マサムネ殿、拙者また強くなるでござる。その  
時また戦おうでござる」

「ああ、わかったぜ！」

そう言つてマサムネとカナブは熱い握手をした。

「さて、拙者は自宅に戻つて出発の準備をするでござる」

「そうか、旅に……ん？　つてかミズホちゃん達の事忘れてたしい  
！」

「モモグウ！」

「む、旅の仲間がいたでござる？」

「ああ！　待たせてるんで悪いな。じゃシーユアゲイン！」  
「よ、横文字は……」

カナブが戸惑う中マサムネは走つて宿場に戻つて行つた……

【トキワシティ：ポケモンセンター宿場・集団個室A】

「うおおおおお！　き、着替え終わった？！」

「そんなのとつくの昔にだよ。遅かったね」

「し、心配し、したん、ですよ、お」

カナデはそつけなく話しかけてきた。

ミズホは泣きそうな感じで話しかけてくる。

「あ、ご、ごめんよミズホちゃん！」

そしてつい勢いでミズホをマサムネは抱きしめた。

「俺はミズホちゃんに心配させるようなことはもうしないよ……」

「マ、マ、ザム、ネザアアン！」

「……お熱いことで……さて、僕はマサラに行くからここでお別れだよ」

「え。あつと！ そ、そうか……あれ、ポケモンの紹介は？」

「ああ、何やら君が帰ってくるのが遅くて流れたからね……」

そう言っただけでカナデはモンスターボールを取り出した。

「でてこい、カミカ」

そう言っただけでボールからポケモンが出てくる。

「チトオ」

出てきたのはクチートだった。

「僕の相棒のクチートのカミカさ」

「チト」

「ふむ、始めてみるけど口二つだなあ」

「チト」

カミカはマサムネに愛想ふりまいている。

ちなみにミズホちゃんは泣き疲れたのか寝ている。

そういうところは年相応だ。



「じゃ、元気でね。また会おう」

「ああ、またな」

そう言っただけでカナデとカミカは部屋を出て行った。

「行ったか……さて、これからどうするかな」

すやすやと腕の中で眠るミズホを見ながらマサムネはいろいろ考えた。

「寝てるよな？」

気持ちがよかった。

次回に続く

第七壞 熱血とは！ 心のつながりとは！ さあ、戦いだあ！（後書き）

なに、最後の一行で多くの人が  
多くの考えを持つだろう。

小説とはそこが楽しい。

裏第七壊 真実はいずこに…… 序盤は真実だろう……ね（前書き）

第七壊の待っていた二人の様子です。

裏第七壊 真実はいずこに…… 序盤は真実だろう……ね

【トキワシティ：ポケモンセンター宿場・集団個室A】

「マ、マサムネさんが遅いです……何かに巻き込まれたんじゃないでしょうか！」

「いや、別にそんなことないと思うけど。そんな怪事件はよくよく起こることじゃないよ」

「そ、そうですね」

二人は着替えを終えたが一向に戻ってこないマサムネのことをミズホは異常なほどに心配していた。

「いや、大丈夫だと思うよ？ 彼は弱い人間じゃないしね」

「で、ですね！」

しかしミズホの心配そうな表情は一向に変わらない。  
狭い部屋を意味もなく歩き続けていた。

「まあ、部屋は昼までに出てくれって言われてるし早く帰ってきてくれたらいいね」

「昼までについて言うのはマサムネさんも知ってますよね……な、何で帰ってこないんですか!？」

その時カナデは（しまった!）と思った。  
言わなければこの状態にはならなかっただろう。

「ふ、ふえええ〜きつと恐ろしい人たちに襲われたんですう〜」

「いや、ないと思うよ?! 彼強いから! ちゃんとしてるからさ」

！」

成長していても年相応。

やはりミズホはもうすぐ11歳になるとはいえ子供なのだ……  
それを慰めるカナデは年下なのだが。

「うわああああん！ マサムネさんが死んじゃいましゅー！」  
「大げさだよ！ 後泣き叫ばないでね！」

そっぴいながらカナデはミズホの口を押さえる。

「もが、もぐ、もぐうー！」

「なんか彼の相棒みたいになっちゃってるね。君」

「も？ もぐもぐうー？ もぐもぐうー」

『彼の相棒みたいになってるね。』カナデがそう  
言っただけなのにミズホは泣き止み目をつぶりながら体を揺らした。  
た。

（突然泣き止んだと思ったらなんだこれ？ 僕が『彼の相棒みた  
いになってるね』と言っただけ……そうか、なるほどね）

つまりは『マサムネの相棒』として自分が見られていると思っただ  
ろう。

そしてミズホは勝手に自分を相棒とした『マサムネとの未来予想図』  
を妄想していたのだ。

（やれやれだよ。まったくマサムネさんは幸せ者だね）

<ガラッ！>

「うおおおおお！ き、着替え終わった？！」

「そんなのとつくの昔にだよ。遅かったね」

帰ってきたマサムネにカナデは返事をしたすると。

「し、心配し、したん`ですよ`おゝ」

突然ミズホが妄想モードの前の状態に戻った。

（切り替えが早いよ！ 何？ 彼に妄想しているところ見られたくないわけ？！）

そうカナデが考えていると目の前でマサムネがミズホを抱きしめていた。

マサムネは気がついていないようだがミズホはにやりと笑っていた。

（そこまで計算しての泣きだったのか！？ そうなのか！？）

カナデは少し混乱している。

するとミズホは寝たようにマサムネの腕に収まった。

本当に寝ているのかはわからない。

「…………お熱いことで…………さて、僕はマサラに行くからここでお別れだよ」

そう言ってカナデは部屋から出て行こうとした。  
邪魔をしちゃいけない空気だと思ったからだ。

「え、あつと！ そ、そうか…………あれ、ポケモンの紹介は？」

「ああ、君が帰ってくるのが遅くて流れてたからね……」

そういいながらカナデはポケットからモンスターボールを取り出す。

「でてこい、カミカ」

そしてモンスターボールからポケモンが出てくる。

「チトオ」

「僕の相棒のクチートのカミカさ」

「チト」

カミカはその場でくるりと回る。

「ふむ、はじめてみるけど口二つだなあ」

「チト」

マサムネはカミカの頭をなでている。

カミカは少しうれしそうだ。

「じゃ。元気だね。また会おう」

「ああ、またな」

そう言ってカナデは部屋を後にした。

「まったく。彼は彼で、彼女は彼女で不思議だったよ」

「チトッ」

「ふふっ。カミカも気に入ったのかい。そう、面白いね」

そう言ってカナデとカミカはマサラタウンに向かった。

続く



裏第七壊 真実はいずこに…… 序盤は真実だろう……ね（後書き）

いろいろ考えることができるでしょう。

第八壞　じざるでじざる……いや、いいよ別に。（前書き）

バザールで

## 第八壊 じぢぢるどじぢる……いや、いいよ別に。

【トキワシティ→トキワのもり・入口】

「　　」

「　　」

「……ガメガ？」

「モグリユ。モーグリユ！　モグリユー！」

楽しそうにご機嫌に歩く二人と

それを見て不思議そうにするトガミ

そしてそれを横目に戦いで買ったことを自慢し続けるシモン。

「ガ、ガメガ……」

何がなんだかわからない……

自分だけのけ者にされているようにトガミは感じた。

【トキワのもり】

「さすがは虫ポケモンの宝庫だ。深い森だな」

「少し怖いですね」

そう言いながらミズホはマサムネの手を握る。

前回の一軒からなにやら瑞穂は少し積極的になり始めた。

「まあ、虫ポケモンがいるだけだろう。動物なんていやしないよ」

そもそもポケモン世界には動物がいるのか。  
絵本の中には犬が描かれていたが。

「この道に沿っていけば出られるらしいし。そのまま進めば」  
「おや？マサムネ殿ではござらんか」

マサムネがミズホに説明をしていると誰かが話しかけてきた。

「おお、カナブじゃないか」  
「偶然でござるな。そちらがお連れの方でござる？」  
「ああ、ミズホちゃんだよ」  
「あ、う……ミ、ミズホです。よろしくお願いします」

ミズホは挨拶しているがマサムネの後ろに隠れている。

「おや、どうやらマサムネ殿以外の男は苦手のようでござるなあ」  
「あの、ニヤニヤしながらそういう言葉を返さないでもらえるかな」

どうやらミズホがマサムネが好きなことは理解したらしい。

「いやいや、あからさま過ぎるでござるよ」  
「ああ、そうだな」  
「？ なにがあからさまなんですか？」  
「さらに本人は行動の意味に気がついてないようござるよ」  
「……そうなのかね」  
「？」

ミズホが天然なのか考えての行動なのかは本人以外にはわからない。

「して、ニビにそのまま向かう気でござるかな？」

「え、いや、だって別に虫ポケモン狙いじゃないし」

「いやいや、トキワの森は虫ポケモンだけではござらんよ」

「あれ、ここは虫ポケモンの巣窟だと……」

「な、何かひどい言われようでござるな。オホン。ピカチュウがいるでござるよ」

「あの電気ネズミことピカチュウがいるのかあ」

それを聞くとマサムネは道沿いを歩いて行っただ。

「あ、あれ？ つ、捕まえに行ったりしないでござるか!？」

「いや、俺の興味の対象じゃないっていうかな」

「そ、そうなのでござるか……拙者は少しこの森を探索していくでござる。では、またでござる」

そう言っただマサムネは森の中に入って行っただ。

「さて、行こうか」

「あ、は……あれ？ マサムネさん。あれ!」

「ん？ おや、あれピカチュウじゃないか!？」

目の前には少し傷ついたピカチュウが倒れている。

「……これって他のトレーナーが捕まえ損ねたやつなのかな」

「多分そうだと思いますけど……」

「しかし、俺の興味の対象じゃない。気が付いたら住処に帰るだろう。さあ行こう」

そう言っただマサムネは道を先に進む。

ポシュッ

「ん？ ボールを投げた音？」

ポウン

「マサムネさあん！ ピカチュウゲットしましたよお！」

「ええっ！？ ちょっと！ なにしてんの！？」

「私はこういうのが好きでして」

「欲望に忠実すぎる……」

そんなこんなで旅の仲間が増えたのだった

【ニビシティ：ポケモンセンター】

「……回復してきたの？」

「はい。名前はカミコにしました」

「あ、そうなんだ」

（何なんだろう。ポケモンの名前は神縛りなのかな……）

「カミコと言うとその子はメスなのか」

「はい。メスらしいですよ。後……」

「後？」

「普通にはないところがあるそうなんです。詳しくは教えてもらえませんか」

「詳しく教えてもらえなかった？ ……教えなかったってことは意味があると思う」

「わかりました。追及はしないでおきます」

（気にはなるがな。しかし聞かない方がいいということかもしれない）

「ガ、ガメガ」

「ピカ。チュチュチュ」

「ガ、ガメメ」

「チュ？ ピカチュチュ？」

「ガ、ガメガメガ」

「チュウウウウウウ！」

「ガ、ガメガメガアアア！」

「モ、モグリユ？ モモグリユ！？」

その後方ではなぜか知らないがトガミとカミコが喧嘩していた。突然の出来事にシモンは戸惑っていた。

「モグリユ！」

これからの旅が不安になるシモンであった。

「あれ、この街のジムリーダー何か今コンビで戦いを挑むトレーナー募集中だって」

「ダブルバトルと言う物ですね。最近正式ルールとして認められ始めました」

「ええと、ジムリーダータケシと弟子のコンビと戦うことになるらしい」

「そうなんですか。ちょうどよかったです！ 私達の力を見せてやりましょう！」

「そうだな！」

（そして勝った勢いで私は告白する！）

いよいよミズホの暴走が最終段階に入った。  
早すぎるような気がする。

（……なんかガッツポーズしてるけど何かなあ……）

マサムネはまさか一つ目のジム突破で告白されるなどは予想していない。

「ガ……ガメガ……」

「モ、モ、モグリユウウウウ！」

そして後ろでは惨劇が起きていた。

そしてその後、大変なことになっているトガミを見て

ミズホはあわてて回復をしに行った。

なにがあつたかは知らないまま……

続く



第八壞 つづるでつづる……いや、いいよ別に。（後書き）

ミズホちゃんはまだまだ子供なんだよってところです。

裏第八壊 いや、訳ないと……ドカーンだよ (前書き)

裏は大体マサムネ以外の視点

裏第八壊 いや、訳ないと……ドカーンだよ

【真実その？・トキワのもり】

「やって来たでござる〜」

「ロオ ス」

トキワのもりにやってきたカナブとカイのしん。

「ここで虫ポケモンを捕まえるのでござる!」

「ロオオス!」

ガサガサ

「む? 早速いたでござる! カイのしん。きあいだめでござる!」

「ロオオオス!」

「そしてお主の親から受け継いだ技! ばかちからでござる!」  
「ロオオオオス!」

ドシイイイイン!

草むらめがけて攻撃すると草むらから何かが飛び出し木にぶつかり  
カナブの前に出てきた。

「チャ、チャアア」

「ピ、ピカチュウでござるか!?」

虫ポケモンだと思っていたでカナブには予想外だった。

「む、虫ポケモンだけいるのではなかったでござるか」

「ロオス……」

「も、もう少し森の中に入ればよかったでござるかな……おや？」

カナブは森の入口から見知った顔が来るのを見つけた。

「マサムネ殿と……お連れの方でござるかな」

そう言つてカナブはマサムネ達の方へと向かった……

【真実その？・ニビシティ ポケモンセンター】

「ガメガ。ゼニゼニ」

「モグウ」

「ガメエ、ガメガメガ」

シモンとトガミは新入りの事を気にしているようだ。

「ゼニ？ ゼニガ」

「モグ、モグモグリュ」

そう言つてシモンは少し離れて行つた。

「ゼニ？ ガメガ……ゼニ？ ゼニゼニガア」

「ピチュ、ピカチュウ」

「ガメガ……ガメガメガ、ガメガメ」

「ピカ？ ピカチュ、ピピカチュ」

「ガメ？ ガメガメガメガ」

「ピ、ピカチュ！」

「ガ、ガメガ」

「ピカ。チュチュチュ」

「ガ、ガメメ」

「チュ？ ピカチュチュ？」

「ガ、ガメガメガ」

「チュウウウウウウ！」

「ガ、ガメガメガアアア！」

「モ、モグリユ？ モモグリユ！？」

少し離れていたところから見ていたシモンはなにが何だか分らなかった。

二人の争いは続いた。それにマサムネ達が気がつくまで。

本編に続く

裏第八壊 いや、訳ないと……ドカーンだよ (後書き)

訳は自分で考えてみて下さい。

第九壊 謎・ミステリー どっちも同じじゃああああ！（前書き）

考えるな、感じるんです！

## 第九壊 謎・ミステリー どちらも同じじゃああああ！

【ニビシティ付近：草むら】

「ポケモン〜ポケモン〜」

「モグリユ〜モグリユ〜」

マサムネ達は新たなる仲間を探すために草むらに来ていた。

『達』と言つてもマサムネとシモンである。

ミズホちゃんは宿場で寝ている。

今回は二人部屋だ、絶対に部屋から出ないようにマサムネは伝えている。

「ミズホちゃんなら男に襲われても過言ではない」

「モ、モモグ、モモグモモモ」

なにやら普通に話すと危ない話をしながら二人は草むらを歩く。

「いないんかなあ……いいやつ。ポップとかコラッタとかしかいないんだよなあ」

「モグウ」

そう言つてふたたび歩く。

すると誰かがいた？

「おや？ 君はここらでは珍しいポケモンを連れているんだね」

「ん？ 誰だあんたは」

「俺か？ 俺の名前はガイト。シンオウ地方の出身なんだぜ」



そう言っただけでいいポーズをしている少年ガイトを前に覚は少しひいていた。

「あ、ああ、そうなの……」

「おいおい、なんだそのひきようは」

「いや、なんかね」

「ちなみに俺はこれでも15歳なんだぜ」

「ええ！ そんなポーズとったりして!？」

「ひ、ひどいこと言うなあ……」

ガイトはがつくりとしていた。

「あと、俺も15歳さ」

「そうなのかあ。めずらしいなあ」

「事故で10歳の時旅に出なくて今まで長引いたのさ」

「おや、俺も10歳の時に事故で行けなくなっただけ……」

「同じ理由なんて意外なこともあるもんだ」

言葉が重なった。

「なあ、その事故って……」

「ん、事故の事か、あんまり他の人には言わないんだが……」

「何かにさらわれて気が付いたら病院だったんじゃないか？」

「!？ なぜその事を……」

「そして親達や世間一般には事故として見られていると」

「……そうか、なるほどな。ここで君と出会ったのも偶然かな？」

それとも……」

「必然だったのかもしれないぜ、これが」

「……そうか。まあいいさ、考えても仕方がない」

そう言つてガイトは手を横にし、やれやれとポーズをとつた。

「そんなことよりも、ここにはポツポやらしいのかねえ」

「そうだな、なにか珍しいポケモンでもないかと探してるんだが」

「モグリュー」

「オール！」

二人が話していると二人が話してる間に草むらを探索していたパートナー達が返ってきた。

「お、ガオイン。何か見つけたのか？」

「シモンも何か見つけたのか？」

「あ、そいつの名前はシモンって言うのか」

「そのリオルの名前はガオインっていうのか」

「モグモグ」

「リオルウ」

どうやら二匹とも同じ方向にマサムネ達を連れていきたいらしい。

「わあつたから引つ張るなよ」

「いったい何があるんだ？」

そう言つて二人は二匹が向かう場所へ行く。  
するとそこには……

「なあ、ガイト。こいつら……」

「ああ、怪我をしているようだが……どちらもカントーでは珍しい」

そこには傷ついたチュリネとコリンクだった。

「この近くに持ち主らしき人影はなかったのか？」

「リオル」

「足跡とか人がいた痕跡は？」

「モグリユ」

不思議な話だ。

こんな所でこの二匹がいるわけがない。

「なんでここにいいのか……」

「まあ、それは謎と言うことだろう」

「何やら因縁めいたものを感じるがな」

「そうか？ 俺たちに関係する……か？」

「わかんない。なんとなくさ」

「なんとなくか……関係なくともこういうときは言いたくなるよな」

そう言つてガイトはコリンクを抱きかかえた。

そしてマサムネはチュリネを抱きかかえた。

「で、どうする。ポケモンセンターは持ち主不明のポケモンは回復してくれないぜ」

「厄介なシステムだよなあ。盗犯などを防ぐためとはいえよ」

そう言つてガイトはモンスターボールを取り出す。

「捕まえるのか？」

「持ち主がいらないようだしな」

「自然に回復して住処に戻るかもしれないぞ」

「ここらにこいつらの住処があると思うか？」

「それも……そうだがな。 なら……」

そう言つてマサムネもモンスターボールを取り出す。

「何かこれでこいつらの自由を奪うようで嫌だなあ」

「そうだな……でも捕まえないとかわいそうな気もしてくるんだが」

「ん、そうか……そうだな。なんでだろう」

「さあな。さて……」

そう言つてガイトはボールを投げる。

マサムネもそれに続く。

「コリンクと……」

「チュリネか……」

新たな仲間を手に入れたマサムネ達はポケモンセンターに向かう。

その心はうれしさではなく、疑問など負の感情が多くを占めていた

……

## 【ニビシティ・ポケモンセンター】

マサムネ達はポケモンセンターの中に入った。

すると二人の女の子が小走りで近寄つて来た。

「マサムネさあああん」

「ガイトおおおお！」

二人同時のフライアタック！

「ぐおぼふぁー！」

「ぎゃふうお！」

こうかはばつぐんだ！

「い、いきなり突撃はやめろと言っただろ。ユウミ」

「ミズホちゃん。なんか息が苦しいですよ……ですよ」

「ってあれ？」

「なんか同じような状況だな」

マサムネとガイトは上にいる女の子をどけて立ち上がる。

「そちらもお連れの女の子と二人旅？」

「そう言うお前もそうだったのか」

「あれれ、マサムネさんそちらの方は？」

「ガイトゝその人誰なの」

「俺はマサムネ。このミズホちゃんと一緒に旅をしている」

「そして俺はガイト。従兄妹であるユウミと一緒に旅していると言  
うわけだ」

「なんか似てるな」

「微妙に違うがな」

「似ているところと言つと？」

「体型とかだろ？」

「ふふっ」「」

「なに笑っているんです？」

「そうだよ」

不敵に笑う男組。

それを見て不思議に思う女組。

「って、こんなことやってる場合じゃない」

「そうだったな。回復に行こう」

そう言って回復コーナーに二人は早歩きで向かった。

「あ、待って下さいよぉ」

「ガイトゝおいてかないで」

次回に続く

第九壞 謎・ミステリー どちらも同じじゃああああ！（後書き）

過去っていうのは戻れないものです。

小学生・中学生・高校生などが青春と言われる時期です。

つまりは青春を楽しめる時期こそが子供なのです。

つまり自分は青春を楽しめてなかったということなのですよー

第十壊 - 1

クン

ット

(前書き)

感想募集中です。



【ニビシティ：ポケモンセンター宿場・個室B】

「と言っことがあつてだな……」

「そうなんだあ」

「そうなんですかあ」

待っていた女子組は簡単に納得したようだ。

「しかし二人用の部屋に四人は少しきついな……」

初めは二人で泊まる予定だったのだが、何やら人数が切羽詰まったようで

この部屋に四人で泊まることになってしまったのだ。

「あの二匹は明日には怪我が完全に治ると言うことだ」

「そうか、それは良かったな」

マサムネの表情が穏やかになる。

「しかし謎は謎のままか……」

「まあ、深く考えることはない。無事ならそれで終わりだ」

そう言つてマサムネは話を終わらせる。

「そついや二人はジム挑戦の旅をしてるんだよな？」

ガイトが問いかけてくる。

「ああ、今日に二ビのジムリーダーと弟子を二人のコンビネーションで倒したぜ」  
「なんだと！」

マサムネはガイトの肩を持ち揺さぶる。

「お、おうっ！ いや、何だと言って言われても……」  
「……いや、それもそうだ。しかしいつの間に？」  
「何時の間にと言われてもなあ。君に会う前かなあ」  
「草むらにいたのは戦力の捕獲じゃなかったのか」

マサムネはガイトの方から手を引き  
腕を組みながらそう言う。

「あれは経験を積ませて強くしてただけだよ」  
「レベル上げてか」

「ああ、明日にコリンクの怪我が治ったらハナダに行こうと思っ  
ている」

「そうか。何かあってすぐに別れることになるとは」  
「なに、俺達はライバルみたいなものなんだぜ」

サムズアップしながらそう言うガイト。

（何でもかんでもかっこつけて……）

「ガイト、かっこいい！」  
「な、なんだよいきなり……」  
「べっつにいい」

突然ユウミがガイトに抱きつく。

「なに見せつけてるんですか……」

「ミ、ミズホちゃん？　なんか声に怒りが込められてるようなのですが……」

（いや、なんだ。そう言う感じだとパレパレだよ……バレてないと思ってるのミズホちゃんだけになるよ！）

「なんでそんなに怒ってるのミズホ？」

のほほんとユウミがミズホに問いかけている。

「空気を読むんだユウミ」

「？　何だかわからないけど空気読む」

（天然と言うのかこれは……俺はこのノリにはついていけない……ガイトはすごいわ……）

「ま、まあ、とにかくだ。今日は寝ようぜ。明日の朝に俺は出発する予定だからさ」

「そうか、そうだな。とりあえず俺とガイトは寝袋で床に……」

「やだあゝ僕はガイトと寝るんだあゝ！」

（ば、僕っ娘！？　ってそこじゃねえ！　一緒に寝るだとお！？）

ユウミの衝撃発言に驚くマサムネ。

しかし驚いているのはマサムネだけだ。

（これは……ユウミとガイトさんが一緒に寝れば私もマサムネさん

と！)

(またか……やはりユウミも子供だな……)

ミズホはいろいろ企み、ガイトはいつものことと呆れていた。

「わあつたよ。一緒に寝てやるよ」

「わーい」

「!？」

そう言つて、ガイトとユウミはシングルベットに二人で入った。

「……なにこれ。俺の考え方がおかしいのか？」

「さあ、マサムネさん。寝ましょう」

ミズホがマサムネの肩に手を置きベットに引き込む。

「え？ いや、その……し、シングルベットですよ？」

「なにを言っていますか？ 隣の二人も同じじゃないですかあ」

「あ、うん」

「えへへ。初めての二人で夜に一緒に寝るってやつですねえ」

「な、なに？ そ、そう言う言葉はどこで覚えるの!？」

「え、この野球ゲームですよ」

ミズホちゃんは某全年齢野球バラエティゲームを荷物から取り出しマサムネに見せていた。

「この全年齢対象ギャルゲーめがああああ！」

「うるさーい」

「ごめんなさい」

マサムネが叫ぶとユウミに怒られた。

そして気がつくともサムネはペットのすぐ横まで引きずられていた。

「さあ、寝ましょう！」

「さよなら、俺の春にできる花の実……」

よし、バネ持つてこい

セツト……ヴァル……エンチン……

「はっ！ 朝か……はむにゆう！」

前回の死の楽園再び！

（うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！）  
「ふへへ〜マサムネさあ〜ん……」

しかし今度は少し違った。

顔ではなく背中に押し付けられているのだ。

これは死の楽園なのだろうか……

いや、ただの天国である

（うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！）

マサムネは天国を楽しんでいた。

すると、隣のベットからライトが出てきた。

「ふあゝ朝か……ん？　おやおや。まあ始めはなれんわな……楽しんどけよ」

そう言つてガイは部屋の洗面所に向かった。

「ガ、ガイトおおおおお！」

「うるさい！」

ブンッ！

「プゲラッ！」

隣のベットから枕が飛んできた。

そこでマサムネの意識は途切れる。

後半に続く

第十壞 - 1

クン

ット

(後書き)

明日は14日か。

義理はもらえるのは確定してるんだけどな。

本命など見たことない。

第十壊・2

攻守逆転劇は知らずのうちに起きていたのよ！（前書き）

前半のあまりなものなので短いです。



第十壊・2

攻守逆転劇は知らずのうちに起きていたのよ！

「……さん……ムネさん」

（ん、あ……ん……な、何だ……）

「……ムネさん。マサムネさん！」

「うおわっ！？」

ポフン

「マサムネさん。味わいたいなら言ってくればいいじゃないですか」

「ふい、ふいひまふー！」

ミズホの前回と反応が違いすぎる。

前回のカナデの言葉により何かが変わったようである。

「朝から何やってんだ？ とりあえず着替えろよ。イチヤイチヤは俺らがいなくなっただけにしな」

そう言っただけでガイトは荷物を持ちユウミとともに部屋を出て行った。

「あら。いろいろ見られてしまいましたね」

「なんかいろいろ誤解が生まれつつある」

その後マサムネは力押しでミズホを部屋の外に出した。

その時ミズホはいろいろ言っていたが何もなかったことにした。

【ポケモンセンター前】

「チュリ」

マサムネの肩の上にいるのは昨日のチュリネだ。  
元気になったようでマサムネにすりよっている。

「リン！」

コリンクもガイトの足元で元気に声をあげている。

「行くんだな」

「ああ、早くハナダに行きたいんでな」

「またな、ポケモンリーグで戦おうぜ」

「ま、それまでにまた会うかもしれないけどな」

「かもな」

「男の友情ってやつだね」

「ゆゝじょ」

ミズホとユウミはそれを離れた所からじっと見ていた。

「てなわけで。またな」

「ああ、またな！」

そう言っただけでガイトとユウミはおつきみやまへと向かって行った。

「行ったか……」

「行きましたね」

「所でなんで俺達は手をつないでるのかな」

「気にしないでいいんじゃないですかね」

「そう……」

（攻守が逆転してる気がする……何時から逆になった！ 昔はもつと恥じらいを持った子だった！）

何が起こるか分からない。

それが人生である。

次回に続く

第十壊・2 攻守逆転劇は知らずのうちに起きていたのよ！（後書き）

セツトヴァルエンチン St Valentine

裏第十壞 別れた後に何があったのか（前書き）

カナブのしゃべり方はお気に入り。

## 裏第十壊 別れた後に何があったのか

【トキワのもり】

「うゝむ。キャタピーやビードルばかりでござるよ……」

カナブはむしポケモン捕獲のためにトキワのもりを搜索していた。

「まったく。拙者むしとりしようねんでござるがバタフリーやスピアーには興味ないでござるよ」

カナブはむしとりしようねんの家系に生まれるがめちゃくちゃむしポケモンが好きなわけじゃない。

「何かもつとこつ……かつこいいという感じのポケモンがでござるなあゝ」

ブンっ

「カイロツ！？」

「ござつ！？」

カナブ達は突然何かに襲われた。

「な、何なのでござる！？」

「ストラアゝ」

「ス、ストライクでござるか！？ な、なんと！ か、かつくいい！ でござる」

そこにはストライクがいた。

人を襲ってくる時点で凶暴なのはわかる。

「もえるでござるううううううう！」

「ストラア！」

叫ぶカナブにしんくうはが飛んでくる。

「ロオツス！」

それをカイのしんが止める。

「カイのしん！」

「ロオオオオス！」

カイのしんの気合がたまっていく！

「ロオオオオオス！」

ストライク目指し突撃するカイのしん。

「ストラアアア！」

突撃、そして衝突する二匹。

「ロオオオス！」

「ストラアア！」

相打ちになる……だが。

「ロオオオス！」

弱りながらもカイのしんはストライクをつかむ。

「ラアアイク！？」

「ロオオオオオ！」

そのままストライクを押し、そのまま木を駆け上がる。  
そしてっ！

「ロオオオオオス！」

急速に下に落下する。

「ラアアアアアアイック！」

高空からの落下攻撃……

カイのしんの俊敏さとカイロスと言うポケモン自体が持つ力を使った  
カイのしんオリジナルの攻撃とも言えるだろう。  
駆け上がるものがなければできないが。

「ロオオオオス！」

「や、やったでござるよ。カイのしん！」

そう言つてモンスターボールを投げるカナブ。

ボールは揺れる、揺れる、揺れる……

そして……

「や、やったでござるよカイのしん！」

「カアアアアイ！」



抱き合うカナブとカイのしん。

「あ、す、少し痛いぞ……」

顔に角が当たった

本編に続く

裏第十壞 別れた後に何があったのか（後書き）

初期は技が少なくて困る……

第十一壊 ダブルバトル！ ポケとツツコミのほかのあと一人の必要性！（前書  
ニビジム戦です。

## 第十一壊 ダブルバトル！ ボケとツッコミのほかのあと一人の必要性！

【ニビシティ：ニビジム】

「と言うわけで、ダブルバトルをしに来ました」

「はい。今現在は二人一組のダブルバトルしか受け付けておりません」

「いや、だからですね」

「はい。お申込みですね」

何かおかしいような気もするが受付を済ませ1時間後にバトルと言うことになった。

念のために言うが受付は決まりなので今ダブルバトルしか募集していないと言ったのである。

「と言うわけで、ミズホちゃん。戦いの準備……はできてるね。——時間どうしようか」

「ならあっちの茂みの駆け出にゃんにゃん……」

「セタアアアアアプ！」

「X！？ じゃなくてなんですか？」

「そう言うのはやめようね……」

「大丈夫ですよ。パ ケに比べたらまだまだですよ」

「……そのベンチでこれからについて話し合おうか」

「え、もう未来設計図を？」

「……」

そしてマサムネ達はベンチに座って無言のまま時間が過ぎて行った。

【ニビジム：バトルフィールド】

マサムネ達は準備ができたようなのでバトルフィールドに呼ばれ連れられた。

（岩でできたフィールドか……下は地面なのか……）

下は地面である。

シモンなら潜ることもできるだろう。

そして岩のオブジェ。

これもうまく使えば戦いを有利に進められるだろう。

「お前達が今日の挑戦者だな」

「へっへへ、タケシさん。今日こそ俺の本気を見せてやりますよ！」

「何時もお前は言葉だけだぞ、トシカズ」

「うっ！ もう油断しませんぜ。さあ挑戦者ども！ お前達がタケシさんや俺に戦いを挑むのは一億光年早いってことを思い知らせてやるぜ！」

「それは距離だ……」

何やら前で漫才をしているのがジムリーダーと弟子のようだ。

「あゝっと、準備OKでいいのか？」

「ああ、準備はできている」

「へっへへ、お前らなんか役不足だぜ！」

「それを言っなら役者不足だ……」

（なんだこの漫才は……調子が抜ける……）

そして戦いは始まる。

「よし、行ってきたトガミ！」

「男の生きざま見せてやれ！ シモン！」

「ガメエ！」

「モグウ！」

シモンとトガミがバトルフィールドに出る。

「行つて来い！ イワーク！」

「行くぜ挑戦者！ サンド！」

「イワアアアク！」

「サアン！」

イワークとサンドが出てくる。

(……強そうだな。まア戦わんと実際わからんがな。これがな)

「では、それぞれポケモンは各自一匹ずつの2対2のバトルとします！」

審判がそう言うと全員がうなずく。

「では、始め！」

そして戦いが始まる。

「イワーク！ がんせきふうじ！」  
「ワアアアク！」

空中から岩石が落下してくる。

「なっ！ イワークがこんな技を覚えてるとは！ よけるシモン！」  
「よけてトガミ！」

二匹は上から落ちてくる岩をよけ……

「よけてもそれで終わりやせんぜえ！」  
「サアン！」

落ちてくる岩の上からサンドが奇襲をしかける！

「落下傘こうそくスピン＋岩石つぶて！」  
「ガ、ガメガッ！ ガメエー！」

その攻撃はトガミに当たる。

「ああっ！ トガミ！」

そしてすべての岩石は落下し障害物となる。

「ガメエ……」  
「モーグリユ！」

シモンは攻撃をつまくよけるがトガミはサンドの攻撃を食らってしまふ。

「これは、弱点である水のトガミを狙ってきているのか……」

（まあ、どちらも同じだな……）

「へへへっ！ このままのテンポで行くぜ！」

「ならばサンドをこちらにも狙わせてもらう。シモン！」

「モグリユ！」

そう言つてさっき落ちてきた岩石の上をシモンがはねる。

「サ、サアン！？」

シモンがサンドの周りを駆け巡りサンドをかく乱する。

「ちょこまかと……ふん。さっきの攻撃でゼニガメもあまり動けないだろ。モグリユを狙え！」

サンドはモグリユを追いかけて攻撃しようとする。

「ふっ。今だぜ！」

「はい！」

「ガメガアアア！」

こうそくスピルしながらサンドに接近するトガミ。

「しかしあまい」

「ワアアアク！」

ドスン！



「ガメエ！」

「ゼニガメ、戦闘不能！」

サンドに接近していたトガミはイワークに落とされる。  
そして、審判の言葉が響く。

「おおつ。さすがはタケシさんだ」

「ゼニガメの事を無視するからこうなる」

「その通りだ」

「なに？」

「お前ら今のでシモンの存在を一瞬忘れたな」

そう、その時すでに一番大きな岩のオブジェをシモンは駆け上がり  
きっていた。

「行くぞシモン！ 超落下メタルクロオオオオオオこうそくスピ  
イイイイン！」

「モオモモモモオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
！！」

高速に回転しながらのメタルクロー。

この攻撃はよけることは難しいだろう。

「グウウウウウウウウウリユウ！」

「ワアアアアアアアアアアアク！」

「イワーク！」

イワークは倒れる。

「イワーク、戦闘不能！」

審判の声が再び響く。

「そ、そんな……タケシさんが……はっ！ モグリューはどこだ！？」

まさかまた上にと上を探すサンド。

「残念！ 下だぜえ！」

「なっ！」

サンドの真下からシモンが出てくる！

「みだれひつかきい！」

「サアアアンド！」

サンドはよろめく。

そして近くに会って岩盤の上にシモンは行く。

「よし、落下こうそくスピーディイン！」

「リュウウウウウウウウウウウウ！」

そしてその攻撃がサンドにクリティカルヒット！

「サ、サアアン！」

「サンド、戦闘不能！ 勝者、挑戦者チーム！」

そして、戦いは終わった……

「昨日といい、今日といい。やはりダブルバトルは相方と息があつてないとつらいものだな」

「そ、そりゃないっスよ、タケシさああん」

「……とにかくだ、このメダルを受け取ってくれ」

そう言つて猛はメダルを二つ差し出す。

「よおおおおおし！ グレーバッチゲエエエツト！」

「モオオオオオオグリユ！」

「……うん。この後だ」

「ガメ？」

そしてマサムネ達はポケモンセンターに向かうことにした。

続く

第十一壊 ダブルバトル！ ポケとツツコミのほかのあと一人の必要性！（後書

タケシなどはダブルバトルにあまりなれていません。  
このごろルールになっただけです。

試験的にテストとしてやっている期間だけです。

## 第十二壊 そう！ 基準があればいいのだっ！

【ニビシティ：ポケモンセンター】

「モーグリユ」

「ガメガ……」

「モ、モグモーグ！」

「ガ、ガメガ？」

「モグモーグ！」

さあこんな男の友情は置いておき、その頃マサムネとミスホは……

「今日は勝ててよかったですね。マサムネさん」

「ああ、なんかトガミを罠に使ってしまったがな……」

「ふふっ。トガミは大丈夫ですよ。強いですから」

なおトガミはあの一件でだいぶ落ち込んでいる。  
それにより上のシモンの慰めである。

「にしても、何なんだ。なんでこんな所に……ここ人気はないとはいえ女子トイレなんですけど……」

無理矢理にミスホに連れてこられたのである。  
マサムネはいやがる暇もなく連れ込まれた……  
いや、ついてこないと叫ぶと脅されたが……

「それはですね。コホン。……私はマサムネさんが好きです」

「え？」

「世界で一番愛している自信があります」

マサムネは固まった。

何が何だかわからない。

「は？ 今何て言ったださ？」

「私は世界で一番マサムネさんを愛している自信があると言っただす！」

突然であつた……

マサムネの予想を超えていた……

順序を踏んでからこちらから告白しようとしていたら  
むこうから告白されてしまったのだ……

（前々からおかしいところはあつたぞ……恋人以前の関係を楽しみたかつたと言うに……）

マサムネはあえてミズホの好意を無視していたがもう無視できるものではない。

「さあ、OKとってください！ 言わなければ叫びます」

もう十分大きな声を出しているのだが、叫び声などあげられても困る。

「……ふつ。わかつたよ。お前の彼氏になってやるよ」

「ほ、本当ですね！ よっしゃ！ ではさっそく……」

「ホワイ！？ なに？ 早速ってなに！？」

「くくく、ワポ でえた知識ですよ！」



マサムネの事をたたえる二人。

「お前らはまだジムは攻略してないのか？」

「トキワのジムは営業休止中でごさるし……」

「僕もレベルを上げていたくらいだしね」

「今はダブルバトルしか受け付けてねえぞ」

それを聞くと顔を見合わせる二人。

「となると。僕と君で行くしかないね」

「うむ。初めてでござるがよろしくするでござるよ」

二人は握手している。

二人は性別が違うはずなのに顔つきが似ている……  
美形である。

「ふむ。お前らならいけるような気がするぞ」

「おおっ！ でござる」

「では今日は泊まって、明日に挑もう」

「ござる。では、マサムネ殿またいつかでござる」

「短い再会だけど……またね」

そう言つて二人はポケモンセンターに入つて行つた。

「……さて、行くか」

「はい」

ミズホは二人の会話を聞いていたのだろうか。  
テンションが朝からずつとマックスである。



「……シモン。俺って幸せだよな」

「モグリユ？」

「ああ、わかんねえよな……わかんだけど……」

かなりきわどい話である……

続く

第十二壞 そう！ 基準があればいいのだっ！（後書き）

短いが今日の後に伸ばす

第十二壊・補足

これが真実だ！

（前書き）

付け足し



CERO：Aであるためには……

「よし、出よう。今すぐこの個室から」

「え？　しかしまだ私達は一つに……」

「年を考えよう。そしてCERO：Aで行こう」

そう。

プロクン

基準で……

「てなわけだ。この先は結婚するまでお預けだぜ」

「むー。なぜです。恋人ならすぐにするものだ……」

「いいの！　君は10歳なのね！　だから駄目なの！」

「>チツくわかりました。マサムネさんの言うことに従います」

「ねえ、いました打ちした？　したよね？」

「いえ。じゃあ今日はもう寝ましよう。いっしょに……」

「そ、そこは譲らないのね……」

## 【カナブとカナデ】

「いやあ、マサムネ殿は相変わらずでござったなあ」

「そんなに長い間いたわけでもないんだろ？　なぜそこまでいえるんだい？」

「それはカナデ殿も同じでござるよ。マサムネ殿たちをよく知っているようにしゃべるでござる」

そついいあい二人は笑う。

「あの二人は興味の対象さ。面白いと言つものだよ」  
「ござるか」

そつ言つて納得しあふ二人。

「あ、おーいカナデ」

「おや？」

「誰でござるか？」

一人の男性がカナデのほうに歩いてくる。

「カナデ。ニビに帰つてたなら家に帰つてこいよ」

「僕は旅を終えるまで帰らないと言つただろう」

「しかしだな……ん？ 隣の子は？」

「へ？ ええと、拙者はカナブと言つものでござる」

「へえ。俺はカナデの兄のエンソだ。カナデをよろしく頼むよ。今まで男の子がよつてきさえしなかつたんだ」

「は？ いやまあ、これからも仲良くはしていくでござる」

なにやらエンソの言うことが理解できていないようだ。

カナブは困つたように言葉を返す。

「何を言っているのかこの愚兄は。君も別にあわせなくていいんだよ」  
「よ」

そついいながらカナデはエンソの腰あたりをける。

「いったあ！ な、なにするんだよ。俺は妹思いのいい兄なんだぞ」

「！」

「騒ぐな恥ずかしい」

そう言ってけり続けるカナデ。

「やめって、やめって！ それもそれで恥ずかしいだろ」

「愚兄がひどい言葉を言うよりは気持ちがいい」

「それ愚兄だけ心が傷つくよ！？」

続く兄妹げんか。

カナブはそれを見ているしかない。

「せ、拙者この状況が理解できないでござる……」

本編に続く

第十二壊・補足      これが真実だ！      （後書き）

第十二壊でみんなが考えた幻想をぶっ潰してしまったか。



第十三壊 - 1

おっちゃん……いや、親父さん！  
(前書き)

パソコンの調子が悪いので前後でわけます。

第十三壊 - 1

おっちゃん……いや、親父さん！

【おつきみやま前：ポケモンセンター】

「なんかくるまでいろいろと疲れたな」

「ですね、何であんなにトレーナーが……」

ここに来るまで行くとど泣くトレーナーと戦った。

別に誰も進化などしなかったが、戦いの経験がなかった

チユリネことサユキとカミコのレベル上げとしてはいいものだった。

「しかし疲れたな……ここで一泊して明日にハナダに向かおう」

「そうしましょうか」

そう言ってマサムネたちはポケモンセンターに入った。

「ぼっちゃん。コイキングいないかい？」

「コイキング？ ああ、あのか」

「500円なんだが……」

「まあ、物によるな。普通のコイキングならそこらでも見つかる」

「話のわかる人ぼっちゃんだ。今まではコイキングと聞くと誰も買ってくれねえ」

「そうだな。最弱とされているわけだしな……」

「ああ、で、こいつだ」

そう言って男はコイキングを出す。

「金色のコイキングだと……」

「ああ、水につけてもこすっても落ちない。本物だよ」

「色違いポケモンか……」

「ああ、どうだい？ 水などに付けで本物が試すか？」

「いや、買っ」

「……ぼっちゃん。金はいらねえ。もって行け」

「しかし」

「いいんだよ。信じてくれたしな……それにたった500円だ。気にするな」

「おっちゃん……」

そう言つてコイキングをボールにもどしおっちゃんは差し出す。そして受け取る。

「てか、何やつてるんですかマサムネさん？」

「突っ込むなよ、ミズホちゃん……」

そうしてマサムネは色違いのコイキングを手に入れた。

## 【次の日】

「さあ、行くぞシャドウ！」

「コッ コッ コッ コッ！」

コイキングは跳ねる。  
なんかダメな気がした。

「マサムネさん。そのこ大丈夫なんですか？」

「無論。だってとびはねるを使っているからな」

地面から少し浮いている。

何やら普通ではない。

「さあ、行くぞ」

「いいんですかねえ……」

そしてマサムネ達はおつきみやまへと向かう。

後半に続く

第十三壊 - 2      ホップステップ……ああっ！

【おつきみやま】

「暗いな……」

「でも完璧に見えないってわけでもないですよ」

おつきみやまに入り、辺りを見回す二人。

「コッ コッ コッ コッ」

「ピカ……」

「コッ コッ コッ コッ」

「チュウ……」

カミコはシャドウから少し離れていた。

「とりあえずハナダの方向に向かうかな」

「はい」

そう言つてマサムネ達はハナダの方角へと進んだ。

【????】

「本当にここにあるのか？」

「間違いないさ。この文献にはそう書いてある」

男二人が二人いた。  
その男達は奇妙な格好であった。

「あるんだ、あのポケモンの化石がな……」  
「カントーであるここにか？　しかしあれは」  
「ふふふ……ここにあるとあるのだからあるのだ」  
「お前は……われらの目的。忘れておらぬだろうな」  
「くつくく。わかっているよ……くつくくく」  
「お前は化石のことになると……」

そして男はさくさくと発掘作業に戻った。

「シャドウ！　回転しながら落ちて来い！」  
「コッコココココ」  
「う、うわあああああああ！」

マサムネはシャドウで近くにいたガールズスカウトやたんぱんこぞうと戦い勝利を重ねていた。

「うつし。なかなかいい感じだぞシャドウ」  
「コッコココココ」

シャドウは喜んでいるのかはねる。

「ピカチュ……」

カミコにはなぜあのシャドウがココまで強いのか理解できないらしい。

「コッコッコ……」

ベタン！

「シャ、シャドウ！ どうした！？」

「コッコ……」

PP切れです。

「ここまでよく持ったもんだ……休んでくれ」

そう言ってシャドウをボールに戻す。

「よし、代わりに出でこいシモン！」

ボンッ

「モグリユ！」

シモンが元気よく飛び出てくる。

「モグリユ？」

「ピカ」

どうやらトガミではなくカミコが出てきていることに少し驚いたようだ。

いつも自分が出ているときはミスホはトガミを出していたからである。

「モグ」  
「ピ」

カミコにシモンはそっぽを向かれた。

「リユリユリユ」

「ピカピ！？　ピ！　ピカピカ……」

「モグ」

どうやら何かをきっかけ気仲良くなったようだ。

「よし、なんかいい感じになったので出発！」

「はい！」

そう言ってマサムネ一行は先へと出発した。

続く



第十三壊 - 2 ホップステップ……ああっ！（後書き）

PPの概念はゲームと違います

裏第十三壊      だからお前はわからずやなんだよ      b y シモン（前書き）

少し時間が戻ります。

後感想を何回も見ながらニヤニヤしてます。

裏第十三壊      だからお前はわからずやなんだよ      b y シモン

【某日：ポケモンセンター】

「モグリユ」

「ガメガメガ」

トガミとシモンが話をしているようだ。

「ガメガ、ガメガニガメガガメガ」

「モ、グリユリュモ」

「ガメ……」

「グリユ！    グググリユ！」

「ガメガア！？」

シモンに殴り飛ばされるトガミ。

「ガ、ガメガ？」

「モグリユ！」

「ゼ、ゼニ……」

「モゝグリユ」

「ガ、ガメガメガ！？」

「モグリユゝ」

「ゼ、ゼニイ！    ガメガメガー！」

そう言つてシモンはその場を去つた。

「ゼ、ゼニ……」

そしてその場に残されたトガミはシモンのいったことを考えるだけだった。

【同日：同所】

「ピカピ」

「チュリ」

「ピピピ」

「チュリ」

「ピ」

「チュリ」

「……ピカチュ」

「あれ、なんか会話してるようで成立してないか？」

「そうですか？ 私にはわかりません」

二人の会話を見てマサムネはそう述べた。

「コツコツコツコ」

そして後ろではシャドウがとびはねていた。

本編に続く

裏第十三壊

だからお前はわからずやなんだよ

boyシモン（後書き）

訳がほしいですか？

読もうと思えば読めますよ。

## 第十四壊 私達は夫婦ですよね（前書き）

今回からタイトル担当ミズホちゃんに変更

そして執拗に同じ感想を見てにやける自分こそ作者さん。

## 第十四壊 私達は夫婦ですよ

【おつきみやま】

「グリユ」

「ピカピカ」

「ググググ」

「チュチュチュ」

シモンの言葉をうんうん頷きながらカミコは聞いている。

「何を話してるんだか……」

「なら、紙とペンでも渡してみればどうです？」

「書かせるってか。あの手で書けるんかね」

そう言っマサムネはハナダに着いたら

紙とペンを与えてみようと思った。

【???】

「これを見てみる！ この化石を！」

「こ、これは！ 確かにだな……」

「ああ、この化石を持ち帰るぞ」

「だがそれを見つけるまでに見つかったそれらの化石はどうする」

「ああ、たしかに珍しくも強力でもないし目的対象ではない」

「ならば捨てておこう」

「うむ。では帰るとしようか。目的が終了した場所にとどまる必要

はない」

そう言って男達はその場を去って行った。

「しあつわせわぁー」

「モモググモモグー」

「だーから毎日ー」

「モモモグモー」

楽しそうに歌いながら先へと進むマサムネとシモン。  
そしてそれを見ながらついていくミズホとカミコ。

「いいなあ、シモン。うらやましいなあ」

「……」

マサムネとシモンを見てミズホは息が合う二人をうらやましがっていた

そしてカミコはなにやら考え事をしているようだった。

「グモモ〜モフッ！」

シモンは何かにつまづきこけた。

「大丈夫かシモン？」

「グ、グモモ……モ？」

シモンは何か埋まっているものを見つけた。



「モグリユ」

「どうした？」

「グリリユ」

すると突然シモンはその部分を掘り始めた。

「なんだ、どうした」

「モグリユ」

何かを掘り当てたようで、その掘上げたものをマサムネに差し出す。

「何だこれ？ 化石か？」

「そうみたいです」

そしてマサムネは化石をかばんの中に入れた。

「よく見つけたな」

「モグリユ」

マサムネはシモンをなでながらほめる。

「あれ、こっちは何か発掘した跡がありますよ？」

「何？」

ミズホがいる方向に向かうと確かに発掘した跡がある……そして

「あれ、化石がいくつか落ちてますよ?!」

「おいおい。何だこの宝の山は……」

いろいろな化石が落ちている。

売ればそれなりにはなりそうだ。

「これだけあれば結婚資金には困りません！」

「何を言ってるんだお前は」

「お前とは。いきなりどうしたんですか」

「ミズホちゃん。俺は呆れて君の名前も呼ぶことができなかったよ」  
「き、嫌いにならないでください！ 付き合い始めて数日ですよ？」

「！」

ミズホはなきながらぴよんぴよんと飛ぶ。  
マサムネは眼福である。

「いや、別れないから。絶対に」

「ほ、本当です？」

「本当さ」

「はい！ では早速化石の回収を……」

「って、おい」

そう言いながらも結局ミズホとともに化石を回収した……

【おつきみやま ハナダ側出入口】

「重いな……これは」

「考えてみればそうですね。どうしてココまで楽に持ってこられたんでしょう」

「ははっ。愛の力で持ってこれてたりしてな」  
「……」

（あれ、これもしかして……）

「愛の力ですか！ すばらしいです！ その通りです！」

「やっぱりこうなるのか」

マサムネはやはりなという顔で呆れていた。

ミズホは暴走し今にも走り出しそうな雰囲気だ。

「よし！ ハナダシティまで超速ダッシュです！」

「ほえ？ ほ、ほえええええ！」

マサムネはミズホに手をつかまれ連れて行かれる形となった。  
マサムネは化石を落とさないようにするだけで精一杯だった。

### 【ハナダシティ：古物屋】

「これ全部でこれだけで引き取るよ」

「わお これなら将来安泰ですよ！」

「ここままで貴重な品か？ 店主」

「ああ、この店もカントーで一二を争うほどの大きな店だと自負しているが、これほどのものはよく見ないよ」

そんなこんな大金を獲得したマサムネとミズホ。

その大金はミズホにより『夫婦のお金』という事で

マサムネの銀行口座に振り込まれた。

マサムネの将来は決められてしまったようだ。

「俺の未来はどうなるのかね……」

「幸せですよ。幸せ」

「まあ、不幸ではないだろうがね」

そう言つて二人はポケモンセンターに向かった。

【ポケモンセンター】

「おや？ ガイトじゃないか」

「おっ！ マサムネか」

マサムネはガイトを見つけはなしかけた。

「どうだよ調子は」

「ふっ。聞いて驚くなよ。もうすでにジムは攻略した！」

「また先越しか」

「というか旅を始めた時期がってやつだな、これは」

かっこつけたポーズをとるガイト。

「そして俺達は今から次の街に行く」

「なんだと！」

「じゃあな。俺が一足お先にジム制覇するぜ」

「いつか追い抜いてやんよ！」

そう言つと、ガイトは笑いながらポケモンセンターを後にした。

「ガイトはやっぱりライバルといえる存在だぜ」

「ユウミも私のライバルです」

二人は心に必ず二人にかつと言う思いを刻んだ。

続く

第十四壊 私達は夫婦ですよね (後書き)

これポケモンリーグはアニメとゲームのどちらのようにするか……  
どう思われますかみなさんは？

第十四壊 捕捉      これはこれは！

【ポケモンセンター】

「モグリユ！」

「何を怒ってるんだシモン」

「モグリユ！」

「お、そうだ、紙とペンを買ったんだ。ほれ」

そう言つてマサムネはシモンに紙とペンを渡す。

「グリユ！」

受け取るとあの手で器用に紙に文字を書いていくシモン。

「モーグリユ！」

「何々？ 『何で俺が掘った化石を売ったんだよ、兄貴』とな」

そしてマサムネは少し笑う。

「モグリユ！」

なぜ笑うのかがシモンには理解できない。

「ふっ。安心しろ。お前が彫ったやつだけはちゃんと保管しているさ」

「モ、モグリユ?!」

「ほら、これな」

そう言つてシモンが掘り出した化石をシモンに見せる。

「モ、モーグリユ！」

それを見てシモンは喜び踊る。

ちゃんと分けていてくれたことがうれしかったようだ。

「うれしいのか、シモン」

「モグ！」

『ああ、兄貴』と書かれた紙を差し出しながら喜ぶシモン。  
そして二人は喜び続けた。回りから注意されるまで……

「て言うかよくあんなにきれいに文字がかけるもんだな」  
「モグリユ！」

どうだと言わんばかりに胸を張るシモン。

「トガミもできる？」  
「ガ、ガメガ?!」

そう言われてトガミも紙に文字を書いてみるが……

「汚くて読めないね」  
「ああ、そうだな」

そしてこの答え。



「ガ、ガメガアアアアア！」  
「モグリユ」

叫ぶトガミ、そしてシモンは横で紙を出す  
『不幸だああああ』と叫んでいる、と。

本編に続く

第十四壞 捕捉

これはこれは！（後書き）

番外編？（前編） 事故だと言って言い逃れしても加害者なことは避けられない

【ニビシティ：ポケモンセンター宿場個室】

「え、え！？」

「……」

「カ、カナデ殿……」

「……」

「お、おなっ！」

「いいからででけっ！」

「い、いやぁ。気がつかなかったでござるよ」

「気がつかなかったで乙女の体を見たことが許されるとでも？」

「し、しかしでござるな！　ぐ、偶然でござるよ！　事故みたいなもので」

「なら被害者には何もないのかい？　加害者」

そう言われると何も言うことはできない。

事故というものは考えて起こるものではない。

それはあたりまえの話だと言えよう。

そして被害者に対し加害者が何かをする。

そんなの当たり前のことだろう。

なら今この状況。

どうすれば解決できる？

「ならどうすればいいというのでござるか！」

「……こ……び……」

「？　なんでござる？」

「乙女の肌を見たんだから永久に僕のしもべになつてもらおうよ！」

「な、なぬう！？　永久でござると！？　というか僕とかいうお人でござったか、カナデ殿！？」

「い、いいからわかったかい！　僕のいうことはこれから絶対だよ」

「う、ござ……　一人旅する予定だったでござるのに……」

おろおろとしだすカナブ。

顔を赤くしながら起こるカナデ。

もはや何も言うことはない。

かくして、女とは知らずに風呂場に入入という大変な事件はカナデに僕ができたということで幕を閉じた……

何？　風呂場で両者全裸ということを知らなかっただって？

まあ、いいんじゃないかな別に。

そもそも二人とも10歳だ、こんな事件が起こっているのも不思議

……

いや、いまどきの10歳はよくわからない……

「ほら、荷物はこれだけ持ってね」

「え、これカナデ殿の荷物で……」

「いいから！」

「お、おお……わ、わかったでござる……」

そう言われては言うことを聞くしかないカナブはいそいそと荷物を持つ。

「い、今からニビジムに行くのでござるよ？ 拙者疲れてしまつてござる」

「持った後に何も言わない！」

「わ、わかったでござるよ……」

そしていそいそと先に部屋を出るカナブ。

「まったく……女心というものを分らないな彼は……」

何を言おうと彼女たちは10歳である。

後半に続くよ。

番外編？（後編）  
コンピネーション 主と僕 永久 つまりはこう言うの待つ

# コンピネーション 主と僕

永久

つまりはこつこつ言つの待つ

## 【ニビシティズム】

「よかったな。今日でダブルバトルは終わりの予定なんだ」

「運が悪いのかもだぜえ。俺とタケシさんのコンビには勝てないだろっからなあ」

ポカツ

「そう言っただけで負けた？　そのせいであの二人組と戦ってからは勝ち続けていたとはいえ苦戦を強いられた。だからイワークとサンドは傷ついて休養することになったんだぞ」

「だ、だ、大丈夫っすよ！ イシツブテ達でも勝てますよ！」

ニビシティのリーダーと弟子の漫才はすでにニビシティで有名である。

「い、いぜ……何なのでいぜるか……」

「あれだろ、このごろ有名になっただってという漫才でしょ」

「ま、漫才!? ここはポケモンのジムのはずでござるよ!」

「いや、別に本業じゃないだろ。て言うか僕は説明キャラ位置に……」

- 
- 
- 
- L

なんやかんやでなんやかんやである。

「いや、よくわからないでござる。」

「何を言ってるんだ君は。早く戦いの準備を」

「いっ、いっ、いっ」

カナブはポケットのボールを出す。

「どちらにするでござるか……ここは……」

「いいから早くしなよ！ 僕から先に行くよ！ 頼むよカミカ！」

「ぬ、ぬ、い、行くでござるよカイのしん！」

ポシュニン！

ポシュイイ！

「カーイ！」

「チート！」

カナブはこの間に捕まえたストライクのハサのすけを出すか悩んだのだが

急かされてしまったので相棒であるカイのしんを繰り出した。

「いけ、イシツブテ！」

「俺のイシツブテも！」

「イーシッ！」

「ツーウブ！」

ジム側の二人もイシツブテを二体繰り出した。

「イ、イシツブテ二体でござるか」

「小さいから狙いにくいというのもあるかもね」

そして戦いが始まるうとする……

「イシツブテ！ まるくなる！」

「イシツブテ！ いわおとし！」

タケシのイシツブテはまるくなった。

トシカズのイシツブテはいわおとしを放った。

「よけるでござるよカイのしん！」

「なぜいわおとしにできなかった……はっ！ カミカ！」

「クチっ！？」

「イッシー！」

「カイロオ！？」

いわおとしのいわにまるくなるでまるくなったイシツブテが紛れ込んでいたのだ。

落ちてくる岩、つまりはイシツブテが突然軌道を変えた。

それに二匹は対応することができなかったのだ。

「どうだ！ 俺とタケシさんのコンビネーションプレイ！」

「……」

トシカズは大声をあげるがタケシは無言だ。  
恥ずかしいらしい。

「って、ありゃ？ クチートがいねえ」

「以前もこういう流れが……」



「チトオ！」

「ラッシャア！」

クチートの不意打ちがイシツブテ（トシカズ）に決まる。

「しかし、こうかはいまひとつ」

「カイのしん！」

「カアアアイ！」

「イッシャア！？」

カイのしんがイシツブテ（トシカズ）を助けに向かうイシツブテ（タケシ）をつかむ。

「ちきゅうなげでござる！」

「カアアアアイ！」

そして宙に舞うカイのしん。

普通ならレベルと同等の威力しか与えられない。

だがカイのしんの異常なスピードにより通常の二倍のダメージを与える！

「イッシャアアア！」

「イシツブテ！」

タケシのイシツブテは倒れる。

「イシッ！」

体勢を立て直したトシカズのイシツブテはカミカを倒そうとする。

だがそこにはカミカはいない。

またふいつちをするのだろつかとあたりを見るイシツブテ。

「イシ！」

カミカを見つけたイシツブテはカミカに向けて加速する。

「チート」

「そう。狙っておってくるから馬鹿を見る」

「ござる！ ばかからでござる！」

「カアアアアアアイロオオオオオ！」

「イ、イシヤア！？」

離れた位置にいるはずのカイのしんが高速で走ってくるさまはイシツブテからしたら絶望でしかなかった。

「これにて」

「閉幕ってやつだね」

そう二人が発言したとき。

「イシヤア！」

イシツブテは地に落ちた。

「僕たちの勝ちだね」

「拙者たちの勝ちでござる！」

「そ、そんなにやあ」

「やはりこいつとのコンビでは無理か……」

「ひ、ひでえ！？」

【ニビシティ：ポケモンセンター】

「勝てたでござるな。よかったでござる」

「ああ、そうだね」

「これも二人の力を合わせたからでござる」

笑顔でそういうカナブ。

「ッー」

「？ ど、どうしたのでござる？」

「……何にもないさ」

「どこか具合でも……」

「ッ……ッう！ さっさと次の町に行く準備をするんだ！」

「い、ござる！？」

あわてふためるカナブ。

「君の地位はずっとそこだよ。カナブ……」

「じ、事故でござったのにここまで……」

「加害者に何も言う権利はない」

「ひ、ひどいでござる〜」

たぶん永久に変わることのないだろうこの関係。  
そう。永久に。

本編に続く

第十五壞 まゐ別にマサムネさんならいいですけどねっ (前書き)

感想待ってます。

## 第十五壞 まゐ別にマサムネさんならいいですけどねっ

旅。それは人生の縮図。男のロマンである。

「行つけえ〜！シャドウ！」

「コッコココココ」

「とびはねーる・れっどまきしまむ・ばぁにんぐ！」

ピュ〜

「何してるんですか？」

「いや、なんか突然したくなって……」

「ガイトに負けるわけにはいかねえ……」

「ユウミに負けるわけにも行きません」

二人の背中くに燃える炎が見える。

「ガガガガガガガ」

「ピチュ」

炎ではなくトガミがカミコから電撃を食らっていただけのようだ……

「モグモ」

「チェリ」

「コッコココココ」

マサムネの手持ちメンバーはそれを何もせず傍観するだけであった。

「モモーグモグ」

トガミはすぐに回復した。

超回復能力でも持っているのであろうか。

「とりあえずゴールデンボールブリッジに行こう」

「いきなり何を言ってるんでせうか！」

「え、何？　せうか？」

「ゴールデンボールブリッジなんて！　卑猥です！」

「ゲームフリークにでも言ってくれ」

そんなこんなでゴールデンボールブリッジへ

「シャドウ。とびはねる！　そしてシモンは落下こうそくスピン！」

とびはねるで空に上がるシャドウの上にはシモンが乗っている。

そしてそこからシモンは落下しながらのこうそくスピン。

「ビビイイイイ」

「キヤアアアア」

キヤタピーとビードル相手にやりすぎな気もするが  
と言つか橋に穴が開いているようなきもするが……

「ま、負けでいい！ 負けでいいから！ もうやめてくれー！」  
「え、いや、まあ。うん」

そう言っただけは終わりを告げた。

「ゴールデンボールブリッジ制覇おめでとう」  
「と言っても二人で協力してなんですけど」  
「その通りです。愛のコンビネーションです」  
「そ、そうかい。じゃあ商品のわざマシンだよ。一つしかないけどね」

そう言っただけの人が渡してくるわざマシンを受け取る。

「それカントーでは買えない非売品だからね」  
「へえ。ならいざと言うときまでとっておこう」  
「わざマシンは一度使ったもう使えませんからね」

そう言っただけの中にもわざマシンをしまつマサムネ。

「そういえばこの先にポケモン転送システムの生みの親。ポケモンマニアマサキの家があるらしいですよ」

「ほう。一度会ってみたいもんだね」

「じゃあ行きましょうか」

「ん？ いや、さ。あいに行って会えるものなの？」

「さあ」

「さあ？ 『さあ』なんだよねやつぱり！」

「とりあえず行きましょう！」



そう言つてマサムネはミズホに引きずられる。

「俺は尻にしかれる旦那になりたくなあゝいー！」

「ここがマサキの家です！」

「そついやミズホちゃん、マサキは呼び捨てなんだね」

「ここに呼び捨てでよろしくって書いてますよ」

ミズホが差し出したのは管理システムの利用条約。

この一つにマサキは自分に話すときは呼び捨てタメ口じゃないと駄目だと書いてある。

「なんか、お気楽そつな感じの人だな」

「ははっ。これなら会おうとすれば会ってくれますよ」

そう言つて家のインターフォンを押す。

ピンポン

「……」

「……」

ピンポン

「……」

「……シャドウ」

「……コッコッコッ」

「……行け」

「コッ コッ コッ」

スウ

「……」

「……」

スウ

「コッ コッ コッ」

「シモン」

「グリユ」

「コッ コッ コッ」

「グリユ。グリユ」

カキカキ

「グリユ」

「そうか、中にはマサキはいなかったか」

「偵察ご苦労です」

「コッ コッ コッ」

そしてマサムネたちはポケモンセンターへと帰った。

## 解説

シャドウがとびはねるで家の中を調べ

シモンに報告して、シモンが紙に結果を書き

二人が呼んで納得した。

と言うことです。

続く

裏第十五壊 なんやっちゅんや！(前書き)

感想待ってますよ。

## 裏第十五壊 なんやっちゅんや！

### 【マサキの家】

マサキの前には二人の男がいた。

「なんや、あんたらは」

「我々は……いや、なんか悪人ぽいなこれ」

「おいおい。えーとマサキさん。私達はこういふものです」

そう言つてマサキに男は名刺を取り出す。

「ポケモン解放会？ なんやねんこれ」

「ポケモンを解放するための活動です」

「その為に転送システムを我々にお貸しいただきたい」

「んなこといきなり言われて『はい、そうですか』なんて言う訳ないやろ」

何を当たり前なと言う顔をしながらマサキは答える。

「それもそうですよね。まあ我々も悪人ではないですし今回は帰ります」

「では、失礼します」

そう言つて男達はマサキの家を後にした。

「なんやったんや……また来るんかな、あの二人。めんどうや」

（ポケモン解放会……目的はポケモンの解放かい……なんてな）

ガチャ

くだらないことを考えていると扉がまた開いた。

「ん？ なんや？ ポケモン解放会の二人が戻って来たんか？」

そう言っって後ろを振り向く。

「って。誰やお前は！」

「どうでもいい、一緒に来てもらっぞ」

「あ、悪人や？！」

驚き戸惑うマサキ。

さっきの二人とはまったく違う格好をしている。

「こ、このままさらわれてたまるかい！ 行くんやロコン！」

「コン！」

マサキは近くにいたロコンを男に差し向ける。

「ところがそうはいかないんですよ」

さらに男が現れる。

「行くんだ。化石より再生されしポケモンよ！」

「……」

「な、何やそのポケモンは！ う、うわあああああ！」

「くふふ。さすがにこのポケモンには勝てなかったようですねえ」

「ふむ。さすがは大昔の強力なポケモンだ」

「しかしこれは私達の目的の一步でしかないのですよ」

「ふつ。そうだな」

「では、帰りましょう。ジョウトへ」

「ああ……あの人も我らを待ってるだろうしな」

そう言つて男二人はマサキの家を去つた。

マサキはポケモンが袋に入れ担いでいた。

本編に続く

第十六壊 - 1 そう、マサムネさん以外はいつでもいいのです (前書き)

感想は随時募集



第十六壊 - 1 そう、マサムネさん以外はどうでもいいのです

【ハナダシティ：ポケモンセンター】

「しかし、留守で残念だったな」

「ええ。でもまあ、会わなくてもまったく問題ありません！」

「まあ、ないんだけどね。うん」

問題ないとはつきりと言った人に言われるとは  
マサムネも予想はしていなかった。

別にミズホ的にマサキなどどうでもよかったようだ。  
マサムネ的にはあってみたかったので少し残念だが。

「まあなんだ。レベル上げもなかなかにできたし明日はジムに挑戦  
だな」

「そうですね。ハナダは水ポケモンのジムのようだし、明日は力  
ミコで行きますよ！」

そう言つて足元にいるカミコを抱き上げ抱える。

「ピカチュ」

「そついや、ミズホちゃんはカミコは抱えるけどトガミは抱えない  
ね」

「ええ、オスですから。マサムネさん以外の男にココを触らすわけ  
には行きません！」

「ああ、そう。ポケモンすらそついう対称なんだ……」

なんかトガミが倒れていつものように叫んでいる。  
が、今回はマサムネは同情しなかった。

「モグリユ……」

泣くなよと言わんばかりに慰めるのはシモンだけであった。

「お風呂付です！ 個室にお風呂が着いてます！」

「ああ……そうだね……」

そう、お金がたらふくできたために少しお金をかけた部屋に泊まったのだ。

超豪華と言っわけではないが普通よりいいというレベルの部屋だ。

「わかってますよね？ わかってますよね！」

「え、あ……ああ……ミズホちゃんの言いたいことはわかるよ。でもね」

「でも？ でも、何なんです？」

「いや、その、さあ」

「私達の関係って何ですか？」

「え、いや、なんか流されただけって言うか……」

「流された？ 意味のわからないこと言いますね」

（じゅ、１０歳の女の子にココまで押されていいのか俺は……）

しかし、１０歳とはいえ凄……ミズホと風呂に入る  
と言うことを戸惑うのは当然である。

「いいですか。私達は恋人なんです」

「いや、だからさ。今考えると流れで……」

「ひどいです！ 私とは遊びだったんですね！」

「グ、グウ……」

（ミズボちゃんがこんな言葉を覚えるのもすべて野球バラエティゲームのせいだ……）

「こうなったら。むりやりにでもつれていく！」

「な、なにをするミズボちああああん！」

「ふふ。『こいびとどうしですることぜんぶ』ですよ」

その後のことはご想像にお任せする。

大事なものは失っていないとだけ言うておく。

「朝ですよ」

「朝ですね」

マサムネは起きる。

ミズボも起きる。

『ただしなにもそうびしていない』

「……着替えよう」

「はい。この際だから着せあいましょう！」

「……」

「さあ、ジムに行きましょう！」

「ああ、行こうか。ジム挑戦に」

何事もなかったように二人はジムへ向かう。

「チュリチュリ」

「ピカチュ」

今回はこの二匹で挑むつもりようだ。

くさとでんき。

愛称を考えてのものがうまくいくかはわからない。

言い忘れていたがハナダもダブルバトルを受け付けている。  
ただし。ジムリーダーひとりで二体を使ってくるらしい。

挑戦者は一人だろうが二人だろうがいいらしい。

「今回のジムリーダーのカスミはかなりの実力者だと聞く」

「ぬふふ。私達の愛のコンビネーションに勝てるものなしです！」

「そんなドイツ人武士みたいなこと言われても……」

「？ よくわかりませんが否定はよくないです。愛は絶対です」

「……そうやね」

「なぜ関西弁……」

後半へ続く

第十六壞 - 1 そう、マサムネさん以外はいつでもいいのです (後書き)

世の中思い道理にはいきません。

第十六壊 - 2    なんてことをしてくれませんか！（前書き）

感想は随時募集中

## 第十六壊 - 2    なんてことをしてくれますか！

【ハナダシティジム】

「ふふつ。あなた達が挑戦者ね」

ジムリーダーカスミ……水着姿だ。

「何て破廉恥な格好を！ マサムネさんにそんなもの見せないでください」

「え、ミズホちゃん？ ここ回りプールだよ。ただの水着だよ？」

「むきいい！ マサムネさんに肌をさらしているのは私だけなんですううう！」

ポカポカとマサムネを軽く殴り続けるミズホ。

「い、痛いよ。い、痛いって」

「……大変ね、あなた」

「はい、大変です……」

と言うわけで。

「ジムリーダーはポケモンを二体。挑戦者二名はそれぞれ一匹のポケモンを使用のダブルバトルとなります」

審判役のカスミの弟子がそう言う。

「では、始め！」

それを合図に戦いは始まる。

「行けっ！ サユキ！」

「行つて！ カミコ！」

「チュリ」

「ピツカ」

マサムネ・ミズホ組のポケモンがでる。

「行きなさい！ ヒトデマン。スターミー！」

「ヘヤツ！」

「スタアアアア」

鳴き声の仕方がヒトデマンだけ違うような気がする……

「試合開始！」

審判の掛け声とともに戦いは始まる。

「スターミー、ヒトデマン。こうそくスピンよ」

カスミの声とともにこうそくスピンで接近してくる二匹。

「よけるサユキ！」

「カミコもよけて！」

その攻撃をよけるが再び後方から襲い掛かってくる。



「チュリっ！」

サユキにヒトデマンが当たる。

「それほどでの威力でもないようだ……レベル上げの成果か」

（しかしあのこうそくスピン。ねむりごなやしびれごなをつかったらこっちに返されかねんな……）

「カミコ。かげぶんしんです！」

「チュウ！」

カミコはかげぶんしんをする。

「そんなのこうそくスピンで全部狙ってやるわ！」

そして再びこうそくスピンでの攻撃が始まる。

（カミコに攻撃を集中させている？　そうか、やはりダブルバトルには慣れていんだ）

一対一のような戦い方をしている。

これではトレーナーが二人のマサムネたちに勝てるかはわからない。

「サユキ。せいちょうだ」

「チュリ」

カスミはサユキがしている行動に気がついていない。

「カミコ。でんこうせっかです！」  
「ピカチュウ！」

カミコのでんこうせっか。

「ヘヤッ！」

ヒトデマンにヒット。

「くうう。やるわね」

「サユキ。ヒトデマンにメガトレイン」

「チュウウウリ！」

「へ、ヘヤッ！？へ、ヘヤアアア」

突然の攻撃に驚きながら力尽きるヒトデマン。

「……ふつ。サユキのことを忘れてるからだ」

「スタアミイ！」

サユキめがけてスターミイが飛んでくる。

「スタアアアア」

みずのはどうで攻撃を仕掛けてくる。

「こうかはいまひとつでレベルも同じ程度だ。倒れるわけないだろ  
う！」

「チュリイ！ チュリイイイ！」

サユキはマジカルリーフで攻撃した。

スターミーに直撃する。

「ス、スタアアア」

じこさいせいをするスターミー。

「カミコも忘れないください。カミコ、エレキボール！」

「ピイイカアアアチュー！」

「ス?! スタタタタタタタ」

そして下に落ちていくスターミー。

「……はっ！ ひ、ヒトデマン、スターミー戦闘不能。よって挑戦者の勝ち！」

そしてマサムネたちは勝利者となった。

「完敗よ……なれてもないのに一人で戦おうとしたからかしらね……」

「ああ、そうだな。そうだろう。さあバッジをくれ」

「そんなにはつきりと言わなくても……まあいいわ。はい、これ」

そう言ってカスミからブルーバッジを受け取った。

「よし。また一歩前進だ！」

「チュリ」

次回に続きます

**裏第十六壊      いくつ始まる旅物語（前書き）**

感想は募集してますよ。

## 裏第十六壊      いくつ始まる旅物語

【ハナダシティジム：更衣室】

「カスミが負けるなんて……カスミより強い奴ってまだまだいるんだ……」

彼女はジムの一員であるピクニックガールのコズエ。

マサムネたちの戦いを見て自分はまだまだ下なのだと感じたようだ。

「これは旅に出るしかないわ!」

コズエ、13歳にして初の旅である。

【この小説だけのお話】

旅には10歳には出れる。

これはよく知られるルールであるが

ジムの門下生となるという道もあり

なったものは旅に出ないでジムリーダーのもとで修業し

一人前のトレーナーになるというものである。

「と言っても一人旅ってのはねえ……そうだわ」

そう言ってカバンをあさるコズエ。

そしてポケギアを取り出す。

「あいつも旅には出てなかったわよね」

プルルル

「もし……もし……なんだ……コズエ……」

「ど、どうしたのあんた？　なんか元気ないけど……」

「あ、ああ。気にするなよ……それでどうしたんだよ……」

「いやね、実はね。旅に出ようかと思ってね」

「旅に？　お前が？」

「ええ。私、自分が弱いつてことを確信したの」

「そうか。お前は……まあ、頑張れよ」

「それでね。一緒に行かない？」

「……は？　お前、俺はジムの門下生で……」

「あんたも、痛感したんでしょ」

「……そうか、あいつらが来たのか。そうか……」

「私ね、あんたしかいないの」

「都合のいい使い走りってか。まったくよ」

「まあ、そうね」

「うし、わかった。タケシさんに話しつけてハナダに行くわ」

「うん。まってるわよ。トシカズ」

そしてポケギアの通信を切る。

（これから旅が始まるのか……楽しみだわ）

そう、これはジムの門下生たちが旅に出るまでの軌跡である……

本編に続く

## 第十七壞

さっさとどこかへ行ってください！ 少しでも見逃せないです……

感想は随時募集。



第十七壊 さつさとどこかへ行ってください！ 少しも見逃せないです……

【ハナダシティ：ポケモンセンター】

「なにやらパツとしない感じだけど勝利したねえ」

「すべては愛の……」

「いや、もうそのパターンはいい」

「パ、パターンとは何ですか！」

「もうそんなことをなくても愛は伝わるよってこと」

「なんと！？」

その言葉を聴くと突然ミズホはぐるぐる踊りだした。

「うつれついでです」

「……慣れるしかないよね。慣れるしかないんだよね！」

マサムネの受難は続く。

「てなわけで、次はクチバシティに行くよ」

「おや、ヤマブキシティのほうが近いのでは？」

ミズホが疑問の声を上げる。

「あそこはいまはゲート建設中で通行止めなの」

「ゲート？ 普通の人間は入れなくなってしまうんですか」

「いや、ほれ、通行証」

ポケットの財布の中からマサムネが通行証を出し見せる。

「何で持つてるです？」

「親父はヤマブキで働いてるからな」

そう言いながら通行証をなおす。

「てなわけで、クチバに向かおう」

「クチバですかあ。海の町ですね……しかし水着はNGです。私はマサムネさん以外に肌はさらしません！なのでどうしても見たいならホテルでも泊まってそこで……」

「いつも道理飛躍しすぎだよ。別に海に泳ぎに行くんじゃないんだよ」

「み、見たくないとおっしゃる！し、死ぬしかないです！」

「またまた飛躍しすぎ！見たいとか見たくないとかの話じゃないよ」

いつも道理のミズホを抑えながらマサムネはクチバとの地下通路向かった。

「ぶつぶつ……もっと勉強しなくては……その為には……」

（なにやらミズホちゃんが怖いこと言ってるよう泣きがするけど……気のせいだよな）

「既……子……グフフ」

隣で不思議な笑い方をしているミズホを見てマサムネは少し恐怖を

覚えた。

「しかしここは長いなあ。クチバまでは遠いと言ったことがよくわかる」

「本当ですね」

ミズホは落ち着いたらしくマサムネの言葉に返答する。  
そしてそのままとぼとぼと道を歩いていく。

「ん？　なんかあそこでもめてるな」

「なんででしょうか？」

「あなた達は悪人です！　ポケモンは解放すべきなのです！」  
「何言うかてめえ！　こいつは俺が捕まえたんだ。どうしようと勝手だろ！」

女性が一人男性に詰め寄っていた。

「ポケモンにも人権と言うものがあります！」

「あるわけねえだろ！」

「ですからそういう人たちからポケモンを解放するのがですね」

「うつせえんだよ！」

「うわっ」

解放解放と言い続けていた女性は男に飛ばされた。

「けっ。うつせえ」

そう言つて男はその場をさつた。

「いたた……ポケモンの解放はポケモンを救うのに……」

「おいおい。何があつたてんだ？」

「は、はい？ どなたですか？」

「いや、なんかあつたのかなと思つて」

そう言つてマサムネは女性に手を差し出す。

「あ、これはすいません」

そう言つて女性はマサムネの手をつかみ立ち上がる。

「ふう。私の名前はウルサです。あなたは？」

「俺はマサムネ。こっちはミズホちゃん」

「よろしくです……が、さつとその手を離すのです！」

ミズホはずつと手をつかんでいるウルサの手を無理やり引き離す。

「まったく。何ですかこの女は！」

「何も手をつかんでただけでそこまで……」

「マサムネさんはだまされているのです！」

「あのー私はお邪魔ですか？」

「え、いや、まだなんであんなことになつてたか聞いて……」

「邪魔に決まつてます！ この場から去ってください！」

ミズホはマジ切れしてウルサをにらんでいる。

「そつですか……ではこれで……」

そう言つてウルサはその場を去つて行つた。

「おいおい、ハナダの方に歩いて行っちゃったぞ」

「ふん。これでいいのです」

「……ああ、そうね……」

マサムネの心には疑問が残つたままだった。

【クチバシティ】

「つつきましたあゝ」

「なんか暑いな……」

「なら、冷房のきいてるポケモンセンターに行きましょう」

「ああ」

そしてポケモンセンターに入るマサムネたち。

「お、おい。マサムネ君」

「あれ？ オーキド博士！？」

「お、おじいさん！？」

「いやいや、久しいのお」

突然話しかれたと思ったらその相手はオーキド博士であった。

「な、なぜこに」

「なに、サントアンヌ号が年に一度来る日だな。船で講義をしてほしいといわれてな」

「そうなんですか」

「にしても、ミズホは少し見ぬうちにマサムネ君にべったりくっついてるのぉ」

「やだ、おじいさまったら」

凄くうれしそうにしゃべるミズホ

それを見てオーキド博士は大いにうれしそうだ。

「これはヨーコさんに伝えておかねばならぬの」

「ははは、なんか未来が見えます」

「ふむふむ。おっ！ そうじゃ、一緒にサントアンヌ号のパーティーにでも行かぬか？」

「「パーティーに？」」

オーキド博士の言葉に二人の疑問の言葉が重なる。

「さっきも行ったが講義を頼まれておつての。その後にパーティーがあるんじゃない」

「それに俺達も……ですか？」

「どうじゃな？」

「マサムネさんの意思に従うまでです」

「え、そう？ なら行きます！」

「そうかそうか。うむ。では明日はパーティーじゃ」

そしてマサムネたちのパーティー参加が決まった。

続く

第十七壞 さっさとどこかへ行ってください！ 少しも見逃せないです……

サントアンヌ号は一年に一度クチバに来るということになってます。  
あと、マサキですが、第一部にはもう出てきません。

裏第十七壊 気がつかないこと 気がつくこと

【ハナダシティ】

「ふう、ふう。やっとつきましたね。ハナダシティ」

走りつかれている彼女はウルサ。

マサムネと別れた後早足でここまで来たのである。

「おお、ウルサ。来てくれたんですね」

「いやあ。まತ್ತてた、まತ್ತてた」

「すいません先輩。遅れてしまつて」

「いやいや、いいんですよ」

以前マサキの家に言った二人組みと合流していた。

「いやあ、きつと君のような女性がいればマサキさんも協力してくれるはずです」

「ええ、美人ですから」

「そんなことないですよ。お二人の奥さんだつて……」

「はは、そんなの昔のことです」

「そうそう」

「後でそう伝えておきますね」

「「や、やめてください」」

うろたえる男二人組。

「とりあえず、マサキさんの家に行くのです」  
「行きますか」



「行きましょう」

「あれ、お留守ですか？」

「いや、扉の鍵は開いてる」

「おい。いませんか」

勝手に家の中に入る三人。

「いないですね」

「いないな」

「いないよね」

そこにはマサキはいない。  
すでにさらわれた後である。

「特に荒らされた形跡とかは？」

「ないですが……ん？」

「どうしました？」

「でかい足跡が……」

部屋はそのまんまだが一部にでかい足跡がある。

「んゝ何かあるんじゃないですかね」

「何かって何でしょう」

「わかりませんよ、そんなの」

「でも荒れた形跡がないですしねえ……」

「しかたないです。マサキさんの協力はあきらめて本部に帰りましよう」

そう言つて三人はマサキの家を後にする。  
事件が起こつたという事実を知らずに……

本編に続く

裏第十七壊 気がつかないこと 気がつくこと（後書き）

悪って何ですか？

正義とは何ですか？

答えはどちらも偏見です。

いや、求めるものの答えですかね。

まあそんなことは気にしないでいいのでしょう。

答えを考えるのは自分なのですから。

第十八壞 美女とか出てきてマサムネさん狙いに来ないですよ？

【クチバシティ：ポケモンセンター】

「ふ、普段の格好でいいんです？」

「別にそういう階級の人があるパーティーと言うわけじゃないんじゃない。普通のトレーナーも来るぞ」

「サントアンヌ号は豪華客船なのに庶民に優しいんですね」

「まあ、そういうことじゃの」

いよいよパーティーと緊張し始める二人をなだめるオーキド博士。

（もしかしたら新たな戦いの出会いがあるかもしれない……ワクワクだな！）

（もしかしたらここでマサムネさんとの既成事実が……二ヘツ。楽しみです！）

それぞれは笑顔だったが、その心の中の考えていることには大差があった。

「なにやら二人の笑顔から怖いものを感じるのお……」

「マサキさんいませんでしたしねえ。私達のよさを伝える方法内ですかね」

「そういえばサントアンヌ号が来ているとか」

「それにのりこめばいいんじゃないですか！」

「でもチケットを買うお金がないですよ」

「ああ……帰りの分のお金まで使うわけには」  
「出入り口で講義でもします？」  
「そうしましょうか」

### 【サントアンヌ号前】

「見てくださいマサムネさん！　大きいですよ！　大きいです！」  
「ああ、大きいね」

年相応のはしゃぎ姿を見せるミズホを見て  
マサムネはかわいいと思って頭をなでていた。

「ニヘエ」

「なかよきことはいいいことじゃの。さて、そろそろ行くぞ」

そう言つてオーキド博士はサントアンヌ号へと向かう。  
マサムネたちもその後を追う。

### 【一方そのころ】

「ガイトおゝあの船に乗らないのおゝ楽しそうなのに」

クチバシテイのジムから出てきたガイトとユウミ。

「いや、しかしだな。俺はマサムネの先を行くと宣言してだな」  
「ええゝ乗りたいよおゝ乗りたいゝ」

ユウミは外との背中を乱打する。

「ああ、わかった。わかったから。乗ろう。乗ろうぜ」  
「そういうと思ってたよ。はい、チケット」

そう言つて背中のカバンからチケットを取り出す。

「何でお前がチケットを持ってるんだ」

「お母さんから貰つてたんだよ」

「お、叔母さんから！？ 行かないと言つてたら叔母さんをたてに使つて無理やり連れて行く気だったのか？！」

「さあ」

「こ、こいつ……まあいい！ とにかく行くぞ！」

「おお」

そんなこんなでガイトもサントアンヌ号に乗ることとなった。

### 【サントアンヌ号】

「す、凄い豪華ですね」

「そうだな。しかしいる客は一般人ばかりだ」

周りを見渡すと豪華な服装をしていると言う人は数えるほどしかない。

「豪華な服装をしている人たちは真の金持つて人みたいなのばかりだ」

「ふん。世の中お金より愛です」

「まあ、金はあるんだけどね……」

そしてマサムネたちはオーキド博士の後ろに続き部屋に向かう。

ガチャ

「ここがわしの部屋じゃ」

「ほえ」

「この船はカントーを離れた後シンオウに行く予定での。パーティの後はハウエンに向かう予定じゃ」

「シンオウに？」

「うむ。ナナカマド博士がわしに会いたいらしいのでな」

北の地シンオウ。

ガイト達の故郷である。

「へえ。一度行ってみたいなあ。雪とか見たことないし」

「いずれ行くこともあるじやろうて」

「さ、マサムネさん！ そこらを回ってみましょう！」

「ああ、そうしよう」

そう言つてマサムネたちは部屋を後にする。

「ふむ。ここで他の地方のものと戦うことができるかも知れんの……」

……

続  
く



第十八壞 美女とか出てきてマサムネさん狙いに来ないですよね？（後書き）

そろそろ疲れ始めた。

毎日一話考えるの辛いね。

ため書きしたりしてる人もいるんだろうけど。

第十九壊 何を感じた？ (前書き)

今回からタイトルは再びマサムネくんに戻ります。

## 第十九壊 何を感じた？

【サントアンヌ号】

「バトルフィールドか。すげえなあ船の中なのに」  
「船なのにすごいですね！」

船の中にある大きなバトルフィールドを見て驚きの声を上げる二人。

「そうだな。すごいバトルフィールドだと思うぜ」

突然後ろから声が聞こえた。

「ガイト！ お前も来ていたのか」  
「まあな。ユウミのわがままだ」  
「ぶうゝ私のわがままじゃないよゝ」

ガイトの背中にべったりとくっついてユウミは不満そうに言葉を発する。

「やれやれ……とにかくにもだ。俺は別に今はバトルする気はない。ジムに挑戦してそのまま来たしな」

「ジムに行つて来ただと！？ まさかまた……」

「ふっ。すでに攻略済みということだ」

「またつてことかよ……」

「決着は大会で……そういつたはずだ。俺は負けることはない」

「そうだな」

「ではそろそろな。ユウミがつるさいしな」

そう言つてユウミを背中にくつつけたままガイトはその場を後にした。

「あいつはあいつで大変だな……」

「何が大変なんです？」

「男にしか分からない大変さ……」

「男にしか分からない……そんな、マサムネさんの大変さを分かつてあげられないなんて……」

「……うん」

もはや何も言うことはなかった。

「バトルがしたい〜したいんや〜」

「おやおや、いつもと違う感じやな」

ジョウト訛りの男と女の子が会話をしていた。

「いやな、こう言うノリの際はバトルつてのが筋やねん」

「しかし、ここで降りてジョウトに帰れんの？」

女の子が男に問う。

「帰れな話が進まんけどな」

「せやな。せやけど兄ちゃん。どこのだれと戦つて言っん？」

「てけとーや、てけとー」

「そか。てけとーか」

二人はニヘラニヘラと笑っている。

「おうおう。なら相手あれでいいんちゃう？」  
「よしよし。あいつと戦ってみよか」

二人は見つけた適当な相手に戦いを挑みに向かった。

「なんか、会ってはいけないものに会いそうな予感が」  
「突然何を言うんですかマサムネさん」  
「いや、なんか体が突然震えて」

マサムネは何かわからない不安に襲われた。

「ん？ バトルフィールドでバトルが始まるみたいだな」  
「おやおや、マサムネさんが一番になると思っていたのですけど」

バトルフィールドを見ると同じ年の少年と年上らしき青年が立っていた。

「ん、あれ？」  
「マサムネさん？」  
「え、あ、何？」  
「いえ、何かを見ていたようで……」  
「俺が、何かを見ていた？」  
「ええ、何かに……」

マサムネは少し考えていた。

（俺があのでフィールドを見て何かを感じた……そういえばガイトも

時も何か……)

何かとは何か……

何かを感じてはいる

何を感じているのか

何かはわからない……

「何か……」

「マサムネさん？」

「あ、いや。あれ？」

長い時間考え事をしていたのかバトルは知らない間に終わっていた。

「どうやら一対一で短期決戦で終わったようですね」

「短期決戦でか」

「もうバトルしてた人はどこかに行っちゃいましたよ」

「行っちゃったか……」

感じた何かを分からずじまいに終わってしまった。

結局いったい何だったのか。

そもそも『何』とは……

「どうやらおじいさんのお話が始まるようですよ」

「ん、ああ」

ミズホの言葉へのマサムネの返事は軽いものだった。

「マサムネさん？」

「ん？　どうかした？」

「心ここにあらずという感じなので」

するとマサムネの顔は少し驚いたような顔になった。

「いや、そんなことはないよ。いつもと変わりはないよ」

「そう、ですか？」

（バトルを見ただけでここまで悩むものなんだろうか……）

ただミズホの心には不安が残った。

続く

第十九壞 何を感じた？（後書き）

感想は募集しますがいつときますが  
答えられないようなものにはこたえられないので  
そのところはよろしく願いします。



第二十壊 - 1

かつこよすぎる……

よしゴーオン！（前書き）

感想は募集中です。

第二十壊・1      かつこよすぎる……      よしゴーオン！

「以上で話はおしまいじゃ」

オーキド博士の話は終わった。

「どうやら話も終わったようだ」

「そうですね。マサムネさんこの後は……」

「この後ね。どうするかね」

（普段のマサムネさんに戻ってる……でもなにか……）

「どうした？ ミズホちゃん？」

「あっ、いえ……」

間もなくダブルバトル景品付きバトルイベントが始まります

突然アナウンスが聞こえる。

「景品付きダブルバトル？」

「あっ。あつちで参加者募集中らしいですよ」

「景品は勝ったペアの一人一人がくじ引きで決まるか……」

面白そうな話である。

対戦相手は用意された船員と戦うらしい。

「運だめしに力試してか……面白い話だ」

「試し放題ってやつです」

「試し放題。しかも無料でってか……参加しかねえよ」  
「グフフ。愛の力で簡単に勝利です」

ミズホもいつもの調子に戻った。  
不気味な笑いが周りの視線を集める。

「ミ、ミズホちゃん？」

「さあ、行きましょう。グヘヘ……」

ミズホのキャラは安定しない。  
壊れるときは壊れる。

### 【特設バトルフィールド】

「ん、ん？ 違和感はないか」

「マサムネさん？」

「ん、ああ。相手が気になってな」

（さっきの違和感がない。つまりはあの対戦者はいない……）

マサムネは今のところ通常だ。

（しかし、いないというのは確定か？ ガイトの時も始め少し違和感を感じただけだ）

違和感は違和感。

その何かはわからない。

「君たちが挑戦者だね？」

「っと、そうです」

「ですよ」

船員が現れ二人に言葉をかけてくる。

「よし。ならばバトルの準備はOKか！」

「できてます」

「です」

「ではパドル！」

船員はボールを構え投げる。

それに合わせ二人もボールを投げる。

「行けっ！ シャドウ！」

「行くです！ トガミ！」

ボールからシャドウとトガミが出てくる。

「コッコココココ」

「ガメ！ …… ガメ？」

隣のシャドウがいつもより光っているような気がする。

トガミはそう思った。

「リキー」

「メノオ」

船員のポケモンはワンリキーとメノクラゲだ。

「試合開始！」

審判役の船員が叫ぶ。

「コッ コッ コッ コッ」

シャドウはとびはねる。

「ガメエ！」

トガミはこうそくスピン。

「リキキキ！」

「メノオ！」

トガミのこうそくスピンはよけられる。

「ガメガメガアアア！」

だがさらに高速に回転し、こうそくスピンの勢いは高まる。

「リキッ！？」

「メノ？」

二匹の周りを回っているだけで攻撃をしているわけではない。

「コッ コッ コッ コッ」

二匹がトガミに集中している瞬間にシャドウが落下してくる。

「リキッ！」

しかし気がついたワンリキーのからてチョップで当たる直前に落とされる。

これによりほんの少しワンリキーはダメージを受けたようだが。

「ガ、ガメガ!？」

予定が崩れたトガミは急停止する。

「メノオ！」

「ぜ、ゼニガ!？」

トガミはメノクラゲにしめつけられる。

「ガ、ガメエ」

「リキキ」

徐々に近づくワンリキー。

「ガ、ガメガ……」

こうそくスピンしようにもワンリキーが近すぎる。

逃げたほうが大ダメージを受けるかもしれない。

「……コッ……コッココココココ」

「リキ?」

後ろから突然倒れているはずのシャドウの声がする。  
ワンリキーは気になり振りかえってしまう。

「ガ、ガメガ！」

その際にこうそくスピンでしめつけるから脱出する。

「メノ！」

再び捕まえようとする。

「コオオオオオオ！」

『その時ふしぎな事が起こった』

シャドウは光に包まれた。

「リ、リキー!?」

シャドウに近づいていたワンリキーはうろたえる。

「ついに来たということか……」

「な、何が来たんですか？」

「進化だよ……」

マサムネの言葉が終るとともにシャドウは巨大化していく。

「リ、リキイ!?」

「ガ、ガメガア!?」

ワンリキーだけではない。トガミも驚く。

「ギャラアアアアアアアア！」

進化したシャドウの姿はギャラドスだった。

その姿は普通のギャラドスではなかった……

赤色と言うには遠い。

黒い……黒い龍と言うべきだろう。

赤い模様が入っているのが凶悪さを強調させる。

「か、かつこよすぎます……」

「ああ、かつこよすぎる……」

どこの黒い？5の元刑事人のセリフを二人は言っていた。

後篇に続く



第二十壊 - 1      かつこよすぎる……      よしゴーオン！（後書き）

自分は90年代ごろから見えます。

そろそろ更新を毎日するのはやめます。

少し更新が一時停止するかもしれませんが。  
しないかもしれませんがご了承ください。

ニコニコの人気のない実況の続きをしたいので。

第二十壊・2 かつこよすすめる……それともう一つ（前書き）

感想は募集中です。

第二十壊 - 2      かつこよすぎる……      それともう一つ

「……おっと。かつこよすぎて見とれてしまった……よし、シャドウ。お前の力を見せてやれ！」

「ギャヤヤオオオオ」

シャドウの口からはかえんほうしゃが放たれる。

「リキイイイイ！」

体力が減っていたワンリキーはその火炎を受けたっていられず倒れる。

「メノオ！？」

「ぜ、ゼニガア！」

「メノオオオ！」

驚くメノクラゲにトガミはたいあたりをする。

「ギャラアアア！」

さらにシャドウの尻尾の部分で跳ね飛ばされトガミの方向に向けて飛んでいく。

「ガメエガア！」

トガミのアクアテールがメノクラゲにクリティカルヒット！  
つまりはきゅうしょにあたった！

「メ、メノオ」

メノクラゲもその場に落ちて倒れる。

「あ、あ、ちょ、挑戦者の勝ち……です……」

審判役の船員は目の前で起きた出来事を理解できなかった。

「勝てたか……しかし。かつこよすぎる」

「ですねえ！」

そう話しているとオーキド博士が近寄ってくる。

「なんとも珍しい色違いのギャラドス！ 素晴らしいのお」

オーキド博士は年甲斐にも泣く目をきらきらしている。

「ですよ。自分も色違いは始めてみましたよ」

マサムネは目上の人への一人称は自分だ。

「ガメ……メエ！」

「あれ、トガミどうしたの……ってあれ！？」

トガミの体も光っている。

進化のするようである。

ピキューン

「カメー」

「なんか色が変わって目つきが悪くなった感じですね」

「カ、カメル！？」

「もう少し頼りのある感じになると思ってたのに」

「ルウ！？」

トガミは膝をついて倒れた。

「しかし珍しいのぉ」

「ですね」

さらにシャドウに全員の興味が向きトガミにはだれも興味を示さない。

「カ、カメルウウウウウ！」

そして誰も見ぬところでトガミは泣き叫ぶことしかできなかった……  
今回はシモンは出ていないので慰めることはなかった……

「そついえばガイトがいないな」

「もう帰っちゃったんですかね」

「まあ、今日に出航だしな」

ガイトはもうすでに出発したのだろう。

そう思いマサムネ達はオーキドに別れの言葉をいいサントアンヌ号を後にした。

【その頃のガイト達】

「う、うう。ここは？ 俺は……」

「ガ、ガイトオ……」

「ユウミ？ ツとなんだこれ……」

体が亀甲縛りで縛られていた。

「あ、あいつらだよ。あいつらが……」

「あいつが……」

ガイトはある男の顔を思い出した。  
一瞬だったが何かを感じた。

「それにこの船もう出航したみたいだよ……」  
「なにっ!？」

ガイト、帰郷。

「というわけでシャドウとトガミが進化した」  
「みんな仲良くね」

ポケモンセンターでシャドウを出すわけにはいかないので近くの広場である。

「ギャラア！」

「カメル」

「モグリユリユ」

「ピ……」  
「リ」

何やら感想はそれぞれのようだ。  
しかしサユキは何にも興味を示していない。

「しかしシャドウは……博士が言うには……」  
「おじいさんが言うには？」  
「ゴニョゴニョ」  
「ええっ！　そ、それは！」

それは二人には衝撃の事実であつた

どうなる次回！

第二十壞・2

かつこよすぢる……

それともうっ（後書き）



## 第二十壞 補足

そういやそういつのもあつたね（前書き）

商品の存在を忘れていた。

## 第二十壊 補足

そついやそついうのもあつたね

### 【サントアンヌ号】

トガミが叫びながらひざを突いているとき  
船員がマサムネ達に話しかけてきた。

「え」と。君達が勝利したからこのくじを引いてくれるかな」  
「ん、あ、ああ。そういう話だったっけ」  
「すっかり忘れてましたね」

シャドウのことですんなことをすっかり忘れていた。

「この箱の中から引いてね」

そう言つて船員は箱を差し出す。  
そしてその箱に開いている穴にマサムネは手を入れる。

「さて、何が出るやら……」

ガサゴン

「これが。結果は……2等！」  
「おめでとう！こちら商品のひでんマシン01だよ」  
「え？ あ、どうも」

あまりうれしくない。

「では、私も」

ガサゴソ

「これは……3等です!」

「凄いな君達は。こちら商品のかみなりのいしだよ」

「どうも」

使うかは微妙だ。

「と言うわけで、ダブルバトルイベント第一回目は白熱した戦いで終了! 二回目は一時間後に行われるのでよろしく!」

船員がそう叫ぶと叫び声があがった。

そうしてイベントは終わった。

本編に続く

裏第二十壊

ピンときたら

考える(前書き)

感想募集中です。

## 裏第二十壊      ピンときたら      考える

【数日前：お月見山付近：ポケモンセンター】

「へえへえ……疲れたでござるよ」

「まあ、そうだね」

二人分の荷物を持ち歩き疲れるカナブと

何も持たずに歩いたカナデとは疲れ方はだいぶ違う。

「今日はここに泊って明日にハナダでござるな」

「そうだね。君が速く歩けばだね」

「な、なら少しはもってくれてもいいでござるよ!」

「僕にそんな権利はないんだよ」

「ろ、労働基準を守ってほしいでござる〜!」

泣き叫ぶカナブを置いてカナデは宿泊申し込みに向かう。

「おや?」

カナデはだれかを見つける。

「あの、人は……」

カナデの視線にいるのは……

「ギャラアアアア!」

「モーグモーグ！」  
「カ、カメル……」

シャドウが叫び、それを見て叫ぶシモン。  
そして横で凹みながらシモンに話しかけるトガミ。

「今日は寝るとして明日はいよいよクチバジムだ」  
「クチバジムはですね。間もなく引退するというキイガと言う人がリーダーです」

「キイガ……噂ではリーダーはマチスという元軍人だと……」  
「ええ、今月を持って引退して交代らしいです」

そう言つてクチバシティパンフレットを読むミズホ。

「かなりのご老体なんだろうな」  
「ええ、64歳で定年まで頑張っていたらしいですよ」  
「らしいじゃなくて今もな。65まで頑張るってか」

そう言つてパンフレットに書かれている写真を見る。  
昔の若いころの写真と今の写真が貼つてある。

「ん？」  
「どうしました？」  
「いや……」

（どこかで見たことあるような顔だな……ま、気のせいだろう）

そう言つてマサムネは疑問をなかったこととした。  
別段気にすることもなかった。

「朝か……」

マサムネはペットから起き上がろうとする……

しかし、お馴染のがんじがらめで起き上がることができない。

「……もう少し寝るかな……」

何年後かにはきっと自制心を抑えられなくなる。

マサムネはそう思った。

続く

裏第二十壊    ピンときたら    考える（後書き）

オリジナルジムリーダー……

いったい何者なんだろうか……

というわけで次回をお楽しみにです。



ひなまつり……番外編じゃないよ！そして本編でもない（前書き）

アンケートでした。

今回作者さん書いて突然変な気分になりました。

というわけで暴走開始。

ひなまつり…… 番外編じゃないよ！ そして本編でもない

ひな祭りです。

ひな祭りですが

自分にはひなまつり。

つまりは暇がないってことですね。

いや、笑えませんか。

そうですね。はい。

この頃は感想を多くの人にもらえてるのに  
感想が少なくてやる気でないですとかいう  
わがままな人が増えてきたものです。

ゆとり教育の弊害です！

かくいう私もゆとり教育世代だよ！

そのせいでゆとりゆとり言われんだよ！

自分は頑張って生きているんだあゝ！

と、そんなことを言いたいがために話を書いたわけではない。

アンケートですよ。

アンケート。

一つ目

この先何ですがね。

パワプロクンポケット基準の全年齢対象で話書き続けていいですか？  
いやね、自分的にはこのまま行きたいんですけど

どうかな、と思って。

まあ、参考にするだけです。

## 二つ目

シャドウ君のようなキャラを増やしていった方がいいか。  
つまりは普通じゃない子を出しまくりでいいのかと。

## 三つ目

自分はポケモンの小説だけ連載してるわけではないんですね。  
長期で連載休止しているものが多いんですわ。  
こっち止めてそっちに行ったりしてもよろしいですか？  
一月ほど離れることになるでしょう。

## 四つ目

コラボって楽しいの？  
てか、コラボとかがあってどうやってやってるのさ。  
すると世界観を共通させなくちゃいけないくてむずくならない？  
コラボ回は別世界なわけ？  
それでいいならしたいなあ。  
でも壊すよ、コラボ相手のキャラとか気にしないで設定だけで話作るよ。

まあ、以前自分のキャラと性格が違いすぎるとか言われた経験あるけど……

あ、逆に使ってもらうとか言つのもあるのですかね？

## 五つ目

ドロドロしていい？

いや、するけど

他にどういう要素が必要ですかね？

というわけで答えをお待ちしております。

ひなまつり…… 番外編じゃないよ！ そして本編でもない（後書き）

期間限定アンケート。

解答者が一人なら

たぶん意味ない……

ああ、わがまま言ってる人たちみたいになりたい……

第二壊：1 短くてもいい！ 説明しろ！（前書き）

感想募集

そして今回は題名のごとく

## 第二壊・1 短くてもいい！ 説明しろ！

### 【クチバシティジム前】

「さてさて、歴年のベテランに俺たちは勝てるかな」

「ふふ、私たちが負けるとでも？」

マサムネの言葉に笑いながら答えるミズホ。

「まあ、そう答えるとは思っていたけど。さて行くつか」

そう言つて二人はジムの中へと行く。

「おやおや、挑戦者さんかの」

「あんたがジムリーダーのキイガさんか」

目の前にいる老人がジムリーダーのキイガ。  
歴年の風貌を見せる。

「ああ、で、ここでの対戦方法は？」

「そうじゃの……引退までにダブルバトルというのをしたいと思つておつた……それに」

「それに？」

「今年はポケモンリーグ大会はダブルバトルを導入するようじゃしな」

「なんだって！」

知らなかったとは言えまさかダブルバトルも導入されていたとは。

「シングルかダブル。どちらかしか参加できぬようじゃしの」

「ど、どちらかにだけ!？」

「ダブルバトルに参加するにきまってます!」

ミズホの叫び声が響く。

「さあ、私とマサムネさんとダブルバトルです!」

そう言ってミズホはボールを構える。

「まだ話は終わってはおらぬが……まあよいかな」

「よっしゃ! ポケモンバトルだぜ!」

後半に続く



**第二壊 - 1 短くてもいい！ 説明しろ！（後書き）**

感想募集なりです。

アンケートの答えも待ってます。

第二壊・2 なんとおおおおおお！（前書き）

感想随時募集中。

## 第二一壊・2 なんとおおおおお！

【クチバシティジム】

「では行くかの。いでよマルマイン！」

「マルマー！」

「マルマル！」

マルマイン二体が登場した。

「ふおおおお。スピード戦法についてくれるかの」

「勝てる勝てないじゃない。戦うだけだ！ 行け！ シモン！」

ポシュウイン

「モグウ！」

「よし、お前に出来ないことはないところを見せてやれ！」  
「モグリユ！」

マサムネとシモンが燃え上がっていた。

「じゃあ、カミコ。よろしくね」

「ピカチュ」

ミズホとカミコはいつもどおりだった。

「ジジジ」

「ジジジ」

高速で動き続けるマルマイン。

その高速の動きにシモンは付いていくことができない。

「ふふふ、属性がすべてと思わぬことだな」

不敵に笑うキイガ。

「モ、モグウ」

「チュウ……」

カミコは何かを考えているようだ。

「シモンで楽勝かと思っていたがな……しかしシモンに電気技は聞かない。長期戦になるだろう」

「それはどうじゃるな。マルマイン！」

「ジジジ」

「ジジジ」

ビュン！

「モグリユア！？」

「ピカチュウ！」

シモンはソニックブームを食らう。

カミコはシモンを踏み台にしてよける。

「なんでシモンを踏み台にしたあ！？」

「カミコは晩御飯抜きね」

驚きとまどうマサムネと冷静に罰を決めるミスホ。

「ピカアチュ！」

シモンを踏み台にして飛び上がったカミコはかけぶんしんをする。

「マ、マル！」

「マ、ママル」

一瞬それに片方のマルマインが驚いたが  
もう一方のマルマインがなだめ、再び元の動きに戻る。

「チュ！」

「チュ！」

「チュ！」

「チュ！」

かけぶんしんしたカミコは回るマルマインに向けてそれぞれ落ちていく。

「マル！」

「マ、マル……マルア！」

「な、なにじゃ！　かけぶんしんにぶつかってまひ状態になるなど！」

本物のカミコは頭を押さえているシモンの横に着地しているのだ。  
ならばあのマルマインたちをまひ状態にしたカミコは何なのか。

「し、質量をもった残像とでも言うのか！」

残像。そう、かけぶんしんはそういうものだ！

だが、カミコのかけぶんしんは違う！

それぞれの分身にでんじはの電気が込められていたのだ！

それによりかけぶんしんにぶつかったマルマインはマヒ状態となつてしまったのだ！

「でんじはとかけぶんしんの合わせ技とはな。仕方ないから許してやろう」

「でも別に晩御飯は豪華にしないからね」

トレーナー二人は冷静を取り戻した。

そもそもミズホは冷静だ。

「モ、モグリユ！」

「ピピピ」

「モ、モモモ！ モグリユ！」

踏み台にしたことを怒っていたがカミコに現状を説明され落ち着く。

「モオオオオグリユ！」

シモンはマルマインめがけて攻撃をする。

マルマインはマヒして高速に動けない。

シモンはつめときをしながらマルマインに向かいきりさく攻撃！

「マルマアアア！」

「マ、マル！」

「モグリユア！」

「マルウウウ！」

動けないマルマインたちは速攻でシモンにより始末された……

「まさかこうなるとは思わなんだよ」

「俺もいろいろ予想外だったけど……」

「まあ、とりあえずこのパッジを受け取るがよい」

そしてマサムネ達はパッジを受け取る。

「最後の試合。楽しかったぞ」

「ジムリーダーとしてだろ。あんたのトレーナー人生は終わってないよ」

「そうですよ」

「ほっ。うれしいことを言ってくれるの」

キイガは少し笑う。

「じゃあな、キイガさん。またいつか戦おう」

「またです」

そう言つて二人はジムを去った。

「もう一度か。まだまだ頑張れるかの……」

ガシュ

「おや？ 誰か来たのかの？ もう今日は挑戦を受けて」

ザガシュ ビチョア

「な……」

「勝ちましたね。次はどこに行くんですか」

「次はとりあえずシオンタウンだ」

「シオンタウン？」

「ああ、タマムシシティに行くための通過点としてな！」

そう言って二人はポケモンセンターへと帰って行った。

その時何かがあったことを知らずに……

続く



**第二壊・2 なんとおおおおお！（後書き）**

アンケートの答えも待ってますよ

後よければ聞いてください。

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm13785049>

音量にご注意ください。

## 裏第二一回 かかわることはないかかわること

【ポケモンセンター】

「と言うわけで。シオンタウンにはこの橋を通って上に行くんだ」

「でもここにカビゴンが寝ていて通れないとあります」

「ふふふ、心配は要らないぞ。これを見よ!」

マサムネが取り出したのは折りたたみ式の簡易ボートである。

「寝ている横からボートで行けばいい。深いから泳いではいけない  
がこれならいける」

「さっすがマサムネさんです!」

いつもの如くきやつきやと喜ぶミズホ。

「カ、カメル?」

「モグリユ」

「カ、カメ!」

「モグリユ」

「カ、カメル!」

二匹はいつもと変わらなかった。

その後二人はシオンタウンに向かった後  
クチバシティでは事件が起こっていた。

『クチバシティジムリーダー キイガ 行方不明!』  
『まもなく定年退職寸前と言うところでの事件!』  
『ジムには血痕が発見された模様』

そう。二人はこの事件にはかかわらないだろう。  
だが、着々と何かが進んでいる……

続く

第三壊 はい、温もった！ ついでに俺も温もった！（前書き）

感想募集中です。

第三壊 はい、温もった！ ついでに俺も温もった！

「いやあ、船はいいなあ」

「簡易のボートですけどねえ」

横に橋をふさいでいるカビゴンを見ながら  
のんびりとボートに乗っている二人。

「ボーツとしているってのはいいですね」

「うまいこというね」

寒いシャレすら笑いに変えてのんびりとしている二人。  
そんな二人はボートをこいではない。

「カメカメカメカメカメ！」

ボートの動力はトガミだ。

「のんびりだ」

「のんびりです」

「カ、カメルウウウ！」

「さて、ついたついた」

「ご苦労様トガミ」

「カ、カメ……」

トガミは睨んだ表情で二人を見ている。

「シャドウが使えればよかったんだが、無理だしな」  
「仕方ないですね。おじいさんの言うとおりなら」

そう。そもそもギャラドスであるシャドウがいれば  
ボートなど入らないだろう。ならばなぜ？  
その疑問は読者諸君の心に残るだろう。

「そうだ、トガミ。このアメをやるよ」  
「カメ？ カメ」

そう言つてマサムネから受け取ったアメを食べるトガミ。

「カ、カメカ！」

体に力がみなぎる。  
レベルがアップしたようだ！

「ふしぎなアメだったんだがな。親父からの贈り物の一つだが」  
「マサムネさんのお父さんはいろいろな物を持ってらっしゃるんですね」

「確かにいろいろだな」

そう言つて背中にしてしまっている父親からの贈り物を見るマサムネ。

（開発……か……そういやミズホちゃんの親つて……）

そう言えば母親のヨーコと知り合いだというのは知っているが  
一度も顔を見たことがないし話したこともない。  
昔遊びに来ていたときもオーキド博士の助手と来ていたはずだ。

「そう言えば、ミスホちゃんのお父さんって……」

「……」

「あ、いや」

突然場の空気が悪くなってしまった。

（確か、マサラから旅立つときにもこういう感じになったことが……  
確かに母親からの贈り物などがあったときにこうなっていたはずだ。）

確か棒読みのような感じで流すように母親へのお礼を伝えるようにオーキド博士言っていたはずだ）

親と何かあったんだと、マサムネは思った。

「お父さんとお母さんは多分今はハウエンです」

「え、ハウエン？」

「お父さんはおじいさんの子供です。ハウエンのオダマキ博士の助手になりました」

「ミスホちゃんをおいて？」

「昔からですよ、そんな事」

そう言ってミスホは何も言わなくなりシオンタウンのほうへ歩いていった。

いつもらしさはどこにもない。

（なんとなく聞いただけなのに……やってしまったな）

そう言っただけでマサムネはミスホに向かい走る。

ギョ

「ほ、ほえ！？ な、なんなんです！」

「いや、温もりの少ないミズホちゃんを温めようかね」

マサムネはそう言ってミズホを強く抱きしめる。

「にゃ、にゃにゃー！？」

「はっはは。じゃ、行こうか」

そう言って離れたマサムネはシオントウンに向かって走る。

「あっ、あっ！ ずるいんですよ！ こっちからするときは何もしてくれないくせにー！」

そう言ってミズホもマサムネを追いかける。

二人の旅はまだまだ続く！！

続くつたら続く！



第三壞 はい、温もった！ ついでに俺も温もった！（後書き）

ノリノリで書いていた。

こつこつ話は楽しく書ける。

第三壊 - 1 謎発見！（前書き）

感想は随時募集中

## 第二三壞 - 1 謎発見！

【シオントウン】

「なんか暗いな……」

「ポケモンタワーがあるからじゃないですかね」

大きく聳え立つ塔。

ポケモンのお墓ポケモンタワーである。

「でかいなあ」

「ですよねえ」

顔をあげて見上げる二人。

「ほっほほ。ポケモンの供養にはまだものたりん位じゃ」

とづぜんの声。

後ろを振り向くと一人の老人がいた。

「わしの名前はフジ。このポケモンハウスの理事じゃ」

後ろにある建物。

どうやらポケモンの孤児院のような物らしい。

「あれ？ あなたはおじいさんの知り合いの」

「おや？ ユキナリのお孫さんかの。大きくなったの」

ユキナリとはオーキド博士の名前だ。

ポケモンでフルネームがわかる人は珍しい。

「して、隣の男の子は誰じゃの？」

「恋人です」

「まあ、そうです。はい」

「ほお。この頃の子供というのはのお」

この頃というのはどういう事か。

まあそう言う事なのだろう。

「ガラガラ」

「カラあ」

近くで元気よくガラガラとカラカラが遊んでいる。

「おお、あの二匹は親子での。父親は病気で死んでしまったの。あのからからのかぶつとる骨は父親のものじゃ」

「ああ、カラカラは親の骨を被るといいますからね」

「成長してどうやったらガラガラみたいになるかは分らないですけど」

「まあ、それは学界でも謎のままじゃ」

「フジさんは博士だったんですか？」

「む？ い、いや、ユキナリから聞いたのじゃよ」

少したじろぎながらしゃべるフジ。

否定の言葉を発するが肯定しているようなものだ。

「でと。シオンタウンは特に何もすることがないしなあ」

「ならポケモンタワーの最上階にでも行かんか？」

フジが二人に話しかけてきた。

「最上階にですか？」

「ああ、不思議な石碑があつての」

「不思議な……」

マサムネは少しわくわくする。

「どうもだれにも動かすことができなかったの。下に何かがありそうなのじゃが」

「下の階から何もできないんですかそれ」

「うむ。なんとも不思議での」

（不思議つてもものじゃないな。神秘だ……）

マサムネはその石碑にかなりの興味を感じた。

「行きましよう。最上階に！」

「おお、マサムネさんノリノリです！」

「そこまで興味が出るとはの。では今日は遅いから明日に行くとしよう」

そう言つてフジは今日はうちに泊まるように言った。

そして二人はそれに甘えることとなり、空き部屋に泊まらせせてもらった。

中編に続く

第三壊・2 謎！ いや、朝ごはんでは謎！（前書き）

感想は随時募集。

ランキング始めました。

## 第三壊・2 謎！ いや、朝ごはんではそれは謎！

【そして次の日】

「朝ですよ。朝ですよ！」

「わ、わかったから。揺らさないで……」

さすがに今回はフジがのぞきに来る可能性もあるので一緒にはねていない。

同じ部屋だがペットは別だ。

「では、おはようのキスを」

「突然何を」

「私のマサムネさん成分が一緒に寝なかったことで不足しているんですよ！」

ミズホはその場にぴよんぴよんとぶ。  
ぶんぶん揺れてるがマサムネはなれてしまった。  
なれというのは恐ろしいものである。

「とりあえず着替えてくる」

「一緒に着替えましょう！」

「成分不足してるから？ いつもはしないのに……」  
「ですからっ……ふえっ!？」

マサムネはミズホをぎゅっと抱きしめる。

「成分補給。できたよな」

「へ、へっ」

ミズホは顔を赤くしてくるくる回っている。

「んじゃ、着替えに行きますか」

なれというのはこういうものだ。

「おはようございます。フジさん」

「おお、おはよう。……おや？ ミズホちゃんはどつしたのじゃ」

「ああ、もう少ししたら来ますよ」

「何かあったかの？ 何かあったのかの？」

この老人。

昨日のいいからわかるが  
年を考えてほしいものである。

「別に何もありませんよ。とりあえずご飯にしましょうよ」  
「そうかの。ならそこに用意があるでの」

和食。

この世界で和食と言うのが正しいのかどうか分からないが  
和食が置いてある。

「おお、味噌汁に焼きジャケに納豆、海苔と……あれ、これパンじゃないですか？」

「いいじやる、別にパンでも」

「いや、ふつうはご飯でしょ」

「別にパンでも食えることは食える」



少しにらみ合う二人。

「お、おはようございます!」

「ミズホちゃん。起きたのか」

「はい」

そしてミズホはテーブルに着く。

「おいしそうですね。いただきます」

パクパクと置かれていた食事を食べる。

「……まあ、いいか」

「うむ。いいのじゃ」

そう言ってマサムネも席に着き置かれた食事を食べる。

「さて、そろそろ行くかの」

「はい」

「レッツゴー です」

そうして一行はポケモンタワーへと向かう。

後半に続く

第三壊・2 謎！ いや、朝ごはんではそれは謎！（後書き）

元ネタを知る人は少なからうて。

そもそも元ネタとはほど遠い内容だが。

ところで皆さんはコミックボンボン購読されてましたか？  
休刊するまで私は購読してました。

**第三壊・3 暴走理由は和食にパン！（前書き）**

感想は随時募集です。

### 第二三壊・3 暴走理由は和食にパン！

【ポケモンタワー】

「なんか予想よりも明るいですね」

「一応人が来る墓じゃからのう。少しは明るくないとの」

予想より明るいといっても少し薄暗い。

何かが出てきても不思議はない。

「ふふふ。なんだかお化けでも出てきそうですね」

「そうだね。怖い？」

「別にです。怖がらなくてもいつも抱きついてますから。怖がる必要はないです」

「……そうかい」

二人はいつも道理である。

そしてフジの後をついて歩く。

「人氣がなくなってきましたよ……」

「頂上に行くものは少ないからのオ」

上に行くたびに人がいなくなっている。

「うっん。薄気味悪い感じですね」

「ゴスゴス」

どこからか何か聞こえた。

「ん？ 何か言いましたか？」

「いや、俺は何も」

「なら……」

「いや、わしでもない」

「ならいつたい……」

ミズホがくるつと振り向くと……

「ゴースト！」

「うわぁおっ！」

突然ゴーストが現れた。

「うおっぶ……いきなり出てくるから驚いて朝ごはんのパンとおかずが変に混ざった味が口に広がったじゃないですか！」

「我慢してたんだ……」

朝ごはんを何も言わず食っていたがどうやら無理していたようだ。

「許すまじ、ゴースト！」

「ミ、ミズホちゃん？」

ミズホは暴走している。

「うおおおお！ 出でこいトガミに、カミコ！」

ボシウウン

「殺つてしまえ！」

「カ、カメ!？」

「ピ、ピか?!」

ミズホの突然の言葉に戸惑う二匹。

そしてそれを驚きながら見守るマサムネ。

「ゴース?」

「ええい! 私たちを見て笑っている! いいから速く殺る!」

「ゴーストポケモンを殺るってどうやるんだろ……」

マサムネは疑問が生まれた。

「ええい! トガミはみずのはどう! カミコは10まんポルト!」

「カ、カメ! カアアアメエエエエ!」

「ピイイカアアアアアアア!」

二匹の技が融合し爆発的な力になりゴーストに直撃する。

「ゴオオオオス!」

「まだ殺られてないですか!」

ミズホはかなり怒っている。

「ミズホちゃんが壊れた原因は朝ごはんのせいですよ。フジさん」

「わ、わしのせいじゃなからう! ゴーストのせいじゃ!」

そして横では再び起きる朝ごはん論争。

「うおおおお！　むかつくでええええす！」

ミズホはその場にあるものをゴーストに投げつけた。

「ゴス！？」

ポシュン

「ほへ？」

ミズホが投げたのはモンスターボールだ。  
怒っていたときに腰から一つ落ちたのだ。

「ほ、捕獲に成功しちゃた！？」

「ありやまあってやつだ……」

「ほんとにのう……」

### 【最上階】

「くううう。こき使ってやるです！」

「いや、ゴーストはあまり悪くは……」

「むう。考えてみれば頭に血が上ってかもしれません……」

落ち着きを見せ始めるミズホ。

「そうそう。ちゃんと仲間として扱ってあげるべきだ」

「はい。そうしますです」

「仲良き所すまんがの。ついたぞ」

フジが話しかけてきた。

「どうやらフジの近くにあるのが例の石板のようだ。確かに動かせるようになってるように見える。」

「これは動かせるか確かめたんですよね？」

「前にも言ったが何をしても動かぬのじゃ」

「そうですか」

そう言つて石板にそつと触れるマサムネ。

「ん？」

「どうしたんです？」

「いや……ん？」

石碑には文字が書かれている。

見たことのない文字だ。

事実読めない。

しかし見たことがある。

「この文字……ん？ 石板に穴が」

「ああ、何かをはめるように見えるがの。はめるものが見つからないのじゃ」

「……はめるものか。これとかだったりして」

マサムネがとりだすのは父親から送られてきたドリル型の首飾り。

「あれ？ ちょうどよさげじゃないですか？」

「そつ？ ならはめてみちゃおうかなあ〜」



そう言つて軽い気持ちではめるマサムネ。

カチッ

「あれ、はまつた……」

「でも何も起きませんね」

「やっぱり偶然はまつただけか」

そう言つて穴から取り出そうとする。

「んっ？ んっ？！ 抜けない！」

「ふえ？ て、手伝いますよー！！」

二人で一所懸命に取ろうとする。  
そんな時。

グルッ

ドリルの部分が回転した。

ウイイイイイイイン！

「え、な、何？」

「な、何です？」

ウイイイイイイイン！

「「うわああああああ！」」

二人が光に包まれた。

そして光は収まるとそこに二人はいなかった。  
そしてそこには腰を抜かして驚くフジしか残っていないなかった。

続く

### 第二三壞・3 暴走理由は和食にパン！（後書き）

わくわくします？

100円でテイルズオブデイスティー買ったので  
わくわくしてますよ私は。

遣ったことないのでシンフォニアも売ってたので490円で買いましたよ。

サモンナイト2とトゥルーラブストーリー2と  
新スーパーロボット大戦を買って

全部込めて940円でした。

後電撃プレイステーションも買って

1500円ぐらいしましたが。

これ後書きじゃなくて近況報告じゃね？

キャラクター紹介（第一部版 中盤）（前書き）

第一部（中盤時）でのキャラ紹介です

## キャラクター紹介（第一部版 中盤）

流される男

マサムネ（15） CV：緑川光（仮） 出身：イッシュ

ご存じ主人公。

ニビにてミズホに告白されてから主導権を奪われている節がある。  
年上に対しては一部を除いて敬語で話す。

和食が好きでありパンが好きではない。

やる時はやる男であり、ギャルゲーで鍛えた力でミズホの好感度を  
上げる。

戦いのときには感情を抑えることができなくなる。

そのためちよつとしたことで切れる。

相棒

シモン（モグリュー） CV：柿原徹也

マサムネの相棒と言うよりトガミの相方と言えるようになってきて  
いる。

一応はミズホのメンバーとも合わせ一番強い。

サユキ（チュリネ） CV：丹下 桜

マサムネ以外に気を許そうとしていない。

しかしシモンには少し気を許しているようである

シャドウ（ギャラドス） CV：遊佐浩二（友人の直感で）

黒い体に赤い模様のギャラドス。

通常より凶悪性を増しているように見える。

オーキド博士によると珍しい突然変異体らしい。

自称健気な女の子

ミズホ（11） CV：桑島法子 出身：カントー

身長144cm B85（H） W48 H80

マサムネに告白したのち妄想癖がさらに悪化した。

マサムネ絶対主義者となりマサムネのことを疑わない。

さらに何があってもマサムネがすることは悪くないと思っている。  
なお、怒るとマサムネ以上に手をつけられない。

相棒

トガミ（カメール） CV：阿部敦

登場回数が多いが扱いがあまりにもよくない。

特にこれ以上書くこともない。

カミコ（ピカチュウ） CV：佐藤 利奈

かげぶんしんにでんじはの電気を込められるなど  
普通のピカチュウではできないことができるらしい。  
トガミは緊急時でもなければ顔を合わせるたびに電気を浴びせてい  
るようだ。

リュボ（ゴースト） CV：玄田哲章

ミズホの暴走により捕まえられた。  
彼はただ驚かせてその反応を見ただけであつた。  
バトル時以外は勝手に行動する。

かませ犬じゃない！

アサノブ（13） CV：ヤスヒロ 出身：不明

扱いがあまりにも使い捨てであつたが。  
別に弱いわけでもない。

第二四壞 - 1 本当なのか（前書き）

感想は募集してるんですよ？  
してますからね！



## 第二四壊 - 1 本当なのか

「う、うつ……何だっただんだあの光は……」

「目が覚めたかい？」

「え？ だ、誰……」

突然誰かに話しかけられたマサムネ。

それはミズホでもフジでもない。

そして声の方向がした方を向いた。

「お袋？」

「お袋？ 私は娘はいるけど息子はいないわよ」

その女性はマサムネの母親であるヨーコに似ていた。

「あ、人違いのようです……って、ここは？ ミズホちゃんは！？」  
「一緒にいた女の子なら横のペットよ」

隣のベットでミズホがすやすやと眠っている。

「ふむ……で、俺たちはいったい……」

「倒れていたのよ。家の近くでね」

「気絶していた？ というかここはシオントウンで」

「確かにシオントウンよ。記憶は確かのような」

「それで俺たちはフジさんとポケモンタワーに……」

「フジさん？ それにポケモンタワーは現在立ち入り禁止よ」

「え？ そんな……俺は確かにポケモンハウスからフジさんと……」

「フジさんなんてシオンにはいないし、ポケモンハウスなんかないわよ」

「ない？」

マサムネは少し顔をしかめる。

「そう。ないの」

「……まさかここは……」

マサムネはこういう状況になる状況を知っている。  
現実では起こりえないと思っていた出来事だ。

（過去……だということか！）

その手のゲームはやりつくした感があるのでわかる。  
しかしリアルだ。

ゲームじゃないリアル……

（リアル？ 現実？ 仮想？ そうなると俺は……）

「う、うゝん……」

「ミズホちゃん！ 目が覚めたか」

「はにゃ。マサムネひゃん……」

ミズホは寝ぼけている。

（ま、現状はミズホちゃんとの間だけの秘密にしておくべきだな……）

「二人で話がしたいので二人きりにしてもらえませんか？」  
「ん？ いいわよ」

そう言つて女性は部屋を出て行つた。

後半に続く

第二四壞 - 1 本当なのか（後書き）

本当なんて誰も知らない。

第二四壞 - 2 本当って（前書き）

感想は……募集はしてるよ？

## 第二四壊・2 本当って

「過去です?」

「そう過去」

「なるほど、過去ですか」

「予想道理にすんなり受け入れてる感じだね」

「はい。マサムネさんのいうことですから」

「そういうと思っていた」

もはや二人に疑いというものはない。

「しかしどうすれば元の時間に帰れるんでしょう」

「そりゃポケモンタワーの頂上の石碑に行けばいいんだ」

「ですね」

そうとわかればさっそくと出発の準備を始めるミズホ。

「あ、そう言やあポケモンタワーは現在立ち入り禁止なんだっけか」

「ふえ? それじゃあ戻れないのでは!？」

「そうだな……ふむ……」

コンコン

「もついいかしら」

ドアの外から声が聞こえる。

「あ、はい」

ガチャ

「どう。今の状況については整理できたかしら」

「ええまあ」

「まあ」

「ま？」

女性の声とほかに何かの音がする。

「ああ、私の娘よ。ヨーコっていうの」

「ヨーコ？」

マサムネの母親と同じ名前だ。

「ええ、かわいいでしょ」

「ええ……そう言えば旦那さんは何をしているんです？」

マサムネはここまで来て偶然じゃないと思った。  
気になったのだ。

「え？ なんだろうね。初めて会った子に言うことじゃないかもしれないけど、私は旦那はいないの」

「え？」

「いないと言うことはシングルマザーなのですね」

いない。

そう言えば母は父親を知らないと言っていた。

母の母、祖母も病気で死んでいて会ったことがない。  
イッシュには母親が死んでから引っ越したという。

（偶然で収まるのか？）

「この子の父親はね、イツシュ地方に住んでるんだ」

「イツシュ……」

「親の都合で私だけこっちに引っ越したの」

「それって……」

「ふつ。彼とも引っ越してから連絡がつかなくなったし、彼もこの子の事は知らないわ」

普通人に言うことではないだろうことをマサムネに言う女性。

「そう言えばあなた。彼に似ているわ」

「俺が似ている？」

「そう。瓜二つよ」

マサムネの背筋が凍る。

マサムネの父親とマサムネは瓜二つ。

それは昔からよく言われていたことだ。

「あなたの……名前は？」

「私？私の名前は……」

「それで、ポケモンタワーにはいつごろ入れるように？」

「入口の整備が終わってからかな。少しは前に崩れてね」

「それはいつごろに？」

「四日後位かな……そう言えば明日はタmamシにデパートができるらしいわ。パレードをやるらしいから行ってみれば？」

「パレードですか。楽しそうですね」



「ああ、そうだな……行ってみようか」  
「です」

マサムネ達は用意をしてタmamシに向かった。

女性にはお礼の言葉を述べ、シオンタウンを後にした。  
今回の出来事がいや、出会いが何を意味したのか。

そんなもの誰がわかるか！

わかつてはたまるか！

答えなんて誰も知らない。

続く

第二四壞 - 2 本当って(後書き)

$$\begin{array}{c} \overline{15} \\ \overline{15} \\ \overline{15} \\ \vdots \end{array}$$

番外編 そう言えばあの二人ってあの後どうなったん？（前書き）

感想は募集中だ

番外編　そう言えばあの二人ってあの後どうなったん？

「あのさあ……なんでジヨウトに行くわけ？」

「ふふふ。知らない新天地！　知らないポケモン！　それを求めるため！」

「ああ、そういうわけか……」

彼らはコズエとトシカズ。

ハナダジムとニビジムの門下生である。

今は真の強さを求めるために旅に出ている。

いや、出ようとしている。

「サントアンヌ号出発後にジヨウト行き定期船が出るらしいわ」  
「なんか軽い感じでカントーと当分お別れか。せつなくなるなー」  
「修行と言うのはそういうもののさ。さあこのチケットを持っておきなさい」

そう言つてコズエはトシカズにチケットを渡す。

「定期船用乗車チケット……これ安売りじゃないか」

「いいじゃないの。行き分だけよ」

「帰りはどうすんだよ……」

「いいのよ別に！　向こうでチャンピオンにでもなりや！」

「修行に行くだけだろ……」

コズエのやる気にトシカズは答えられない。

タケシという存在がいたからこそあのキャラだが

コズエの前ではこんな少年なのである。

「あら、どうやら定期船がきたみたいね。行くわよ！」  
「へいへい」

そう言つて二人は船に乗り込む。  
二人の旅は始まる……

行先はハウエンである定期船に乗つて。

本編に続く

番外編 そう言えばあの二人ってあの後どうなったん？（後書き）

なんかやってほしい番外編があれば。

ただしガイトとユウミの番外編は駄目ですご了承ください。

第二五壞 ミ、ミスホちゃん？（前書き）

感想は募集中だぞ

## 第二五壞 ミ、ミズホちゃん？

【タمامシシティへの地下通路】

「パレード パレード」

「ははっ。嬉しそうだね」

「まあ、過去っていうわけですから現代のようなものは求めませんけどね」

ミズホはくるくると回りながら出口へと向かう。

「ははっ。ミズホちゃんは元気だなあ」

いつも道理のミズホを見てマサムネはほほ笑む。

「早く行きましょう！」

そう言つてミズホに手をひかれる。

「うおっと。ひっぱらなくても行くつてば」

いつも道理である。

「ははっ。ミズホちゃんは元気だなあ」

いつも道理……



【タmamシシティ】

「へえ。古い街並みだなあ」

「現代に比べればですけどね。今からすれば最新です」

はつきり言って現代のマサラよりは近代的である。

「そう言えばお金と力大丈夫なんですかね」

「安心しろ。この時代も今と変わらないようだから」

そもそも百年単位で変わっていない。

「あつ。あちで何かイベントやってますよ」

「うおつと……」

マサムネは引きずられてイベントが行われ方へ行った。

「つて、ここはタmamシジム？」

「ほえゝタmamシジムでイベントですかゝ」

「その通り！ 草タイプ専門ジム。タmamシジムによっこそ！」

突然男の声が響く。

「この俺がジムのジムリーダートラスケだ。よろしく頼むぜ」

「そして同じくその娘のウリカです」

突如現れたのはジムリーダー親子であった。

「くくく。この俺と勝負して勝てれば豪華景品とパッチをプレゼントだぜ」

「お父様。もう少しジムリーダーとしてちゃんとした言葉づかいを……」

「うつせえ！ 女ばかりの家系で唯一の男の俺が何したっていいだろうが！」

「屁理屈です！」

「じゃかしいわ！ お前らがくどくど言うから俺以外男がいねええんだろ子のジムはあ！」

「だからと言ってお母様が違う娘が何人もいるというのはどうかと思います」

「あ、人前でそんなことを……でもイリもそれについては認めていてだなあ……」

「そもそも妻公認の浮気と言うのがおかしいのです！」

マサムネ達の前では大変なケンカが起こっている。

あらわれて二人に説明をしようとしていただけなのに……

「あの、イベント……」

「おお！ なんか恥ずかしいことを……あ、今の内密にね」  
「な、内密にですよ……」

ジムリーダー親は恥ずかしそうだ。

「公認浮気とか言ってたような気がするのですが……」

「内密にいいい！ これあげるから！」

「これ、ジムパッチですよ」

「いいからもってけ！」

「そして内密に！」

そう言ってジムリーダー親子はジムに走って帰った。

「え？」

「なんですこれ？」

「もらっても現代じゃ使えないんだよなあ……………」

「ならジムに行きましょう」

「え？」

「何言ってるんです。こっちが上なんですから……………ふふっ」  
「おおっ……………」

ミズホの笑顔にマサムネは恐怖を覚えた……………

続く

第二六壞 - 1      ミズホちゃん……（前書き）

感想は募集していますのです。

感想くれるいい人を後四人くらい募集中

別に規定人数超えてもいいのですよ

第二六壊 - 1      ミズホちゃん……

【タママシジム】

「たのもオですよ」

「いらつしゃ……ひいい！」

ミズホの笑い顔を見てウリカは怖くなり逃げた。

「ミ、ミズホちゃん？」

「なアんでエすかあ」

「いや、なんかいつもと違う感じが……」

「いつもどおりですよ」

マサムネも少したじろぐ。

「ふふふ。さあて、ジムリーダーさんはあちらかなあ」

「ミ、ミズホちゃん。お帰りくださいー！」

マサムネも壊れた。

「ウリカが走って逃げてきましたが……誰ですかあなたは」

「そういうあなたは何ですかア」

「私はそう。友人のエリノです」

「なるほど、異母姉妹ですか」

「のお。な、何を言ってるんですかお姉さん……」

「ぶぶぶ。やはり一桁の女の子は隠し事が苦手ですねえ」

どうやらミズホはマサムネや目上の人以外に対してはSのようだ。

「あなたのお父さんが多数の女と子供を作ってるというネタは上がってるんですよ。ぷぷぷ。それでお父さんによろがあるのです」  
「う、うう……それで何が望みなんですか……わ、私たちの幸せを壊さないでください」

エリノは泣き叫んでいる。

「ふふ。かわいい子ですねえ」

「……とりあえずジムリーダーの所行こうか。なんか話が大変な方向に進んでるような……」

「それもそうですね。早く行きましょうか!」

マサムネが話しかけるといつもの様子に戻る。

そして、ジムの奥の部屋へと向かう……

「うわああああああん!」

マサムネは後ろから聞こえる鳴き声がすごく気になっている。  
これは完璧に自分たちは悪者だと。  
というか脅すということは悪だというのはあたりまえである。

「さあて、イベントほっぽり出してジムの奥にいるジムリーダーさん。出てきてくださいですよ」

ジムリーダーの部屋と書かれた扉をノックしながらしゃべるミズホ。

「なあ、ミズホちゃん。所でさ、何をするつもりなの? お金とか

困ってないよね……」

「え、そう言えばそうですね……どうしましょうか？」

「え？」

「いや、なにかその、脅さないといけないかなあと思っちゃいます……」

「ミズホちゃんー！」

マサムネはただ泣きそうな顔で叫ぶしかなかった……

後半へ続く

第二六壞 - 2 なんかいいわ！（前書き）

感想は大人数の人募集中！





そしてたじろぐ女の子。

「くふふ。とりあえずお父さん読んでもらえますかア」

「ゆ、許してくれ！ 私がすべて背負うから！」

「……いや、君。その……ね？」

「わかった！ まだ 歳だけど別にこの……」

「それ以上は言わんでいい！ 言わんでいいのよ！」

マサムネはこんらんしている！

「さつさと父親を呼べと言ってるのですよおー！」

ミズホのトラスケの呼び方が安定しない。

「許してください！ 許してください！」

「びええええええええええええええええ！」

「あわ、あわわ……」

トラスケの娘3人は三者三様の表情をしている。

「何この状況……誰か説明してくれよおー！！」

そんなことを言っても誰も説明してくれない。

「ハアハア。お前ら、娘に何を……」

ジムリーダーの部屋からではなく、階段からどたと降りてきたトラスケ。

「いや、本当になにも……」

「やめてえ！ 親父には何もしないでえ」  
「ち、ちちうえおいじめえにやいでえ」！  
「お、お父様！ 私たちでどうにかしま……」  
「もういいかげんにしろやああああああー！」

マサムネの叫びですべてが止まった。

「ああ、なんだ。そういうことだったのか」  
「ご、誤解しちまったじゃねえかよ」  
「そ、そうだったのですか」  
「わ、わたくしが怖がったせいで……」

やっとの事で誤解が収まった。

「まったく。勝手に誤解してくれちゃって困ったものです」  
「君が言っなっ」

バシッ！

マサムネはミズホの頭を叩く。

「ありがとうございます！」

ミズホは凄いことを叫んだ。

「……」

バシッ！

「ありがとございまああああす！」

マサムネは気持ちよさそうだ。

「あ、あのお……」

「はっ！ と、言うわけでこれお返しします。じゃ、これでえ！」

マサムネは部屋から走って去って行った。

「……あの二人が父上の事をしゃべらないとは限らない。追跡します！」

「あたしもそうする！」

そう言ってエリノと三人目の娘エカミはマサムネ達の後を追った。

「へえへえ……とりあえずシオンに戻ろう」

「ええー！ パレードに何も参加してないですよ」

「いいから帰るの！」

ちなみにシオンからタمامシまでは往復で三日かかる。  
なので帰ればポケモンタワーに入れるはずだ。

「と言うわけで。帰る！」

そう言ってミズホを背中に乗せてシオンタウンへ向かった。

「幸せです」

続く

裏第二六壊      これから起こりうる何か（前書き）

活動報告にも書いたがショッキングな事が多すぎる……

すべてはあの日から始まった……

スパロボのPV公開も中止になるし……

俺は何を楽しみにしながら小説を書けばいいのだあああー！

## 裏第二六壊      これから起こりうる何か

「あら、久しぶりね」

「ええ、お久しぶりです……」

マサムネ達は再びあの女性に出会った。

「4・5日ぶりかしらね。どうだったパレード。楽しかった？」

「え、ええ。楽しかったでふ」

「でふ？ 何かあった？」

「い、いえいえいえいえ！ 何も何も何も！」

そんな反応すれば誰にでも何かあったということがもろばれである。

「ところでですね、ポケモンタワーには入れるようになったんです？」

「ええ、工事が終わって入れるようにはなってるわよ」

「そうですか？ ではマサムネさん。早速いくですー！」

そう言つてマサムネの手をつかみポケモンタワーへとミズホは走つて行つた。

「なんでお墓に急いでるのかしら……」

「おつ。どうしたどうした？」

「あら兄さん」

「なんかあったみてえだが……どうした？」

「ええ、男の子と女の子が急ぐようにポケモンタワーに」

「ほお……」

女性の兄はニヤリと笑う。

「よし。おい」

「ん？ 俺を呼んだか？ 父さん」

女性の兄は息子を呼んだ。

「ああ、すぐに旅支度をしろ。まあここにおおよそは用意してあるがな」

「はあ？ いきなりなんだ父さん」

息子は疑問そうな顔をして父親に問う。

「螺旋の導きつてやつだよ」

「螺旋の……父さん。それって……」

息子は何かを理解した。

「へへっ。楽しくなつてきやがったぜ……まだ予測だがよ……」

「な、なにになに？ どういうことなの？」

女性のその言葉に兄はニヤリと笑う。

「へっ。俺たちは当分家をあけるぜ。親父とお袋の事はたのんだ」

「え？ ど、どういうこと？」

「なに、親父たちに螺旋の導きが来たって伝える。それで伝わる」

そう言う兄は急いで準備に取り掛かった。



「ポケモンタワーに急ぐ理由。それは最上階の石碑……へっ。死んだあいつにも見せたかったぜ」

その言葉は女性には聞こえていなかった。

### 【一方その頃】

「勢い余ってシオンタウンまで追いかけてしまいました」

「なんか食料が尽きそうなんだけどなあ。もうそろそろやめない？」

タマムシから追いかけてきたトラスケの娘のエリノとエカミ。

「しかし、ここまで町がなかったから言いふらすこともなかったですが、ここは町なのですよ？」

「でもよぉ……おや？　なんか誰かと会話してるぞ？」

「なんですとっ！」

「って。突然走ってどこかに行ったぞ」

「追いかけましょう！」

そう言って二人はポケモンタワーに向かった。

続く

裏第二六壊      これから起こりうる何か（後書き）

所でみんな、ジヨウトとホウエンのどっちが好きですか？  
いいか、二択ですよ？

お気に入りに登録している人たちは答えてくださいよ……  
何のための登録だああああ！

第二七壞 じゃ、せかされてるし。さしちやおうか！（前書き）

感想はまってますよ。

にしてもいろいろな情報があつて  
喜んだり悲しんだり辛いですね……

第二七壊 じゃ、せかされてるし。さしちゃおうか！

「さ、最上階か……」

「そうですね。ちゃんと石碑もありますねえ」

ここはポケモンタワー最上階。

「ちゃんと穴もある……でもこれって……」

「どうしましたか？ 今誰もいないうちにちゃっちゃとやってしま  
いましょう」

「まあ、早くやらないにこしたことはないけど……」

そんな時何か音が聞こえた。

マサムネ達はきよきよと周りを向くが何もなし。

「早くやりましょうよ！ 誰か来ちゃいますよ」

「わかった。早くやろう」

ミズホが少し焦ったように急かすので

マサムネは石碑にキーホルダーをすぐにさしこもうとした。

「じゃ、さすよ……」

「はい。いよいよですね。ワクワクです」

そしてマサムネは鍵をさしこむ。

【エリノ・エカミ組】

「隠れる場所少なすぎです……最上階の人がめったに來ないところで何をしているのでしょうか」

「覗くとばれるから隠れとけよ」

階段の壁の部分に隠れ、マサムネ達の会話を二人は盗み聞きしていた。

「さて、何を話しているのでしょうか……」

「なになに？ ……誰もいないうちに……なにに！？」

「ば、ばれるかもだから落ち着いて。なにを言ってたんです？」

エカミは何も答えない。顔が赤いままだ。

「次は私が……さ、さしっ！？」

エリノも顔が赤くなる。

「早すぎますよ！ なんですか、以上に出会あれを使って誘惑ですか！」

かなりの誤解が生じている。

無論そうなるように書いたのだ当たり前だろう。ね？

「これは突撃です！ ばれるとかばれないじゃなく。道徳的に！ 行きましょう」

「お、お、おう」

【男性親子組】

「なんだあ、あのガキ二人組は。10歳にもなってねえんじゃねえか？」

「父さんよお……このままじゃ導きの時に突撃するってのは……」

エリノ達より少し下に隠れている二人。

「そうだなあ。導きのためにやるしかねえ。あいつらを気絶させてでも……」

すると少し上から叫び声が聞こえる。

「あれ？　なんか叫んでるぞ」

「なんかあつたのかもな」

「あれ？　また叫んだぜ？」

「やはり何かあつたんだろう」

すると前の二人組は突撃を開始した。

「親父！」

「もしかしたらいいよいかもしれねえ！　行くぜ！」

そう言って二人も突撃する。

カチッ

「光る！　光るぞ！」

「きましたね！」

石碑から光があふれる。

そして二人は光に包まれ……

「にゃ、にゃんにゃんですかこれえええええ！」

「よくわかんないけど光だ！」

突撃したことにより巻き込まれる二人。

「父さん。これが！」

「そう。螺旋の導きだあ！」

そして意図して巻き込まれる二人。

そして光は消える。

そこには誰も残っていない。

それは前回と違う結果……

すべては運命の通りに……

続く

第二七壞 じゃ、せかされてるし。さしちやおうか！（後書き）

ジョウトかホウエン。

どちらがいいか選んでください。

間違っても

ホウエン・イッシュ・オーレ・フィオレ・アルミア・オブリビアなど

ジョウト・ホウエン以外の地方がいいというのは

作者さん困っちゃうのでおやめください。



## 第二八壞 どうしてこうなったんだ！？（前書き）

前回の地方アンケートは随時募集中。

お気に入り登録している人はどちらがいいかくらいは感想に書いてくれると嬉しいです。

## 第二八壊 どうしてこうなったんだ！？

「う、あいてて……ここは……石碑の前……帰ってこれたのか？」

「ほえええ〜」

「だ、大丈夫かミスホちゃん」

「ほへへえ〜だいひょうぶでふ〜」

「よし。いつも通りだ！」

マサムネは安心した。

「さあ、早くタワーから降りて……おや？タワーの外から街がすぐに見える？」

「ほえ？ それってどういうことなのですか？」

「……過去の次は未来とか」

「え〜なですかそれ〜。帰ろうとしたら未来とか。じゃあきつとあれですね、少年が激レアなカードダスを隠してたりするんですよ」

「そんな、これは騎士物語の外伝の2じゃないからね……」

作者は一週間で攻略した。

「じゃじゃあ……あれですよ！ えええと……」

「何か思いつこうとして思いつかなかったんだね？ よくあるよねえ〜そういうことって」

「はううう〜」

「はてさて。ここは本当に未来なのか……一度外に出てみよう」

そう言って二人は外に出てみることにした。

「あ、あれ？ ポケモンタワーがあつた場所になんか派手なものが！」

「て言うかこの二階建ての建物がお墓なんですか？ 規模縮小すぎます！」

「何があつてこうなつたのか……」

「おやおや？ 君たちはシオントウンと言つかカントー地方に来るのは初めてかな？」

マサムネ達が話していると突然誰かが話しかけてきた。

「うゝん。もうあれは昔話になるから知らない子もいるかなあゝ」

そうして男は数年前に起こつた事件の事を話した。

「そんな事件があつたのか……」

「そう言うわけだよゝじゃ、用事があるのでこれで……」

そして話を教えてくれた人はそそくさと帰つた。  
思つたら戻ってきた。

「忘れてたよゝこれをあげるねゝ」

「え、あ、どうも」

「じゃあねゝ」

そう言つてそそくさと歸つて行つた。

「所で何なんですかそれ」

「ん？ なんだろうな……それよりももう一度石碑で俺たちの時代に歸らないと」

「ええ、じゃあもう一度！」

そう言つて二人は石碑に向かった。

「これでよかつたんですかねえ」

「いいんじゃないかな。これで歴史はちゃんと動くと思う」

「しかし。まあゝあなたの言うとおりにするだけです」

「ふふ。これでちゃんとした未来に進むさ……ふふ……」

「と言うわけで今度こそ！」

「さつさとさしましう！」

そして石碑にキーホルダーをさしこみ、回した。

そして再び光が二人を包みこんだ。

「行つたようだな」

「そのようたね」

「ふふ」

「笑つてますねゝ旦那様」

「気にするな」

この二人の正体は今謎である。

続  
く

第二八壞 どうしてこうなったんだ！？（後書き）

通常の感想も募集中。

第二九壞 日本文化ですよね！（前書き）

感想はまっていますよ。  
待ってるんですよ？

## 第二九壊 日本文化ですよね！

「……………」

「大丈夫か！」

「はっ！？」

マサムネは起き上がる。

目の前にいるのはフジ老人だ。

「突然消えたかと思うたらタワーの入り口付近で倒れておったが。何があつたのじゃ？」

「何があつたか？ 俺にもわかりませんよ」

ホントの事を言うのは得策ではない。

と言うわけでタイムトラベルについては秘密にすることにした。

「そうかの……そう言えばミズホちゃんはそこに寝てるので。ついておいてあげるといい」

そう言つてフジ老人は部屋を後にした。

「今度こそ現代か……あれ？ 未来での出来事がよく思い出せない……………」

何かをもらったことは覚えている。

「そう言えば俺は何を……ん？ 箱？」

箱だ。



「あかない？」

開かない。

「なんなんだろうか。これは……」

わからない。

「う、ううん……」

その時、ミズホの目が覚めた！

「ミズホちゃん！」

「ふにゃ……あ、まひゃむねひゃん……おへよおごぞいみやす」  
「寝ぼけているなこれは……」

普通に会話できていない。

「ひゃいひょうぶでひゅよ」

「少し、目がさめるまで会話は控えようか」

そう言うわけで会話は一時中断した。

「つまり私は寝込みに襲われそうになったんですね！」  
「なぜそうなる」

ミズホのおかしな解釈にマサムネは突っ込んでいる。

「とりあえず前と同じでタイムスリップに関しては秘密。後この箱についてだけ……」

「あかないんですか？」

「ああ、あの女性にもらった箱。しかしあの女性はなんか特徴のある人だったな」

「そうですね。言葉の語尾を伸ばすタイプで聞き取りやすいですが聞き取りにくい感じてしたね」

「ああ、以前あったユウミちゃんともタイプは違う……いったい何者なんだ？」

現在は確実に不明である。

「もしかしたら、この先に会うことになるかもだな……」

「未来からすれば過去。今からすれば未来にですか」

「そう。未来に」

そうして今回のタイムトラベルについての話は終わった。

今回のタイムトラベルでいろいろな事実も得た。

衝撃しかなかったが。

「まあ、いい。とりあえず今は夜のようだ。明日にでもタマムシに行こうか」

「タマムシですか。昔と今を見比べられたりして楽しそうですね」

「実にその通りだ」

そう言ってフジ老人に今夜は寝ると伝え。

明日に備えることにした。

【次の日の朝】

「スクランブルエッグにソーセージにサラダにスープ……いかにも洋風ですね」

「うむ。昨日はいろいろ言われたからのぉ」

「そしてパンじゃなくてご飯ですか」

「こ、今回はあわんとは言わさんぞ!」

フジ老人叫ぶ!

「まあ、それもそうですね。別にいいと思いますよ」

「おや? そうかの」

「米で食うは文化ですよ」

日本文化バンザイ!

カレーライスバンザイ!

と、とある副部長が言っていましたよ。

「マサムネさんも早く食べるといいですよ」

「おやおや、ミズホちゃん。そんなにがつついて食べちゃって……」

やれやれとした顔でマサムネも朝食をとることにした。

続く

## 第二九壞 日本文化ですよね！（後書き）

第一部はいまだ中盤である。

果たして何話で第一部は終わるのであるうか！

そして知らぬ間に11歳になってさらに枷の外れた  
ミズホちゃんはどう暴走するのか！ こうご期待！

やっぱ昔の方がいいかな……

第三十壞 都會育ちつてのはだな……（前書き）

感想はまっではいる。

これは感想が来るのを待ってる。と  
感想を読むのにはまっではいる。  
と言つことである。

### 第三十壊 都会育ちってのはだな……

「旅は道連れ」

「世は情け」

「ふう……さて。もうすぐタمامシだね」

「ですね」

現在はシオンからタمامシへとつながる地下通路。  
過去の世界とは違い、何と動く歩道となっており  
往復に四日もかからないようになってる。

「そもそも過去のタمامシは町の風景とジムしか思い出がないので  
すが」

「逃げるように帰ってきたからなあ……今のジムってどうなってる  
んだか」

「えっとですね……パンフレットによると今のジムリーダーは就任  
したてのエリカと言う人らしいですよ」

「ふうん。あれが何年前かはよく分からないけど、娘さんたちはも  
う引退した後って感じが」

「あの一桁少女たちがどのように成長したか見ものですよ」

ミズホはニヤリと笑っている。

「そうね。できれば遭いたくないかな」

「それもそうですかね。ふふふ……」

「もう昔には戻れないんだね。ミズホちゃん」

マサラで久しぶりに会ったころのミズホを思い出し涙を浮かべるマ  
サムネであった。

【タマムシシティ】

「やっぱり凄い都会ですねえ」

「まあ、俺が住んでたイツシュに比べればまだまださ」

「おお、都会の男は言うことが違いますねえー！」

「あんまり大声で言うことではない。して、ポケモンセンターは…  
あそこか」

ポケモンセンターを見つけるとマサムネはそちらへ向かい歩く。  
ミズホもそのあとを追っていく。

「……」

そしてその光景をただじつと見つめる誰かがいた。

「見慣れた顔は……いないなあ」

「もう先に行つてたりするんじゃないですかね」

見慣れた顔は一人もいやしない。

別にいなくても不思議はないのだが。

「ガイトとかもいねんだなあ」

「カナデちゃんとかもいませんよねえ」

「なんか悲しい感じだ」

「モグリユ」

「カメカメ」

さらっとシモンとトガミが登場。  
考えればお久しぶりである。

「ま、それはさておきと。今日は泊って明日にはジム戦だな」  
「ですねえ」

「モグモグ……モグ？」

「どした？ シモン」  
「モグ」

シモンは紙をさしだした。

「ん？ 誰かに見られた気がしたと？」

マサムネは周りを見渡す。

だがマサムネを見つめているものはいない。

「そんなやついないぞ？」

「モグリユ……」

「気のせいだったんじゃないか？」

「グリユ……」

シモンは考え込んだ様子になり何も言わなくなった。

「……とにかく今日はもう寝よう」

「そうしましょう」

そして二人は宿泊の手続きをとった……  
その後はいつも通りである。



続く

第三十壞 都會育ちつてのはだな……（後書き）

諸事情により4月中盤から忙しくなるので

中盤から後半までペースアップしていききたいと思います。

スバッと行くよスバッと。

世界で一番くらいに。

このネタわからない人多そうだよ〜

裏第三十壞 しじむるしじむるしじむるうううう！（前書き）

見知った人たちの現状回

裏第三十壊 いじわるいじわるいじわるうううう！

「せ、拙者は疲れたでござるよ……」

「贅沢言つなと言っているだろう？ 僕の言うことは絶対だ」

カナデとカナブ。

現在はクチバシティである。

「まったく。ポケモンセンターはすぐそこだからね」

「せ、拙者。ここまで辛い罰を受けるほど悪いことは……」

「言つたよね？ 君に権限はないよ」

「いじわる……」

もはやカナブは何も言うことはなかった。

【ポケモンセンター】

「とにかく。明日にはジム挑戦だよ」

「いじわる〜」

カナブはもう何も聞こえていない。  
倒れている。

「まったく……ん？」

カナデは壁に貼られているポスターを見た。

「当分ジムは休業？ ジムリーダーが行方不明……臨時のジムリーダーのマチスが来るまでは休止か」

カナデは少しがつくりする。

「当分はここで足止めか……どこかに遊びに行ったりするかな」

そしてカナブと二人で遊んでいるところを想像する。

「……そ、そうだな。僕にも休暇を与えないとな。僕っていい奴だな」

そう自分に言いつけた。

カナデが正直になる日は遠い。

「いじわる〜」

カナブはどう思っているかは謎のまま……

続く

### 第三一壊 えっ！？（前書き）

本日の出来事である

なんとなくサンデーのポケモン漫画が気になるので見てみる。

バースト……融合！？

なんてこった……俺の考えた名前とかどうしよう……

てかこの先の展開どうしよう……

ここまで言えばわかつちやうでしょう？

自分がこの先何をしようとしていたかは……

俺は泣くぜ……

### 第三一壊 えっ!?

「朝です!」

「そうだね」

何事もなくいつも通りだ。

何、もはや言うことはない。

「と言うわけで。行こうか」

「はい。行きましょう」

二人の仲はAから進んではないない。

#### 【ジム出入り口前】

「おや? なんか爺さんがジムの中を覗いているぞ」

「女の子ばかりのジムですからねえ」。覗きなんて最低ですね」

しかし覗いているじいさんには見覚えがあつた。

「ん? 気のせいかな……もしもし」

「んあ、なんじゃあ。このポイントはいい位置なのじゃからどこか  
ぞ」

「なあ、爺さん。あんたもしかして……」

「何を言われてもわしはどかんぞ! 覗きがわしの生きがいなのじ  
や!」

「いや、まてよ。俺の思い道理ならあんたは!」

パタン

そんな時ジムの扉が開いた。

「お爺様！ またそんなところでジムを覗きになるなんて！ 部屋で寝ててください！」

「何をするのじゃ！ わしはわしは除くのが生きがいなのじゃあああゝ！」

ジムから出てきた女性によりおじいさんはジムの中へと引きづられて行った。

「あれ？ 今の女性はジムリーダーのエリカさんですよ」

「つまり今覗いてたのはトラスケさんってこったな……」

「あのですか？ なら別に覗かなくても中から……」

「覗いてばれるかばれないかがいいというのもあるかもだが……」

何か普通ではない感じがした。

### 【タマムシジム中】

「挑戦者さんですか……先程は失礼しました」

「さっきのって先々代のジムリーダーですよ？ 何があったんです？」

「祖父がジムリーダーであつたことをご存知ですか……」

するとエリカは少し悲しそうな顔をして理由を話し始めた。



「祖父は過去に娘……私の叔母に当たる方が行方不明になってからあんなられたそうです」

「行方不明？」

「ええ、何やらよく知らないのですが。とある二人組を追いかけて行ってから帰ってこなかったそうなのです」

マサムネとミズホは顔を合わせる。  
その二人組とは……

「そして今のように何があってもジムを覗くようになってしまい……もう元には戻らないかもしれません。母様も看病とジムリーダー業で病気になる寝込んでいます……」

「……」

「お爺様も覗きなんてしていただける体ではないのですが……ああ、すいません。こんな話をしてしまった……」

「あ、いや……」

マサムネは少し言葉に詰まる。  
ミズホは喋ることすらできない。

「これではバトルなどではしらないですね……こちらを受け取りください」

「バ、パッチ！？ で、でも……」

「いいんですよ……私も就任したてですし……こんな話を聞かせてしまったのですから……」

「あ、あ……う、受け取らせてもらいます……」

「マ、マサムネさん……い、いいんですかね？」

「え、あ……」

二人分のパッチをマサムネは受け取った。

「し、失礼しました！」

そう言つてジムを後にした。

また逃げ出すことになった。

前回とは違う逃げ方だった……

「……お爺様。私は弱いのですか」

マサムネ達が去つた後のジム。

そこには涙を流すエリカ。

ガチャ

「おや、戻つてこられ……あら。」

入ってきたのはマサムネではない。

男一人と女の子二人の集団だ。

「挑戦者さんですか？ あいにく今は……」

「いや、ここにトラスケさんっているかな」

続く

第三一壊 えっ！？（後書き）

まだ泣いてる自分です。

感想は募集中ですよ。

さて、スパロボでも見て寝ますかね。

第三一壞・補足 トガミはトガミです（前書き）

ジムからマサムネ達が去った後何があったのかと言うお話。

### 第三一壊・補足 トガミはトガミです

【ポケモンセンター個室】

「……なにかやりきれない感じた」

「あの子たちが行方不明ですか……」

マサムネ達の雰囲気は何か暗い。

「でも、俺たちのせいってのが確定もしてないし」

「で、ですよね。私たちが誘拐などをしたわけでもないですからね」

ミズホはそう言うが場の雰囲気は良くない。

「モグリユ！」

「カメエエエエエル！」

そこで突然叫ぶシモンとトガミ。

「モグモグモグリユ！」

「カメカメカメエエ！」

シモンが差し出す紙には

『兄貴！ 何暗くなつてやがるんだ！ そんなの兄貴じゃねえ！』

「シモン……ついでにトガミも……」

「カ、カメメ？」

トガミの扱いはいつも通りである。

「ありがとうよ。なんか元気出るわ」

「そうです。さすがはシモンです！」

「カ、カメ、カメメメ！？」

「あ、トガミもどうもです」

「カメエー」

なにはともあれ、シモンとトガミにより二人はいつもの元気を取り戻したのであった。

続く

第三一壞・補足 トガミはトガミです（後書き）

バースト、バースト……ふふふ……

**第三壊 - 1 一意専心！（前書き）**

感想はまってる……



### 第三二壞 - 1 一意専心！

「次はどこに行くんですか？」

「セキチクかな……サイクリングロードを通るしか道がないように見えるが……」

「が？」

「ここに裏道がある」

そう言つてマサムネは地図を取り出し指さす。

「裏道ですか？」

「そう。あまり知る人のいないルートだ」

「そんなものを知っているマサムネさんさすがです！」

「ふふふ。調べていたのさ」

タمامシの下、サイクリングロード横の森のけもの道

ここはめったに人が寄り付かないらしいが

サイクリングロードを越えるより早くセキチクシティにつけるらしい。

「めったに人が寄り付かないって言う所が気になりますが」

「気にしないでいいよ。うん」

「はい！ 気にしません！」

「よし！」

問題は解決した。

「と言うわけで準備ができたなら早速向かおう」

「はい」

【タマムシ近くの森：けもの道】

「人っ子ひとりいないな……」

「ええ、と言っかけもの道なんですからポケモンがいてもいいと思うのですが……」

「ポケモンかあ……ん？」

目の前にぶんぶんと飛んでいるポケモンがいる。

「ヘラクロス？ カントーでは珍しい」

「ここはあまり人が来ないそうですからねえ」

「ゴスゴス」

「おや、リュポ。お前なんで勝手に出てきてやがるです？」

「ゴスゴースト」

「なんかむかつくです……」

「しかしあのヘラクロスはほしいなあ。よし。シャドウ。瀕死状態にしてきちゃえ」

「ギャラアアアアア！」

ボールから出てきたシャドウは近くの木を倒す。

「へ、ヘラクロツ！？」

「ギャラアアアアア！」

シャドウのかえんほうしゃ  
こうかはばつぐんだ！

「へ、ヘラクロッ！」

「ほお。シャドウが木にうつらないように集束してはなったかえん  
ほうしやを食らっても倒れないとは……ナイス根性だ」

「へ、ヘラっ！」

ヘラクロスのとっしん。

シャドウにクリティカルヒット！

きゆうしよにあたった。

「ギャラアアアアア！」

「へ、ヘラっ……クロッ」

「体力付きかけだったのにとっしん。そしてまだ倒れない……いい  
なあ……」

そう言つてマサムネが手にしたのはスピードボール。

「ヘラクロス……ゲットさせてもらうぜっ！」

「そう言つてマサムネはボールを投げる」

ガシュイン

ヘラクロスはボールの中に納まる。  
そして。

ポシュウン

「ヘラクロス。ゲットだな」

「流石ですマサムネさん！」

「ゴスゴースゴスト」

「てめえ。いつまでそこに……あれ？　なんで手にモンスターボー

ルる持つてるです?」

「ゴスゴース」

「これ中にポケモンはいつてるですね。ヘラクロスじゃなさそうですが……」

開けてみる。

すると中に入っていたのは。

「こ、これは!」

後半へ続く

### 第三二壞・1 一意専心！（後書き）

モンスターボールは初めにボールのボタンを押したものを持ち主と認め

他の誰がそのボールで捕まえようとも

初めてボールのボタンを触ったもののポケモンとなる。

これがこの小説のモンスターボールだ！

第三壊・2

ラッキークッキー……いや、そりゃねえわ……（前書き）

感想大募集。

第三二壊 - 2      ラッキークッキー……いや、そりゃねえわ……

【少し前】

「ラキラキ」

「ゴスゴス」

勝手にボールから出てきたリュポは森の中にいたラッキーとであった。

「ゴスゴスト」

「ラキラキ」

そんな時偶然にミスホが持ち主となっているボールを手にしていたリュポ

「ゴス」

軽い気持ちで投げてそして

カシユウン

「ゴスゴースト！」

と言うわけであった。

「全くどういうわけなんですか！」

「俺にそんなこと言われても……」

なぜラッキーを捕まえられているのか分からない。  
そして掴まれて揺らされるマサムネ。

「こりゃリュポが捕まえてきたってことなんじゃないかな」

スピードボールを拾いながらミズホにそう言うマサムネ。

「そう言うことにしかりませんね……少しは見直してやるとするですよ」

ちなみにミズホにツンデレの要素は一切ない。

誤解なきように。

後ヤンデレの要素もないよ。

「まあ、ラッキーと言っわけで」

「ラッキーですね」

「ゴスゴス」

「ギャラアアアアアア！」

シュールな光景だ。

【セキチクシティ近く】

「どうやらセキチク近くに出れたようだ」

「なんかボロボロです。シャワーでも浴びたいです。マサムネさんと一緒に」



「……ま、もはや何も言うことはないさ」

服に葉がつき汚れか付いている。

「早いとこセキチクのポケモンセンターへ……」

「ちよい待ち」

「あ、ポケモントレーナー？」

目と目があったらポケモンバトルの合図だぜ！

続く

第三壊・2      ラッキークッキー……いや、そりゃねえわ……（後書き）

戦いたくない時だってあると言っのに……

### 第三壊 ……何？（前書き）

感想は募集中。

### 第三三壞 ……何？

「ほれ、バトルバトル」

「ああ……わかったよ。行って来いシモン！」

「モグウ！」

さっそうと登場するシモン。

「ふふふ。どうやら頼りになる相棒のようだが。俺の相棒に勝てるかな？」

「モグウ！」

「今の言葉にシモンが意気揚々となってるぜ」

「おお。いいバトルになるかもしれねえな。よし、行けっナビフ！」  
「ラーバ！」

出てきたのはビブラーバだ。

「ビブラーバか……なかなかの強敵ってやつだな」

「ふふん。さあ勝負だ！」

「ナビフ。いつもの通りだ！」

「ビビ！」

ビブラーバことナビフはシモンの周りを高速で動く。

「モグリュ！？」

シモンはその高速な動きについていけない。

「シモンが反応できていない！？ シモンは高速に動くものもすぐに見分けて攻撃できるはず……」

「ナビフのパターンのない高速な動きには追いつけねえだろ」

ナビフは自分の意思で高速移動している。  
そこに一定のパターンはない。

「モグモグウ！」

シモンはこうそくスピンで攻撃するが一定のパターンで動いているわけではないので  
狙った所に攻撃しても当たらない。

「ナビフ。りゅうのいぶき！」

「ビラーバ！」

ナビフのりゅうのいぶき。

「モグア！」

「シモン！」

きゅうしょにあたった。

「モ、モモグ……」

シモンはマヒしている。

「ふふ。よし。ナビフ。パターン2！」

「ビビビ」

ナビフの高速の移動は終わる。

「ビブーラ！」

「モ、モグリユア！？」

シモンの足元が砂の流砂となる。

「すなじごく！」

「悪いね。速攻で終わらせてもらつよ」

「ビビビビラアアアバ！」

天候が良くなっていく……

「にほんばれっ！？」

ナビフの口元に光が集まる。

「まさか。草タイプ高威力技……」

「そう。ソーラービームだ！」

そして発射されるソーラービーム。

「シモオオオオオオオオオ！」

プチッ

その攻撃はシモンに直撃した。

「マ、マサムネさん！ シ、シモンが」

「……」

「おやおや。ショックで黙っちゃったか」

「ビビ」

流砂の中にシモンの姿は消えていた。

「さて、俺の勝ちだな。さつさとモグリューを助けて……」

「負けてねえ……」

「何？」

「俺とシモンのコンビがこんなところで……負けるわけないだろうがああああ！」

「マサムネさ……キーホルダーが光ってる？」

そう。マサムネのキーホルダーが光っている。

「俺が信じるシモンが負けるはずねえ……そしてシモンも俺がシモンを信じていることを信じている……」

「な、なにを戯言を……」

ズシャ

「あん？」

砂の中からシモンの手が現れる。

「どうやらそこまで言っつほどの底力はあるようだ……ナビフ！」

「ビビビ」

再びナビフの口元が光……

「ピッ!？」

「何？」

ナビフは地面に落ちている。

「…………モグリユ」

「え？ 何があつて…………え？」

そして戦いは終わった。

「何があつたのか全く分からなかったが…………負けたよ…………」

「そうか。そうだな」

「まあいい。今度は負けない。俺の名前はアサノブ。覚えておいてくれよ。じゃあな」

そう言つてアサノブはサイクリングロードへと向かった。

「あの、マサムネさん。なにが…………」

「…………ヤマブキか…………」

「マサムネさん？」

「ん、ああ、何？」

「いえ、今のは…………」

「ん、ああ、気にしなくていいよ」

「え、あ…………あ…………はい…………」

ミズホは納得していない。

ミズホが納得しないとはよほどの事である。



「とにかくセキチクシティに行こう」

そう行つてマサムネはセキチクシティに向かう。

その後ろにはとぼとぼと付いていくシモンの姿もあった。

「いったい何なんでしょうか……」

続く

### 第三壊 ……何？（後書き）

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm13906582>

こちらよければ聞いてください。

しかし、アサノブのポケモンとビブラーバの名前を  
考えるのに2時間もかかってしまった……

**裏第三三壞 親父（前書き）**

感想は大募集中。

後、ヘラクロスとラッキーの名前も募集。

### 裏第三三壊 親父

【セキチクシティ：ポケモンセンター 宿泊個室14】

「と言うわけで。今日はもう寝て明日はジム戦だよ」

「はい。今回もダブルバトルのようです。頑張りましょう」

いつも通りの光景がそこには広がっていた……

「じゃあ寝よう。おやすみ」

「あ、はい」

だが少しだけ違った。

そう感じたミズホであった。

「……」

隣のベットでミズホが寝ている。

マサムネは考えていた。

（あの時何があったんだ？ いや、何があってああなったのか……）

あの時は何かが起こってああなった。

何があったのかは分からない。

（キーホルダーが光って……その時に……）

それが何なのかは分からない。

（だが胸の奥からこみ上げてきたあの力。シモンと一つになったような……）

そしてその時にキーホルダーが光っていた。

（親父なら何か知っているかもな……）

そもそもいろいろなものを送ってきたのは父親だ。

（セキチク・グレンに行った後ぐらいにヤマブキのゲートの工事は終わる）

マサムネはヤマブキに行くことを決めた。  
力の真相を知るために。

（所で工事の間ヤマブキの人はどうやって……）

それはきつと永遠の謎である……

続く

第三四壞 - 1 親子愛……そしてこうなるのか……

【ポケモンセンター】

「と言うわけで。さっそくセキチクジムに行こう」  
「イエッサーです」

マサムネは寝る前の決心によりいつも通りに戻っていた。  
それを感じたのかミズホもいつも通りに戻っていた。

「と言うわけでレッツゴーです！」  
「いつも通り引きずられるのね〜！」

いつも通りである。

【セキチクジム】

「フアフアフア。挑戦者か」  
「こんな奴ら簡単に倒しちゃいましょう父上」  
「アンスよお前もまだ未熟。そんなことを言える立場ではないぞ」  
「申し訳ありません父上」

目の前で繰り広げられる親子劇。  
もはや何ともいわれぬ何か。

「……………」  
「ミズホちゃん……………」

それを見て顔を少ししかめるミスホ。

親子愛と言うものを見ていると少しイライラするようだ。

「ミスホちゃん。大丈夫か」

「大丈夫ですよ……マサムネさんがいてくれますから……ええ」

どうもイライラが抑え切れていない様子。

「やつちゃえばスッキリすると思うよ。ミスホちゃん」

「やつちゃえばいいんですよマサムネさん。フッフ」

マサムネは人前では抱きしめるといふ行為が恥ずかしいのでできないため

倒すという選択肢を選んだ。

どの道倒すわけだが。

「フアフア。すまぬな、ダブルバトルといこう。娘には私のポケモンを使わせる」

「残念ですがあなた方に勝ち目はありませんよ」

「はたしてそうかな……」

「私たちにはありません」

そして戦いが始まる。

後編に続く

第三四壞・2 そりゃそつなるよゝ（前書き）

感想募集中。



### 第三四壞・2 そりゃそうなるよ

「行けっ！ ベトベトン」

「行ってくるのだ！ マタドガス」

キョウ親子はお得意のどくポケモンを繰り出してきた。

「やってこい。シモン」

「やってくるですよ。トガミ！」

そしてマサムネ達はベストコンビを繰り出した。

「カメー！」

「グリュー！」

「では、試合開始！」

審判の宣言とともに試合は開始した！

「シモン！ つるぎのまい！」

「モグウ」

シモンはつるぎのまいを舞う。

「隙あり！ ベトベトンのしかかり！」

「させないです！ ロケットずつき！」

「カメエエエル！」

シモンにのしかかろうとしたベトベトンがトガミがロケットずつきで押しのける。

「ベトオ！」

シモンへののしかかりは止められたがやわらかい体ゆえダメージは少ない。

「マ タドガス」

「カメカ！」

マタドガスのたいあたりをトガミはよける。

「モグリユ！」

マタドガスに向かいシモンは走る。

「ベート」

近くにいたベトベトンはシモンに再びのしかかろうとする。

「モグっ！」

シモンは軽く投げる。  
そして

「モグっ！」

「カメっ！」

シモンはトガミを担ぐ。

そして……

「モオオオオグリユ！」

力いっぱいトガミを上 to 投げる。

「一体何を……」

「今だシモン！　じしんだ！」

「モオオオオグリユ！」

空高くにいるトガミとふゆうのマタドガスには当たらない。  
だが

「ベトオオオオオオオ！」

ベトベトンにはこうかはばつぐんだ。

「ベトベトン戦闘不能！」

「ち、父上のベトベトンがあー！」

そしてフィールドの地形が荒れ地に代わる。

「カアアアアメ！」

落下してきたトガミがマタドガスにずつき！

「ドガッ」

紙一重の所でよけられる。

斜めに落ちていきマタドガスからは離れる。

「モグ……！」

つめとぎをしなからトガミがいる方向へ走るシモン。

「マタドガア」

トガミは当分は起き上がれないだろうと思い  
シモンめがけて襲いかかるマタドガス。

「モグ」

シモンは突然止まる。  
そして逆転する。

「ドガっ？」

怪しいと思いマタドガスは少し離れる。

「モグモグモグー！」

マタドガスに向かいシモンが走る。

「ドガっ」

少し上にふゆうしその攻撃をよけようとする。

「モオグ」

そんなシモンの後ろから走るトガミがいた。

「カアアアアアメ！」

トガミのロケットずつき。

その先にいるのはシモンだ。

「カアアアアメっ！」

「モオオオグリユ！」

その勢いでシモンはマタドガスめがけて飛ぶ。

「ドガア！」

その勢いにのまれたかいや、速さもなかなかのその攻撃をマタドガスはよけない。

そしてそのまま攻撃を食らう！

「ド、ドガアアアア」

シモンの攻撃を食らいマタドガスは墜落して行く。

「マタドガス。戦闘不能。この勝負、挑戦者の勝ち！」

「モオグ！」

「カア……メ？」

勝利が確定したときトガミの体が光りだした。  
そして

「カメエエエクス！」

トガミはカメックスに進化した。

「勝てたですよーざまあみやがれエです」

「よかったねえ」

「カ、カメッ」

勝利の喜びの方がトガミが進化したことより勝ったようだ。

「カ、カメクウウウスー！」

「モグリユ」

最後の進化だと言うのにトガミの扱いは変わらない……

その後バッチを受け取り泣いているアンスを見て

笑顔のミズホと困り顔のマサムネはジムを後にした……

続く

第三四壞・2 そりゃそうなるよ（後書き）

B ハートどこかで出そうかな……

いや。

面白いし楽しそうだが出すのはどうかな……

### 裏第三四壞 友情と疑問

「カメカメカメ」

「モグモグモーグリユ」

落ち込んでいるトガミを励ますシモン。  
だが以前のように肩に手は届かない。

「モグリユ。モグーリユ！」

「カ、カメカク」

「モーーグリユ」

手を使いトガミとの大きさを比較するシモン。

「カメエエエクス」

「モグリユ」

そして手をつかみ握手する二匹。

友情は姿が変わってもなくなることはない。

そういうことである。

【ポケモンセンター】

マサムネ達はシモンたちの横で荷物の整理をしていた。

「……」

「マサムネさん？」

「ん？ なに？」



「何か考え事ですか？」

「いや、別に」

「そう、ですか……」

そついうとミズホは荷物の整理を始めた。

「シモンはなぜ……」

マサムネはそうつぶやいた。

続く

第三五壞 ふたごじまでラブラブ……ISじゃねえよ！（前書き）

感想はまっている。

### 第三五壊 ふたごじまでラブラブ…… ISじゃねえよ！

「グレンタウンですか？」

「ヤマブキはまだゲートの工事中だ。と言うことでグレンに行く」  
「どうやって行くのです？」

「これだ」

マサムネが出したパンフレットをミズホは見る。

「ふたごじま経由グレン島行き船……ですか」

「と言うかこれしか船がないようだ」

「グレンタウンって田舎の田舎なんですね」

「観光地なんだけどね。まあ一定の季節以外は人が限りなくいないようだ」

そう行つてマサムネはパンフレットをなおす。

「と言うわけで、出発の用意をしようか」

「はいです」

そして二人は出発の準備を始めた。

【セキチクシティ：浜辺】

「さあ、出発ですよ。出発」

「俺たち以外に乗る人がいないようだけどね」

「毎日一便ですよ。他に乗るトレーナーも見えないです」

キヨロキヨロと周りをミズホ。

その視線の先にはマサムネと船しかない。

「ま、船長さんがいるからふ二人きりではないが」

「……ちっ」

「ああ。何も聞かなかったなあ俺」

そついうことで二人は船に乗った。

「出発」

「ふふっ」

ミズホは子供らしいところは子供だなとマサムネは少し笑った。

#### 【数時間後】

「ふたごじまだよお」

「到着か」

「ここで乗り換えなんですよね」

「そつもいがなくなつたよ」

突然船長がしゃべりだした。

「ここの島の入り口からもう一つの島の出口に行ってくれんかな」

「もう一つの出口？」

「諸事情でああ。これのせいで船で渡る人も少なくなつちまつたあ」

そう言ってタバコを吸いながら船長さんは船に戻っていく。

「向こう側の出口に弟の船が来る予定だからそれに乗るとええよ」

そう行つて船長さんは船に乗りセキチクへと歸つて行つた。

「……これで二人きりですよ」

「そうだけでも。しかしこれで人が乗らなくなつたか……」

そう言つてマサムネは洞窟の入り口を見る。

「強いポケモンでも出るのか？」

「強いポケモンなんてのは私たちの力があればなんともないです」

「私たちの力ねえ」

「はい。ラブラブパワーです」

「なんかどこかの何でもカレーかける女の子みたいなセリフね」

「たぶん誰もわからないですよそれ。女しか乗れないロボットに乗る男が主人公の話とか言つても」

そんな今なら別物の作品に間違えられるような話をしながら  
マサムネ達はふたごじまの洞窟に入つて行つた。

続く

第三五壞 ふたごじまでラブラブ…… ISじゃねえよ！（後書き）

そろそろ終盤なのかもしれない。

ところで皆さんは好きなものは先に食べる派？ 後に食べる派？  
自分は後に食べる派です。

第三六壞 まあ、こついつのもいいな（前書き）

感想はまっている。

### 第三六壞 まあ、こついうのもいいな

「薄暗いな……」

「ああ。もしも誰かでたら大変です」

「たぶんないよ。そんなこと」

抱きつくのではなく背中につく状態となっている。

「ついに抱きつくを超えてしまったね」

「まあ歩きにくいので常時できないというのが難点です」

そう言つてマサムネから離れいつも通りに抱きつく。

「しかしまあ。ポケモンが元気に泳いでるねえ」

パウワウやジュゴンなどが水の中を泳いでいる。

「襲ってくる気配とかはないけども」

「のどかですねえ」

ガチャ

「ん？ ガチャ？」

「あの、足元……」

「足元？」

足元の氷にひびが入っている。

「ははは。通りで寒いわけだ」



「私。いつまでも一緒ですから」  
「ああ、現実を教えないで……」

パリン

「あ、あああああああー」  
「落ちますうううううー」

「んあ？ うむ。助かったか……」  
「んにゃ〜マサムネさん〜もっとう〜」  
「何言ってるんだこの子は……しかし。落ちたところが見えない……」  
「……」

マサムネは上を見上げるが暗くて何も見えない。

「上にあがれそうなところは……穴のある場所が分かればシャドウに乗って上に行くんだが……」

ある場所がよくわからない。

「少し歩いて探すしかないな……」

そう言つてマサムネは腰を下げ倒れているミズホの頬を叩く。

「ミズホちゃん。起きて」

ペシペシ

「起きて」

ペシペシ

「起きてくれ」

ペシペシ

「まだ起きない……ん？」

よく見ると目をつぶっているが幸せそうな顔をしている。

「……しかたない。置いていこう。ミズホちゃん……いやオーキドミズホ。ここで別れだ」

そう言ってマサムネはミズホから離れて……

ガシッ

「……さい……」

泣き声が聞こえる。

「おいでいがないでござい〜マザムネさんがいないどいぎでいげません〜！」

この世の終わりが来たというような表情でマサムネにミズホは話しかける。

「じゃあもう、ためき寝入りとかしないこと。わかった？」

「ふえ……もうしませんからあゝ」

「じゃ、はい」

そう言って手をさしだす。

「……ありがとうございます！」

そしていつもの抱きつく状態となる。

「じゃ行こうか」

「はい」

そう言ってマサムネ達は上に上がれる場所を探しに歩きだした。

続く

第三六壞 補足 助けは来るのか 助けはないのか（前書き）

後半は文字数稼ぎのごめんなさいです！

### 第三六壞 補足 助けは来るのか 助けはないのか

「もすもす。おお、ジロウ。何？ 迎えの船の日時？ 今日だとい  
つだつぺ」

「いや、船は当分は出れねえんだつぺ」

船業者の二人の会話。

どうやら連絡の相違があったようだ。

「んだど、あのお客さんどうなるんだ？」

「ポケモントレーナーなんだからどうにでもなるべ」

「んだな」

勝手に大丈夫と結論づけた。

そして二人に助けは来ないことが確定したのだった。

【一方その頃 クチバシティ】

「マチスが明日に来るらしいよ」

「い、いよいよでござ……いや、それより子の荷物重いでござる…

…」

「テーマパークのお土産なんだ。実家まで送るのを頼むまでなんだ  
から我慢しなよ」

「でも10時間待ちでござるよ！？」

「いいから！」

遊びに行っただいいが結局は連れまわして荷物持ちにする。  
そんな運命であった。

続く

**第三七壞　ただボキャブラリーがないだけだよ！（前書き）**

感想は本当にほしいです。

たくさんあると作者がいつもより倍に働きます。

### 第三七壊 ただボキャブラリーがないだけだよ！

「こんな時にちょうど合ってよかったですね。長いマフラー」

「親父の贈り物の一つなわけだが……ファッションモデルと力がつけるような長い奴送ってくるとかどうなんだか」

「私たちにとっては都合がよかったんですよ」

笑顔で笑うミズホ。

それを見てマサムネもただ笑うだけだった。

「と。歩いては見るものの上が見えない……」

「ここで死ぬまで二人きりなんですかね」

「それはいろいろ困るがな……と」

前には大きな湖が広がっている。

「端についてないのに後ろに戻るもどうだな……ここは……」

と言うことでいつぞやの時に使った簡易型ボートを用意するマサムネ。

そして動力は……

「カメ……」

トガミである。

「さて、奥には何があるのか」

「なにもなかったりしたりしますかね」

「それはそれで戻るのが面倒だけどね」



そして奥へと少しずつ進んでいく。

「なんかどんどん寒くなってくるなあ……」

「こういうときに温まる方法は、ひと……」

「ん？ 何か見える……」

マサムネは何かを見つけたようだ。

ミズホは残念そうな顔をしているが……

「降りれる場所がある。降りよう」

そして二人は船から降り、何かに向かって歩く。

「これは……扉？」

「なんで人工物があるんですかね」

「この先に誰がいる？ 物好きな人もいるもんだ」

そう言っマサムネは扉を叩いてみる。

こっこっ

「少し凍ってて冷たい……」

「かわいそうなマサムネさん……」

そんなことを言っていると。

「どなたです？」

扉の奥から声がした。

「遭難者です」

「です」

ガチャ

「それは大変ですね。どうぞ中へ……あら？」

中から出てきた女性はマサムネを見て不思議そうな顔をした。

「？ なにか？」

「いえ、とりあえずどうぞ」

そしてマサムネ達は部屋の中へと入った。

「フリーザーですか？」

「はい。私の家系は代々ここでフリーザーの守護をしてきたのです」

「へえ……」

「まあ、ある特定の時期のみ来るだけですが。今はいません」

そう言っただけで彼女は二人に差し出す。

「そう言えば名前をまだ行っていませんでしたね。私の名前はツララです」

「俺の名前はマサムネ」

「私はミズホです」

軽い挨拶をし。

マサムネはもう一つの出口に出る方法を聞こうとしたその時。

「あの、あなたはその胸のものをどこで？」

「ん？ このキーホルダーの事？」

「ええ。どちらで？」

「これは親父からの贈り物さ。これについて何か知っているのか？」

マサムネはキーホルダーについて何か知っているのか凄くに気になった。

「いえ、お爺様がよく見せてくれたものと似ていて……」

「お爺様？ そのお爺様はどこに？」

「たしかオーレ地方に療養に行かれていますはずです」

「遠すぎるなそれは……」

「ですねえ」

（やはり親父に訊きに行くのが一番早いかな……）

「……」

「何か？」

「いえ、何でもありません」

「所で地上に出るにはどうすればいいんです？」

「出口はこちらの扉ですよ」

「おお。早く出ましょう」

「あ、お茶ありがとうございました」

カチャ。パタン

「忙しい人達……でもあのキーホルダー……」

再びしまった扉を見てツララはただ呟くだけであった。

続く

第三七壞　ただボキヤブラリーがないだけだよ！（後書き）

後書きは何も書いてありませんでした。

何か書いてあったのを見た人は忘れてください。

第三八壞 なんとなくですか…… (前書き)

感想お待ちしております。

### 第三八壊 なんとなくですか……

「外の光だ」

もう一つの出口に到着したマサムネ達。

「でも船は見えませんか」

「ならここはこの簡易ボートで行くしかないか」

「んじゃ動力でも出しますかね」

ミズボがモンスターボールを取り出そうとしたとき。

「あの、少しよろしいですか？」

「おや、ツララさん？」

「あのこれを……」

「なん……んん？」

ツララが手渡してきたものがマサムネは気になった。

「このプレート……俺に？」

「はい。あなたに」

カード一枚ぐらいの大きさのプレート。

それをマサムネは受け取る。

「しかしなぜ……」

「それは……」

「あなた……マサムネさんにプレゼントなんかしてどういっつおつもりです？」

恐ろしい形相をしたミズホがツララを見つめている。

「いえいえ。そう言うのではないですよ。私にも故郷に彼がいま  
すから」

「おや、そうなんですか」

ミズホはいつもどおりに戻る。

「一年ほど会っていませんが。まあ交代の人が来てくださるまで仕  
方がありません」

「さみしい話ですね」

「務めですから」

「あの、それで結局……」

二人の会話が終わるのを待っていたマサムネは再び質問する。

「……渡した方がいいと思ったからです」

「思った？」

「ええ、なんとなく」

「これは大事なものじゃないんですか？」

「5つあるうちの一つです。お爺様は1枚残るなら渡してもよいと  
も言われています」

「大事なものだと思うんだけどなあ」

そう言いながらもマサムネはカバンにプレートをしまう。

「では、私はこれで……」

そう言ってツララは洞窟へと戻って行った。



「大事なものをなげ……」

「マサムネさん。ボートと動力準備できましたよ」

「カメ……」

「ん、そうか。よし。グレンタウンに向かおう」

「はい」

そしてマサムネ達はグレンタウンへ向かった……

続く

第三九壞 おつきとはねと一年か（前書き）

感想ないと小説が止まるかもしれません。  
感想っていうのは燃料みたいなものです。

### 第三九壞 おつきとはねと一年か

「見えてきたなあ」

「グレンタウン見えてきましたねえ」

ボートがふたごじまから出発して約一日。

動力はとまることなくグレンタウンへ向かっていた。

「お、足が着けるところまで来ましたよ」

「よし。おりよう」

そう言つて二人はグレンタウンに足をつけた。

同時に動力の活動が停止した。

「力……」

もはや動く気配がない。

おつかれさまでした。

【ポケモンセンターに泊まつた次の日】

「ジムリーダーが用事で出かけていて明日まで帰らない？」

「ええ。少しジョウトの方に用があると先月から。帰ってくるのが明日の今日に訪ねてきてくれた君たちは運がいいよ。明日のこれに書かれた時間にまた来てくれ」

そう言って時間が書かれた紙をジムの事務員が渡してくれた。

「はあ。じゃあ明日に……」

そう言ってマサムネ達はジムから離れる。

「明日か……この島に今の時期に暇をつぶせるところなんてあるのかな」

「パンフレットがここに……化石研究所？」

「化石？ そう言えばおつきみやまです手に入れた化石が一つあったな」

「ああ、あの大金を手に入れたところですね」

「懐かしい話……そういやハナダでなんか手に入れてたような……」

マサムネは何か思い出そうとしているが思い出せない。

「あ、マサムネさん。研究所はポケモンセンターからすぐ近くらしいです。行きましょう！」

「ん、ああ」

ミズホに手をひかれマサムネは研究所へ向かう

（まあ、今思い出さなくてもいいかな……）

そしてマサムネは考えるのをやめた。

## 【化石研究所】

「これは珍しい化石をお持ちですねえ！」

「め、珍しいすか……」

「モ、モグ……」

研究員に化石を見せるとすごいアクションをされたので  
マサムネとシモンは少しひいてしまった。

ちなみにシモンは化石の発見者としてボールから出した。

「アール博士が喜ぶぞ、これは！」

「アール？」

「この研究所の所長だよ。こっちに来てくれ」

そう言つて研究員はマサムネの手をとり無理やり引きずって行つた。  
シモンとミズホはその後を追いかけた。

「ここ、この部屋の中だよ」

「は、はあ……」

ガチャ

「博士ええええええええ！ パターン青です！」

「青。青と言つたでアールか！」

「青ですよ博士え！」

研究員と博士でよくわからないがすごく盛り上がっている。

「なんなんですかねこの状況」

「知つてたら啞然とはしないよ」

「モオオグリユ」

マサムネ達ですらこの展開にはついていけない。

「では現品を見せてほしいのでアール」  
「ええと。これです」

そしてマサムネは化石を出す。

「おおおおおおお！ はねのカセキでアール！ カントーで見つけたであるか？」

「おつきみやまで……」

「ほおおお……おっと。叫んではかりもいられないでアール。これを少しあずからせてもらえないでアールか」  
「え？」

突然預けてくれと言われてただ驚く。

「この復元装置を試してみたいのでアール！」

「復元……と言うと化石をポケモンに？」

「その通りでアール！」

「えーと。シモン。どうする？」

「モグリユ」

紙をさしだしてきた。

そこには『いいよ、兄貴』と書いてある。

「発見者の許可も出たのでお願いします」

「うむ。明日にでも来るとヨロシ」

「明日に？」

「予定通りなら明日の昼には復元できるのでアール」

そう言つてアール博士はマサムネの手から化石をとり装置に化石をセツトする。

「では。明日に出来るのをご期待くださいなのでアール！」

そう言つて部屋を出されてしまった。

「明日の昼……かぁ……ジム戦の受付つていつぐらい？」

「えゝと……１０時くらいですね」

「昼つてどれくらいからが昼なんだか……」

「とりあえずジム戦を先にすると言つのがいいんじゃないでしょうか」

「まあ、そうだな。１０時は朝に分類されるかな」

そう言いながら二人はポケモンセンターへ向かった。

### 【ポケモンセンター】

「おや？ 君たちはあの時の」

「たしか……えゝと……」

「アサノブだよアサノブ」

セキチク近くで対決をしたアサノブであつた。

「偶然だね。俺はこの出身だね。帰郷していたんだ」

「ああ、そうなんだ。へえ」

「なんかすごく興味なさそうだね」

「ないね」

「……あ、そうそう。俺さシンオウに行くことになったんだ」

「シンオウ？」

「君も聞いているだろう。ポケモンリーグの延期を」

マサムネとミズホの表情は固まる。

「おや……まさかカントーとジョウトのポケモンリーグが一年延期になるということ知らなかったのかい？」

「し、知らんよ……俺そんなの知らんよおおおおお！」

「俺たちがセキチクであつて二日後位に発表されたが……」

そのときはふたごじまで遭難をしていたためそんなことは知らない。

「シンオウとハウエンは変更なし。そしてハウエンはもうすぐ開催と言うわけで開催の遅いシンオウに行くことにしたということさ」

「それって、イッシュとかは……」

「きみはポケモンリーグについては詳しくないようだね。イッシュは開催の年が一年ずれてるのさ」

「つまりは今回はカントーとジョウトとイッシュの大会が同じ年に開かれるということか」

「しかも同じ月にね」

つまりは

毎年同じ月にカントーとジョウトは同じ月に大会を開いておりそれから一カ月後にハウエン。それから数カ月後にシンオウとなっている。



イッシュはその一年後だ。

その他の地方は遠いので情報が入ってきていない。

「と言うわけで。俺は明日にはシンオウへ行くのさ。ここに船が来る手はずになっている」

「……俺のジム戦攻略の意味って」

「いやパッチはちゃんと延期した分も有効だよ。明日バトルしても損はない」

「そ、そうか……しかし長い期間が開いてしまうな」

「他の地方にでも修行に行けばいいんじゃないかな。俺はすぐに戦いたいんからシンオウに行くんだがね」

そう言つて笑いながらアサノブはマサムネ達に別れを告げ自分の家に帰って行つた。

「一年……かあ……」

「つまりはマサムネさんと旅できる期間が増えたということですよ。いいことです」

「ははっ。そうかもね」

「モグリユ」

そして明日のジム戦に備えマサムネ達は宿泊し睡眠をとることとした。

続く

### 第三九壞 おつきとはねと一年か（後書き）

アール博士とかいつぶりに小説で使ったかな……  
3年前くらいに凍結した小説以来かな。

と言うわけでそろそろ第一部が終わりに近づいてきた。  
次回からは終盤でしょう。

終盤と言っても新キャラもそれほどいででしょうし  
序盤・中盤より話数は少ないと思いますがご了承ください。

第四十壞 はっきり言っちゃだめなこともあるんだよ(前書き)

感想募集中！

#### 第四十壊 はっきり言っちゃだめなこともあるんだよ

【次の日】

「さあ、ジム戦ですよジム戦！」

「そうだねえ、ジム戦だねえ」

マサムネはジムに向かって歩いている。

「しかし二日あったことで……トガミが復活してよかったですね」  
「ああ、よかったね……」

一瞬ミズホが「ど」と言いかけたがマサムネは聞かなかったことにした。

「さて、ジムに着いたか……」

「入りましょう」

そして二人はジムの中に入る。

「む。よく来たな……ダブルバトルの挑戦者か」

「あなたかジムリーダーの……っ」

「……またその反応か。まあいい。バトルを開始しよう」

カツラは何か残念そうな顔をしてバトルの準備を始めた。

そしてミズホとマサムネはカツラに聞こえないように小声で話し始めた。

「カ、カツラなのに普通にハゲですよマサムネさん」  
「い、言うなよ……ふ、ふふくっ……」

そんなこんなで戦いの準備を始めた。

「いでよ、ウインディ！ ギャロップ！」  
「行くですよトガミ！」  
「やってこいシモン！」

そしてフィールドに4体のポケモンがそろつ。

「圧倒的にこちら有利じゃないですか？」  
「タイプで戦いは決まらないさ」  
「試合開始！」

二人の会話を遮るように審判の声が響く。

「ウインディ！ ギャロップ！ パターンZYS！」  
「ウイイイ！」  
「ギャロオオオオ！」

突然として二匹の動きが変わる。

「モグ？」  
「カメ？」

動きが変わっただけで攻撃が当たらないわけでもない。

「モオオグ！」

「カメエエクス！」

シモンはトガミを土台にして飛ぶ。  
トガミはハイドロポンプを放つ。

「ギャロオオオ」

「モグっ！？」

ギャロップがとびはねる。

「ウイイイイ」

「カメクツ！？」

ハイドロポンプを放とうとしたときウインディは後ろにいた。  
しんそくだ！

「ギャアアロ！」

「デイー！」

二匹の攻撃がシモンとトガミを襲う。

「モオ！？」

「クウス！？」

シモンは下に落ち、トガミは逆向きに倒れる。

「予想外の出来事が起きたな」

「そ、そんなに冷静にしていいいんですか！？」  
「……………」

（以前のような現象が起これると思ったが）

どうも起これるようには見えない。

負ける状況になれば起きるのではと静観していたが  
このままではやばいであろう……

（まあ、このままではやばいだろうが……同じパターンが続いてけるはずはない……）

「シモン。TKNだ！」

「モ、モグッ!? モ、モグ……」

「ためらうな！」

「モ、モオオオグ」

シモンは転がってジタバタしているトガミを  
小柄な体で持ち上げる。

「モオオオオオグ！」

「カ、カメエエエエエエエ！」

そして投げ飛ばした。

「ギャロオ！」

「ウイイイ」

そんなもの軽くよけられる……が

「カメカメカメカメ！」

突如としてトガミはこうそくスピンし始める。

「ディ！？」

ウィンディは突然の事にトガミの攻撃をよけられない。  
そしてその場に倒れる。

「ギャロ！」

トガミに向かいとっしんをするギャロップ。

ゴゴゴ

「モグウ！」

突如下からシモンが飛び出す。  
あなをほる攻撃だ。

「ギャロオ！？」

突如として現れたシモンにギャロップは対応できない。

「カメエクス」

「モグリユ！」

そしてウィンディは体勢を崩している。

「カ、メエエエエ！」

先ほどとは逆にトガミがシモンを投げる。



「モオオオグリユ！」

シモンのきりさく攻撃！

「デiiiiiiiiii！」

スチャッ

「モグッモグ……」

シモンの決め台詞とともにウインディとギャロップは倒れ動きが止まる。

「ギャロップ、ウインディ戦闘不能！ 挑戦者の勝ち！」

「クリムゾンパッチも手に入れたし。あとは研究所に行くだけか」  
「はいです」

二人はジムを後にして研究所へと向かう。

「どんなポケモンが復活してるんですかね。楽しみですね」  
「そうだな」

そしてマサムネ達は研究所へと向かった。

続く

第四十壞 はつきり言っちゃだめなこともあるんだよ(後書き)

この小説では

カツラの扱いが悪いように見えるが  
そんなことはないですからね。

**第四一壞　こいつ！　なんて使い勝手の！（前書き）**

感想と言つか今までの質問の答えも待ってます。

#### 第四一壊 こいつ！ なんて使い勝手の！

「遅いでアール！ とつくに復元はできているのでアール！」

「成功したんですか」

「御覧の通りでアール。この君のボールに入っているでアール」

そう言つてアール博士が差し出すボールを受け取る。

「おつと。ここでは出さないでほしいでアール。暴れられても困るでアールからな」

「まあ、それもそうか……」

そう言つてマサムネはボールをなおす。

「博士。そろそろ出発ですよ」

「む。そうでアールか」

「出発？」

「シンオウに行くのでアール」

「少し用事がありましてね。あなた達が来るまで待っていたのですよ」

そう言つて荷物を持つ助手とアール博士は研究所を後にした。

なお、助手の他にもお多くの研究者がいるので研究所にはまだたくさんの人はいる。

【ポケモンセンター】

「さて、新入りを出してみると……」

「やあやあ、君達。確かヤマブキに行きたかったらしいね」

「アサノブか。いきなりなんだ……」

ボールをあげようとしたら突然アサノブが話しかけてきた。

「いや、今日来てくれる船がねクチバの港にも一度寄ると言うんだ。君たちも乗って行かないかい？」

「おっ。いいのか？ どうやって行こうかと思っていたんだ」

アサノブの言葉にマサムネは喜ぶ。

戦闘で動力も疲れているし二日はここでとどまることになると思っ  
ていたからだ。

「いいんだ、いいんだ。俺の友達も別にいいと言ってくれているよ」

「そうか！ で、出発は？」

「今すぐだよ」

「え？」

「さあ、行こう」

そう言っアサノブはポケモンセンターの出口へ向かう。

「荷物をとってこないと……」

「荷物はここに全部ありますよ」

「ん？」

ミズホが既に部屋に置いてあった荷物をすべて持ってきていた。

「私はこう言うのをすぐに済ませるタイプですよ」

「手際がいいね……」

そしてマサムネ達は荷物を持ちポケモンセンターを後にした。

「おや。準備に少しはかかると思っていたが。早かったね」

「マサムネさんには私がいいますからね」

「おやおや、いい彼女がいるんだね。まあ年齢的には早い気もするけど」

そう言ってニヤニヤしながらアサノブはこちらを見ていた。

「さて、この船が俺の友達の船さ」

その船はでかい。

個人所有のものにしてはでかい。

「お前って金持なのか？」

「ん？ 一応グレンで一番大きな旅館の息子かな」

そう言っつて船に乗り込むアサノブ。

「……ま、こう言っ付き合いも必要よね」

「そうですね」

そして二人も船に乗り込んだ。

続く

第四一壊 こいつ！ なんて使い勝手の！（後書き）

ヘラクロス・ラッキー・そして化石より復元されたポケモン  
これらは第一部では登場はない予定です。

## キャラクター紹介（第一部版 終盤）

流れに乗る（事しか許されない）冒険者

マサムネ（15） CV：緑川光（仮） 出身：イッシュ

中盤から突如シリアスシーンが追加され始めたため  
いろいろと悩むことが多くなってしまっている。  
そしてミズホのマサムネ絶対上主義には何も言えない。  
すこしSに目覚めているかもしれない。

相棒

シモン（モグリュー） CV：柿原徹也

未だにモグリューである。

マサムネの手持ちのエースと言うか

シモン以外に中盤で戦闘した手持ちがない。

突然変異

シャドウ（ギヤラドス） CV：遊佐浩二（友人の直感で）

中盤での出番はヘラクロス捕獲時のみ。  
名前はたびたび登場していた。

ヘラクロス・サユキ



たぶんもう第一部に出番はない。

マサムネ絶対主義

ミズホ（11） CV：桑島 法子 出身：カントー

身長144cm B85（H） W48 H80

もはや何も言うことはないマサムネ絶対主義  
マサムネに対しては だがマサムネ以外にはSである。  
親子愛と言つものをかなり毛嫌いしている。

相棒

トガミ（カメール） CV：阿部 敦

使い勝手のいいポケモンである。

笑い上戸

リュボ（ゴースト） CV：玄田 哲章

勝手にボールから出で勝手にラッキーを捕獲した。  
勢いで捕獲することにしたため出番が少ない。

不思議な奴

カミコ（ピカチュウ） CV：佐藤 利奈

序盤は活躍していたが中盤から極端に出番がなくなった。

実は金持ち？

アサノブ（13） CV：ヤスヒロ 出身：カントー

実にいい奴であり。グレンーの宿泊施設の息子。

ちなみにその宿泊施設は火山で土地が沈没しようとも水中に浮き稼働可能らしい。

## 第四二壞 結論はそれでいいかな（前書き）

感想はお待ちしていますよ。

## 第四二壞 結論はそれでいいかな

「と言うわけでクチバに到着だよ」

「あつという間だったな……」

クチバの港に足をつけたマサムネ達。

「いや、ありがとなアサノブ。助かったぜ」

「いやいや、ついでだったんだ。構わないよ」

マサムネのお礼にはずがしがるアサノブ。

初めての出会いには悪い印象だったが今となっては全く真逆の好印象である。

「この恩はいつか返すぜ」

「ははっ。いやいや俺は多々の仲介役さ」

「ならこの船の持ち主さんに恩を返さなきゃか」

「持ち主と言ってもこの船には乗ってないけどね」

「そう言えば運転手さんだけだったな……」

「彼女はあまりシンオウから出てこようとしなから……」

そう言つて少し明後日の方向を見るアサノブ。

「なんだ。アサノブの好きな女か」

「それは違うよ！ 実際の持ち主は彼女の母親……あ  
「なるほど」

「あゝうゝ……もう！ ほら、彼女が荷物を全部降ろして向こうで  
待ってるよ！」

そう言いながらアサノブはマサムネの背中を押す。

そしてマサムネも何も言わずミズホのいる方へ歩き出した。

「やっぱり13歳でも子供は子供か」

15歳と言う子供とも大人ともいえない年齢のマサムネはそう呟いた。

「マサムネさあゝん。早く行きましょう!」

「はいはい」

二人は後ろで出発する船を見ながらヤマブキへのゲートへ向かう。

「お、工事が終わってるなあ」

「結構な期間工事してましたがヤマブキの人たちはどうやって生活してたんでしょう?」

「空輸じゃないかな。さて、早く行こうか」

そう言ってゲートに入る二人。

「このゲートは通るには申請カードが」

「はいこれ」

「あ、確認しました。どうぞ」

そう言って二人はゲートの中に入る。

【ヤマブキシティ】

「それで、どうするんですか？ マサムネさんのお父さんの所に行くんですか？」

「家にも帰らずずっと泊まり込みで開発をしていると言っしあえるかわからんしなあ」

「ならとりあえずジムにでも行きましよう」

「ジムか」

それもいいな、と思いとりあえずはポケモンセンターに向かった……

続く

## 第四二壞 結論はそれでいいかな（後書き）

主人公以外のキャラが幸せにならないのって大嫌いです。

なのでこの小説は名前ありのオリキャラはほぼ確実にカップルです。  
あくまでほぼです。

#### 第四三壞 - 1 ジョウトゥな話（前書き）

感想はいつでもお待ちしております。



### 第四三壞・1 ジョウトうな話

「ジムリーダーがいない？」

「ええ、だいぶ前にジョウトに行くと言って留守なんです」

ヤマブキジムに来たマサムネ達だったが、ジムリーダーのナツメは不在。

ジョウトに出かけ帰ってこないという。

「となるとここは当分後回しか……」

「あ、君そのバッチケースを見るところトキワジムも攻略していないね。トキワも今はジムリーダーは不在だよ」

「え？」

「どうやら代理の手続きもしていないようだね。手続きがないと代理も後任もできないからね」

ちなみにキイガはすでに後任との交代の手続きはしてあった。そのため少し早めることになったのである。

「そんな……」

「まあ、大会も一年延期になったわけだしそうも急ぐことはないよ」

そう言うときヤマブキジムの門下生はジムの中へと帰って行った。

「なんかすることが突然無くなっちゃいましたね……」

「しかしジョウトか……」

「どうしましたか？」

「ん？ いや……」

ジョウトに行った。

その言葉だけがマサムネの心に残った。

「じゃあ、行くかな。ポケアイテム株式会社に」

「シルフカンパニーに比べたら小さな会社ですよね」

「しかし有名度は違う。モンスターボール類の開発ではシルフよりも勝る」

と言うことと皆さんの胸の中で思っておくことにしてください。

各地方に支店もある。

本社はここである。

「そして開発部の一番偉いのが親父ってわけだ」

「すごいですねえ！」

「とにかく行つては見るが会えるかは別だな……」

そう言いながらマサムネ達はポケアイテム株式会社へと向かった。

「え？　すぐに来る？」

「コウイチさんは有給をとらなさ過ぎて困るよ。やることは終わるまで辞めないんだ」

「ちょうど息子さんも来てくれて助かるよ。これで無理やり休ませることができる」

（あの親父は……お袋と俺をほっておいて……俺たちをイッショから呼び寄せた理由はそれとは……）

まあ、すぐに帰れるところに家があつてほしかったからということ

である。

ちなみに、マサラタウンにはヘリポートがある。

「と言うわけで。もう少ししたらくるから」

「待っててくださいねえ」

そう言ってマサムネの父ことコウイチの部下たちはその場を去った。

「しかし……いよいよ……か」

「あの。ですよ？ あの事を聞くんですよね……」

「ん？」

「アサノブさんとの戦いとそして……過去の……」

「ああ、あれな……」

本題は謎の力の事だ。

（しかし、あの事も聞くのか？ 確実にになったら……）

そう思うとマサムネの心は少し悩み始めていた。

中編に続く

第四三壞・1 ジョウトゥな話（後書き）

そろそろ第一部完結。

第四三壞・2 答えなんか知らなきゃよかったんだ……（前書き）

感想は答えますよ答えられるものは

#### 第四三壞 - 2 答えなんか知らなきゃよかったんだ……

「おうおう。マサムネ……なんかしらねえが俺に会いに来たのか」

マサムネの父親のコウイチがマサムネ達の前に現れた。

「へっ。とりあえず俺用の個室がある。そこで話そう」

そう言つてコウイチはマサムネ達を個室に連れていく。

「それで？ なんだ話つてのは」

「それは、この事さ」

そう言つてマサムネはキーホルダーを見せる。

「なんだ。俺はてつきりミズホちゃんとの交際発表かと思つたがな」

「交際はしてますですよ!？」

「ミズホちゃん静かに。今、それは重要な事じゃない」

「重要で……いえ、すいません」

ミズホは黙る。

「そのキーホルダーは昔から一族に伝わるものだ。穴があつたから紐を通しただけだ」

「一族？」

「そう、俺たちは螺旋族と言つ一族だ……」

「螺旋族……それは一体……」

「んなもん詳しくはしらねえよ。もう廃れちまって俺たち以外は血をひくものもいねえって話だ。ま、その話をしてくれた俺の親もいねえしな」

それを聞いて少し考えるマサムネ。

これだと結局力の事はよくわからない。

「ま、お前が旅に出るからそれを送ったってわけだ」

「そう……所で親父も旅に出てたんだよな」

「あ？　あたりまえじゃねえか。子供の頃は旅しまくりでなあ。と  
いうか30代の頃も旅をしていてだな」

「それでこのキーホルダーも持って行って？」

「ああ、親父に持たされたからな」

「その時に……何か不思議な事が起こらなかったか？」

そう聞くマサムネの顔は真剣だ。

「いや、別に何もなかったぜ」

「そうか……」

なぜ自分だけ……なぜ自分だけ……

いや、一つだけ考えがある。

しかしそれはいや……

「親父さ。お袋とは結構年はなれてるよね」

「ん、ああ。今時そう言うのもよくあるだろ」

「今時じゃない時に結婚してるよな親父」

「なんだあ。何がききてえってんだ？」

「じゃあさ、親父さ」

そして聞く一言

「力ナって名前のお袋にそっくりな女の人知らない？」

「！？ お、おめえ……それをどこで……」

その反応は答えだ。

「つまりは親父……お袋は……」

それから出る答えは。

「親父の娘なんだろ？」

次回に続く……



第四三壞・2 答えなんか知らなきゃよかったんだ……（後書き）

過去のシオントウンの話ですでにわかっていた方もいると思いますが  
こつ言つことなんです。

第四壞 愛は絶対！ 信じた道を突き進む！（前書き）

感想お待ちしております！

#### 第四壞 愛は絶対！ 信じた道を突き進む！

「なんでそこまで知ってるのかはしらねえがよ……その通りだ……だがあいつは知らねえ……」

過去の話となる。

マサムネの父であるコウイチはイッシュに住むただの少年だった。そして旅に出た。

そんな時自分についてきたのがカナだ。

幼馴染であり仲の良かった二人はずっと一緒だった。

そして旅を終え二人は故郷に帰った。

そして結ばれたのだが……カナの親が突然カントーに行くことになった。

旅をしていたのだから別にカナはここに残ってもいいだろうと言ったが

カナの親はそれを無視しカントーに連れて行った。

無論コウイチも追おうとしたが親に止められてしまった。

そもそもカントーに行くにもお金がない。

旅をしていた時はトレーナーのためポケモン教会からお金が出ていた。

だから旅をできていたのだ。

しかしこの時すでにマサムネ20歳。

協会からお金が出ない年齢となっていた。

それから十数年がたったのち。

コウイチは発明によりお金がたまった。

コウイチの発想はかなりの人に認められた。

そしてその金を元にカントーへと旅たった。

そしてカントーを旅するもカナはいなかった……だか

そこで出会ったのがヨーコである。

カナに似ていたこともありコウイチはひかれ始めた。

そして一緒に旅をすることになった。

どうやらヨーコの親は病気で死んだらしい。

写真などは実家に置いてきてしまっていた。

ドジだなと笑い一緒に旅をする二人はそのうち恋仲へと発展した。

年が離れていることを始めは気にしていたがそれも知らぬ間に流れた。

その後とある事件が起こった。

ヨーコの実家の祖父が危篤状態だという一報が入った。

そして二人はシオントウンへ向かう。

そしてそこで見たものはカナの父親であった。

そこで自分はヨーコはカナの娘なのかと思った。

つまりは自分以外の男と……しかし……

コウイチは自分の年齢とヨーコの年齢を考える。

そこで一つの結論が出た……

そしてそれから数日後にカナの祖父は死んだ。

そしてヨーコはカナの娘だった。

そしてヨーコは父親を知らないらしい。

カナはヨーコに父親は行方不明と伝えたらしい。

これは自分も答えがわかる。

そう。これは……

しかしその時……コウイチに悪魔のささやきが聞こえる

そう。認知していないことだ。

認知していなければヨーコは娘として登録されていない。

そう。結婚しても法律上問題ないし、それを駄目だというものはもうこの世にはいない。

そして……

「今に至るってことか……」

「そうだ……しかしお前は……」

「いや、いいんだよ親父。二人の愛に間違いはなかった」

「マサムネさん……」

「俺は俺だ。親父も悪魔のささやきだろうと何だろうと決め手は愛なんだ！」

マサムネは叫ぶ。

「親父は違っちゃいねえ！ 結論はそれだ！」

そう言ってマサムネは荷物を持ち部屋を後にしようとする。

「俺はオーレ地方に行く!」

一つの疑問は解決した。

そしてもう一つの疑問である力の秘密を知る人がいると言うオーレ地方へ。

「行くぞミズホ!」

「よ、呼び捨て……うれしいです!」

そう言つてミズホもその後をつける。

「マサムネ」

そう言つてコウイチがマサムネにあるものを投げる。

パシッ

「これは?」

「オーレに行つたら開け。お前はお前の信じる道を進め」

そう言われたマサムネは笑顔になった。

そしてマサムネはポケアイテム会社を後にした。

「ミズホ。かなり遠いところに行くことになるけどいいんだな」  
「もちろんですと! マサムネさんの行く所に私あります!」

そう言つて二人はクチバへと向かう。  
新たなる旅へ向かうために……

第一部 完！！

**第四壞    愛は絶対！    信じた道を突き進む！（後書き）**

と言うわけで第一部終わりました。

長かったです。

と言うわけで次回から第二部がスタートです。

お楽しみください。



**第1策 ただ目的のために（前書き）**

**第二部 ホウエン地方の物語の始まり！**

## 第1策 ただ目的のために

とある少年が幼稚園に通っていたころ。

彼は周りからは避けられていた。

『普通ではない』と言われた。

子供の親たちは彼から自分の子供を引き離した。

彼は兄弟もいない。

彼を助けるはずの親は父が死んで働き詰めのため助けることができなかった。

彼は孤独だった……そして彼はみんなに愛される英雄になりたいと思った。

誰もが憧れる英雄へと……

## 【ミシロタウン】

夜空の下。

空を見ながら決意表明する少年がいた。

「私は英雄になるのだ！　そして人々の頼られるものへとなる」

少年の名前はトウガ。

年齢は11歳。

「しかし、昨年旅に出られなかったのは痛い」

彼は昨年『謎の事故』により旅に出ることができなかったのだ。

「今のまま行くと私は10歳で旅に出れなかった臆病者と言つこと

になつてしまふ……」

彼が目指す英雄のためにはそういう風評を持たれるのも嫌だった。

「ああ、使えるたびの中でもいればいいのだが」

そんな時流れ星が見えた。

「流れ星か……非科学的だが今は猫の手も借りたいところだ。神頼みもいいだろう」

そして彼は流れ星に願う。

「下僕がほしい、下僕がほしい、下僕がほしい！」

そんな時流れ星がこちらに落ちてくるように感じた。

「む？ 星がこちらに……と、危険ではないか！」

トウガは逃げようとするだが避けられない。

「う、うおおおおお！？」

「う、うつむ……なんだ？」

トウガは起き上がる。

「これはどういうことだ……」

トウガの体の上には小さな女の子が二人いたのだ。

「……なるほど。下僕か」

そう言つてトウガは女の子二人を担ぎ家に帰ることにした。

「願つてみるもんだな」

トウガはそう呟いた。

その後トウガは母親に倒れていた女の子を拾つたと言いき親が見つかるまで家で暮らしてもらふということになった。トウガはそのうちに下僕として育てようと思った。そしてその女の子たちが目覚めた。

「う……ここは？」

「い、いてて、どこだここ？」

「ここは私の家だ」

母親は内職をしているため対応はトウガ一人だ。

「あなたの家なのですか」

「そうだ。ところでお前たちの名前は、出身地は、年齢は？」

「そんないっぺんに聞かれてもなあ」

そう言つて女の子たちは言葉を止めると黙る。

「あれ？ あたしたちの名前って……」

「私の名前……思い出せません……」

「なに？」

二人は自分たちの名前を思い出せないという。

「「出身地……も」」

「覚えていないか……」

「あ、でも年齢は覚えています。6歳ですよ」

「あたしも6歳」

こう言う子供は進んでいるものだ。

「どうも6歳には見えんのだが……まあいい。母さんが搜索願いが出でいないか調べてくれるらしい」

そう言うてトウガは二人に用意された寢床を教えて自分の部屋に帰った。

それから数日がたったが二人の搜索願いは一切なかった。

そしてトウガは二人が自分のために授けられた下僕だと確信してしまった。

その後二人はトウガにより名前を付けられた。

泣き虫でおとなしい方の子をナギサ。

男勝りだが隠れ の方の子をヤヨイ。

そう名付けられ、さらにはトウガの下僕とすべく教育が始まった。

そしてそれから4年の月日が流れた……

【四年後 ミシロタウン出口】

「くくく。いよいよ私の英雄へとなるべき旅立ちの日が来たのだ！」

「さすがですお兄様」

「兄貴は本気で英雄目指す気なのな……」

二人は養子としてトウガの家族になったため妹となっていた。

「そうだ。私は英雄となり人々の象徴となる！」

「流石の高い目標です！」

「ま、兄貴にならなれるかもな」

教育の成果も出ているようだ。

「ふふふ……では行くぞ！」

「ベイ！」

トウガの後ろを歩くのはタツベイのレジ。

「待ってくださいよお兄様」

「チャモ」

ナギサの後ろに続くのはアチャモのレン。

「たつく……待てよ兄貴」

「キャモ」

ヤヨイの後ろにはキモリのクロウ。

かくして三人と三匹の旅が始まる。

T  
o  
B  
e  
C  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

**第1策 ただ目的のために（後書き）**

なぜホウエン地方か。

いぜんとつた質問の結果です。



## キャラクター紹介（第二部版 序盤）

### 主人公

トウガ（15）妄想CV：福山 潤 出身：ホウエン

英雄になるということに固執している。

それは過去に人から避けられたということが原因であり人から頼られる象徴となるために英雄を目指している。

過去の出来事から正義や悪と言言葉が嫌いである。

義妹達には下僕として扱うと言ってはいるが自分を

慕ってくれているため、この世で一番大事な存在となっている。

見た目は黒髪の短髪でサングラスをしている。

身長は平均より少し上程度。

顔を見たら10人中8人は振り返る男前。

サングラスはそれを隠すためにしている。

### 相棒

レジ（タツベイ）妄想CV：中村 悠一

凶暴性は全くななく冷静沈着な性格。

トウガの言うことを確実にする。

なお達成できない場合は自分自身に罰を与える。

### 相方

ミコト（ラルトス） 妄想CV：半場 友恵

純粋な心の持ち主であるトウガにひかれ仲間になった。  
結構なレベルではあるが進化をすることなく今に至っている。  
体に精神がひかれているらしい。

義理の妹？

ナギサ（10） 妄想CV：中原 麻衣 出身：不明

身長145cm B70（C）W45 H81

トウガが願った時空から落ちてきた女の子の一人。  
礼儀正しい性格で少し泣きやすい性格。

トウガの教育により少しはましになっている。

トウガの事を大好きな兄として見ており

トウガの夢である英雄になることの手助けならば  
なんでもする。

見た目は黒髪ロングでメガネをしている。

相棒

レン（アチャモ） 妄想CV：三瓶 由布子

元気いっぱいだが別に猪突猛進であるわけではない。

ナギサのいうことにはちゃんと従う。

義理の妹？

ヤヨイ（10）妄想CV：小清水 亜美 出身：不明

身長145cm B72（C）W49 H70

トウガが願った時空から落ちてきた女の子の一人。

少し男勝りなところがあるがトウガの怒っている時の命令には逆らえない。

Mの素質はトウガの教育の影響により生まれたものである。

ヤヨイもナギサと同じくトウガの事を大事な兄として見ており同じようにトウガを英雄にするためなら何でもする。

見た目は黒髪でサイドポニー

相棒

クロウ（キモリ）妄想CV：うえだゆづじ

冷静沈着を装ってはいるが実は熱血漢。

## 第2策 思いの思うままに（前書き）

感想お待ちしております。

## 第2策 思いの思うままに

ミシロタウンを出発しコトキタウンを目指す御一行。

「……弱いな」

レジが近寄ってくるケムツソにジグザグマをことごとく倒している。

「お兄様の指示か完璧ですから」

「まあ、それもあんだろうけど。レジも強いってもあるんじゃない？」

「ふ、私の頼れる相棒が弱いわけなからう」

『ふっ』と笑いながらトウガはコトキタウンに向けて歩く。

「あつ、待てよ兄貴」

「待ってくださいお兄様」

【コトキタウン】

「おや？ トウガ君じゃないか」

「オダマキ博士か」

フィールドワークに出かけていてミシロタウンに帰ろうとしていたオダマキ博士がいた。

「こんにちは」

「どうも」

後ろにはオダマキ博士の助手になりにかントーから来たという二人がいる。

「いやあ。この二人がいてくれるおかげでいろいろ楽になってね。少し遠出をしてしまったよ」

「以前よりまして酷くなってしまったか」

やれやれといった顔でオダマキ博士を見るトウガ。

「しかし女子の人たちは仲がいいですね」

「私たちは夫婦なのよ」

ナギサの言葉に助手の一人が答える。

「へえ」

そう言いながらトウガの方をナギサは見ている。

トウガはその視線の意味をわかつてはいるが何も言わない。

「それで、お二人お子さんはいないんですか？」

すると助手二人は顔が悪くなり黙る。

「なぜ黙っているのだ彼らは」

「いや、ちよつといいかな」

オダマキ博士がトウガを連れて少し離れたところでこそそと話す。

「彼らね、子供さんと仲が良くないらしいんだよ。どうも子供さんと仲良くする方法がわからないらしくてね」

「なに？」

「そもそも彼らの子供さんは彼の実家に預けられていてね、どうも子供がいると研究がはかどらないからと言って預けたらしい」

「それは確実に親子間の歪みができるのではないのですか？」

「そう思うんだけどね……彼らが彼らで解決するのを待っているんだが……」

オダマキ博士も一人娘がいるので助手二人には子どもと仲良くなつてほしいと思っているらしい。

「まあ。そのためには研究と言うものを捨てねばならぬのでしょうが」

「そうでもないけど思うけどねえ。彼の父親のあの人は二人の娘さんとはうまくいっているようだし」

「ふむ？」

（それはつまり父親が研究者と言うことか。しかしこの親……）

トウガは自分の母親と比べた。

どうもこの夫婦は自分の子供の事などどうでもいいらしい。

自分たちの研究が優先と言ったところのようだ。

（まったくの屑だな。母さんと比べるのも失礼なレベルだ）

トウガはあの助手夫婦の事を屑と認定したようだ。

（まったく……くだらない……）

（お兄様……どうもあのご夫婦が気に入らない様子）

（兄貴はああいうの大嫌いだからな）

「では、博士。私は失礼する」

「む、そうか。君にはあの関係は気持ちよく思えなかったか」

「私の過去は知っているでしょう」

「あの時は私も忙しく助けられずに……」

「いいんですよ。博士は博士なりに助けてくれましたから」

そう言ってトウガはコトキタウンのポケモンセンターへ向かった。

「……」

「……」

「……」

トウガはまさに不機嫌ですと言っ顔をしながらポケモンセンターの個室にいる。

「あのお兄様？」

「なんだ」

「お兄様には私がいますよ」

「そうそう。あたしもいるよ」

そう言ってトウガの両脇に座る二人。

「それも、そうだな……私も敏感すぎるのか知れんな……」



そう言つてトウガは少し笑つた。

続く

## 第2策 思いの思うままに（後書き）

もはや何も言うことはないですが

あの夫婦は子供付き合いが悪いです。

結果なんて見えていたようなものです。

### 第3策 考えの考えるままに

トウカシティへと向かうトウガ一行。

「少し離れてはくれないか？」

「離れたら寂しくなりませんか？」

「寂しくなる時もないとは言わないが常時これでは困る」

ナギサはトウガにべったりである。

ヤヨイはそれをうらやましそうに見ている。

「とにかく離れてくれないか。歩きにくい」

そう言ってひつつくナギサを無理やりはがす。

「そうですか。寂しくなくてよかったです……」

どうもナギサがさみしいようだ。

（やれやれ、やはり10歳は10歳だ……）

トウガはこれからの旅が少し不安になった。

【トウカシティ】

「シティとタウンの境界って何なんでしょうね」

「私に聞かれても困るがな。そんなもの目的のためには必要のない

知識だ」

そう言ってトウガはポケモンセンターへと向かった。

【ポケモンセンター：個室C】

「しかしまあよくこんな部屋に泊まれるお金がありますね」

「まあ、すべてはあいつの資金提供のおかげだな」

「ああ、確かジヨウトの」

（そう。奴とは事故の後に病院で会ってから何か感じるものがあった……それからというものの意気投合しかれこれ通信でしか話をしていないが5年の付き合いだ……しかし少し前旅に出てから連絡はない……奴なら大丈夫だとは思うが……）

トウガは悩んだが悩むだけ無駄と判断した。

「しかし奴の発明品は役にたった。母さんの仕事の負担が3分の1になり目的への資金もたまった」

「ふふふ。そうですね」

三人は少し笑顔になる。

「でもさ、された相手の命の事を考えないのってどうなんだ？」

「ふふふ……そんなものばれなければいい。そんなことをする人間などいないのだから……事故として見られるだけだ」

そう言ってトウガは荷物の中にあるものを見る。

「まあ、使うことのないのが一番いいのかもしれないがな」

「ふふふ。悪と見られているものを倒せば倒したものは正義と言っやつですね」

「下らんがな」

（正義だの悪だの。そんなものはそれぞれがすることの理由に納得するためだけの言葉だ）

正義の反対は正義。

それはそうだ。

そして悪の反対は悪。

それも正しいということになる。

そして英雄はそれとは違うものだ

英雄とは象徴だ、人々の視線をすべて一つに集める。

英雄は悪でも正義でもない。

「つまりはどちらでもあると言うこと……」

「まあ、それはそれとしてよ、兄貴」

話の腰を折ってヤヨイが話しかけてきた。

「今からがいいところだったのだが……なんだ」

「このジムの事なんだけどよ」

そう言いながらヤヨイはパンフレットをトウガに見せる。

「そろそろ引退するっていう爺さんなんだけどよ」

「ご老人か。で、それがどうした」

「ダブルバトルしか受けてくれねえらしいんだわ」

「そうか。しかしルールは知っているだろう？」

トウガがそう言うとなギサがルールブックを取り出した。

「今回の大会はカントー・ジョウト・ホウエン・シンオウ・イッシュの5地域のチャンピオンを決める大会」

「そして参加はシングルバトルでダブルバトルは4人一組でないとならない。でしたね」

「まあそつだ。4人目はのちに来てもらえる話になっている」

そう言つてトウガは立ち上がる。

「メンバー登録さえしていれば二人で戦い勝つても三人目もバッチがもらえる」

「あ、そうだったっけ？ あたしそこの事はすっかり忘れてたよ」

「ヤヨイは抜けてるところは抜けてますねえ」

ナギサがヤヨイを見ながらくすくすと笑う。

「はいはい。あたしは頭がよくないですよ……」

そう言つて個室にあるペットに潜るヤヨイ。

「不貞寝ですか。なら私はお兄様と寝ちやいますよ」

「私はまだ眠くないのだが」

「いいじゃないですかあ」

「しかしな、お前だけと寝ると次の日はヤヨイが不機嫌なのだが……」

「それはそれで気持ちいいっていいですかね。なんともいえません！」

ナギサは凄く笑顔だ。

「そうか……」

そして結局ナギサと寝ることになった。

続く

### 第3策 考えの考えるままに（後書き）

後半が少しおかしくなっちゃった……

いろいろあったためですごめんなさい。

なんかもつと物語の後半で書こうとしたことを書いてしまった気がするが……

あと、このルールですがもちろんオリジナル設定。

実はカントーの方にはジムリーダーにしか伝わっていない。

キイガが一度マサムネ達に説明しようとしていたが

聞かないでそのまま進んでいるのでカントーメンバーはこの話を知らない。



#### 第4策 - 1 戦いの戦い

「ジムリーダーが不在？」

「ええ、明日には帰ってくると思うんですけど……」

トウカジムを訪ねたがジムリーダーは不在のようだ。

「残念な話ですねえ」

「また一日滞在しなきゃだなあ」

そう言つてヤヨイはトウガの肩に顔を近づけながらそう言つ。

「で、どうやって時間をつぶしますか？」

「ふむ……ここはそれほど人がいる町でもない……」

トウガが悩んでいる。

そんな時。

「てめえなめてんのかあ！」

「む？　なんだ？」

トウガ達の前方で何か騒ぎ事が起こっていた。

「お前こんな弱さでジムリーダーに挑戦する気かあ？」

「うう……別にいいじゃないか！」

「よくねえんだよお！」

一人の少年を一人の少年がいじめている。  
いじめている少年の周りには取り巻きがいる。

「なんだ、弱い者いじめか」

「大した騒ぎでもなさそうですね」

「つまらんな。解決しても何の得にもならん」

やれやれという顔でポケモンセンターに戻ろうとした  
その時である。

「ああん？ 聞こえたぞてめえ」

「面倒な話だ……」

トウガは顔をしかめる。

「てめえ、よそのポケモントレーナーだなあ？」

「だとすればどうする」

トウガはやれやれといった感じた。

「ジムリーダーに挑戦する気だなあ？」

「だとすればどうする」

トウガは少し笑った。

「同じことばかり言いやがってよお！ なめてんのかあ？」

「ふ。わかっていることを言う必要はないな。ナギサ、ヤヨイ。行  
くぞ」

そう言ってトウガはその場を後にしようとした。

「までよお！ 俺たちと戦いやがれ！」

「ほう。3対3の変則バトルと言ったことか？」

「そのとおりだあ！」

「ふむ。ナギサ、ヤヨイ。やるぞ」

そう言っただけでいいと思っていた奴らと戦うことにした。

「ちょっと兄貴。なんでこんな奴らと……」

「いい練習台だ。私たちのな」

「なるほど。流石はお兄様」

「ふふ。井の中の蛙大海を知らずというものだ」

そして戦いが始まる……

後半に続く

第4策・2 井戸の蛙（前書き）

感想募集。

## 第4策・2 井戸の蛙

「いくぜエ！」

3人組は全員がジグザグマを出してきた。

「全員同じか。チームワークが優れているのかいないのか……」

「でもこの街でいいところがこれだとジムも知れてますよ」

「引退寸前の爺さんだもんな」

「お前達。そういうことを言つとこの街のものから嫌われるぞ……」

どうやらもう一度始動しなおさなければいけないと  
やれやれといった表情をトウガはしている。

「では、行って来い、レジ！」

「遊んであげなさい、レン！」

「やってこいよ！ クロウ！」

ポシュウン！

「ベイ」

「チャモ！」

「キャモ」

そして3対3のバトルの準備が整う。

「へっ。珍しいポケモンでもつええとは限らねえんだよオ！」

「同じポケモンでもチームワークがいいかはわからんがな……」

そして戦いが始まる。

「囲んで一匹ずつぶしてやれエ！」

ジグザグマはレジを囲む。

「馬鹿だね。レジを囲むなんて」

「ふふ。レンとクロウの出番はありませんね」

「そうかもしれんな。レジ！」

不敵に笑う二人。

そして叫ぶトウガ。

「ベイ……」

「ジグザー！」

「ベエエエー！」

「ジグツ！？」

レジに突撃していった三匹が

レジから発せられる

りゅうのはどうにより跳ね跳び倒れる。

「なんだとオ！？」

「私の相棒は凶暴だ。ただの集まりには勝てぬよ」

「まだ終わってねエ！」

「グザアー！」

倒れていたうちの一匹のジグザグマがレジに襲いかかる。

「グザツ！？」

「キャアモ」

突然現れたクロウのおいうちによりそのジグザグマも倒れる。

「グザグザー！」

「ジグザグー！」

他に倒れていた二匹が起き上がりたいあたりをしかける。

「ほう。体力だけはあつたようだ」

「でもあんまり意味ないですね」

その言葉通りだった。

「キャアモ」

「グ、グサツ！」

「タツベツ！」

「ジグッ!？」

レンのつじぎりと、レジのずつきにより  
残りのジグザグマも戦闘不能となった。

「これで弱い者いじめなどやめるのだな。身をもって思い知つた  
らう」

「弱い者をいじめるのは屑のやることですよ」

「そゆこと。そしてそう言うかわいそうな子は兄貴が助けてくれる  
ってことさ」

三人はニコニコしながらその場を去って行った。

「かつこいいなあの人！」

「弱い者いじめを見逃せないなんてすごい！」

ざわざわとやじ馬達が騒ぎ出す。

それはまるで漫画やアニメのヒーローを見たような感じた。

「ちくしょうウ……………」

「お、親分……………」

「ま、まぐれですよ……………」

「まぐれだア？　んなわけあるかよオ！」

彼は負けたのは初めてだ。

初めての敗北を思い知った。

「ちくしょオ！　俺は…………俺は、俺はアー！」

「お、親分？」

「俺は強くなくちゃいけねえンだよオ！」

彼の叫びは子分たち以外はだれも聞いていなかった。

そしてやじ馬がヒーローとあがめるトウガ達は

彼を自分たちの目的の道具として使っただけであつた……

続く



## 第5策 強いきもち（前書き）

感想は募集している。

## 第5策 強いきもち

「しかし、つまらぬものだったな……」

「へっへへ。あたしたちに勝てると踏んだあいつらがおかしいのさ」  
「その通りですね」

三人組は近くの草むらに来ていた。  
いいポケモンがいたら捕獲するためだ。

「しかしこの近くに珍しいポケモンはいないようだな」  
「やっぱりそうそういないんだよ」  
「ですね」

目的にあったポケモンはいないようだ。

「もう少し良く……」「お前ら!!」「む？」  
「よくも親分をあんな目にあわせてくれたな！」  
「何も話さなくなっちまったのはお前らのせいだ！」

先程の三人組の子分二人がやってきた。

「頭が落ち込んでそれへのお礼……と言ったことか」  
「くだらないです」  
「くだらないねえ」  
「んだとてめえええ！」

三人が子分たちを馬鹿にすると子分の一人が殴りかかってきた。

パシッ

「ポケモンバトルで勝てないとわかると力づくか。弱いな」  
「んだとお!」

ドガッ

「んがつ!」

「女のあたしたちは弱いとも思っただ？」

ヤヨイが子分の一人を回し蹴りで倒す。

ビリッシュ

「かよわくても強いんですよ」

腕装着型スタンガンでトウガが手をつかんでいた奴を気絶させる。

「違いのわからない奴らだ……」

《面白い人達……》

「む?」

どこからか声がするが誰もいない。

「お前たちではないな……」

「え、何がですか?」

「なんかあったのか?」

「聞こえていなかったということはテレパシーの一種か」

《そう言うことになるかもね……》

再び頭に声が聞こえる。

「どこだ。どこに」

《ここよ》

「兄貴！ 頭の上！」

「上？ む？！」

頭の上には一匹のポケモンがいた。

《ふふ。私が声の正体。ラルトスよ》

そこにいたのはきもちポケモンのラルトスだった。

続く

## 第5策 強いきもち（後書き）

この頃他の人が書いた小説を読む時間が増え  
自分の小説を書く時間が短くなってきた。

やばいな、昔のようになってしまう……

## 第6策 思いの名前（前書き）

感想はいつでも待っている。

## 第6策 思いの名前

【ポケモンセンター個室：Z】

「で、何なんだお前は」

《何なんだとは失礼な。私はラルトスよ》

「それは種族名ではないのか？」

《だって名前はないもの》

トウガの頭の上には未だにラルトスが乗っている。

「兄貴く会話してる感じだけどあたしらには何も聞こえないよ」

「お兄様だけが会話できる……素晴らしいじゃありませんか！」

どうもほか二人にはラルトスの声が聞こえていない。

「なぜ私にだけお前の声が……」

《ふふ。あなたは純粹よ》

「純粹？」

《そう……だからこそ面白い……》

「面白い？ 私の考えていることは面白いとは思えんがな」

《純粹よ。きつとあなたといれば私は進化できる》

「一緒にいたいというと私に何か利点はあるのか？」

《私これでも強いわよ》

ラルトスは腕をあげながらトウガの頭の上でジタバタしている。

「ならこのボールに入るがいい」

《ええ、よろしくねご主人》

そう言ってモンスターボールの中にラルトスは入って行った。

「と言うわけで新たな手駒だ」

「どういう流れかはわかりませんが新入りさんですね」

「使いもんになるといいねえ」

そう言ってボールからラルトスを出す。

「と言うわけでお前に名前を付けてやる」

《いい名前を頼むわよご主人》

「いい名前か……ふむ……」

トウガは少し悩む。

(いい名前はすぐに思いつかぬものだ……いい名前、いい名前……)

「よし。お前の仲間が決まったぞ」

《決まったの？　じゃあ私の名前は？》

「お前の名前はミコトだ」

《ふうん。ミコトね。ミコトかぁ》

するとミコトは再びトウガの頭の上に上った。

《私の名前はミコトよぉー！》

「……やはり見た目通りだ」

ミコトは大人になりたい子供のようにだった。

続く



## 第7策・1 夢の欲

「頭が痛い」

《あら？ 大丈夫？》

「お前のせいだが……」

朝起きると頭の上にはミコトが乗っていた。

「おはようございます。お兄様」

「兄貴、おはよ」

ナギサとヤヨイも起きる。

「とりあえずは今日こそジムに挑戦するぞ」

《私の初陣よ》

「そうだな。そうしよう」

「なんだか二人しか分からない会話なんてしてずるいです」

「そうだな」

《あら、嫉妬かしらね。怖いわご主人》

「……」

（計画に支障が出なければいいが……）

トウガには不安しか残らなかった。

【トウカジム】

「私がこのジムのジムリーダーのノマルだ」

「あなたが……」

「昨日はうちの孫が世話をかけたようじゃの」

「昨日？ ああ、あの勘違いをしていた奴か」

昨日の集団の親分の事であろう。

「奴は私のために強くならなきゃいけないといって何もきかんの……」

「なるほど」

（祖父がためのあの行動か。欲に忠実だ）

トウガはあの少年に共感を覚えた。

「まあいい。では戦っていたただこう」

「ダブルバトルだが……どちらが相棒だ？」

「今回は私です！」

そう言うとナギサがトウガの横に歩いてきた。

「私とこのナギサの二人でだ」

「そうか。では戦おう」

後半に続く

## 第7策・2 本当の本当（前書き）

感想お待ちしております。

## 第7策・2 本当の本当

「では、初陣と行こうか」

《私の初陣は華やかな勝利で終わらせてあげるわ》

「レンもやつてやりなさい！」

「チャモ！」

フィールドの中央にミコトとレンがたつ。

「行くがいい。ゴニヨニヨ、エネコ」

「ネ」

「ニヨニヨー！」

ノマルはエネコと繰り出した。

「試合開始！」

そして戦いは始まった。

「ゴニヨオオオオオ！」

ゴニヨニヨがさわぎ出した。

《るっさいわねえ……》

「チャモチャモ」

《あんた、それ本気で言ってるの？》

「チャモ」

《まあいいわ、乗ってあげる》

「チャモ！」

テレパシーで会話しているためさわぎの意味はない。  
しかし頭に響く大声によりダメージは受ける。

「ネー！」

エネコはエネコも叫びだした。

「ネコのてか。意味があるようには見ないが……」

（そもそもポケモンのレベルが低い……用事というのが何か関係があるのか？）

「ミコトはレンの案道理に動くということだが。あの案ならうまくいくだろう」

「ニョ」

「ネ」

少しずつ叫びが小さくなってきた。

「ネ？」

「ニョ？」

とまりかけた時にエネコとゴニョニョは周りを見る。  
戦っていた二匹の姿がない。  
ダメージは食らっていたはずだが。

《はい落下》

「ネ？」

「二ヨ、二ヨ！？」

上から眠っているレンが落ちてくる。

「ネエ！？」

気づくことができなかったエネコはレンにのしかかれてしまう。

「チャ……チャモ！」

《ちゃんと起きたわね……起きなかつたら失敗だったわよ》

「チャモオ！」

《まあ、短い付き合いだしね》

少し二人は言い争いをしている。

「二ヨ二ヨオオ……二ヨ？」

隙を突こうとしたゴニヨニヨは空に舞う。

《まあ、騒がなくちゃ別に何ともないわね》

サイコキネシスによりゴニヨニヨの動きは封じられ  
さらには締め付けられ苦しめられる。

《そんじょそこらのサイコキネシスと一緒にしないでね。私は結構  
強いよ？》

「二ヨ……二ヨオオオ」

《この縛りから逃げようとしている？ 根性だけはあるのね……でも》

タッタッタ

「チャアアアモオ！」

「ニヨオオオオ！」

《これはタッグバトルなのよね》

レンのつじぎりにより戦いは終わった。

「私の負けだな……」

「……何があつたのかは知らないがあなたは本当の力の少しも出せていないようだ」

「そうかな……しかし負けは負けだバッチを持っていくがいい」

そう言つて渡されたパッチをトウガは受け取る。

「まあいい。私の勝ちだ……あなたが本気を出した時も一度戦おう……」

そう言つてトウガは出口へと向かった。

「流石はお兄様です」

「兄貴はかけえなあゝ」

そう言つて二人も付いていく。

《私は強いよ》

「頭の上で動くな……」

ミコトはやはりトウガの頭の上で踊っていた。

「本気か……私もう長くはない……」

三人の後姿を見てノマルはそう呟いた。

続く



## 裏第7策 少年は性根は正直

「俺はあ……俺はあ……」

あの三人組のリーダー。

ジムリーダーの孫は悩んでいた。

「強くならねえと……強くならねえと……」

少年は唸る。

彼は強くなりたかった。

「俺はジムリーダーの息子なんだあ……あの！」

彼は今のジムリーダーの孫だ。

息子などではない。

「強くなきゃならねえんだあ……強くよオ……」

彼は唸る。

うなり続ける。

「親父のよオに俺はア強くなる」

彼は唸りながら荷物の整理をしている。

「行くぜ……相棒よお」

「ジグ」

そう言って彼は家を後にして旅に出ようとする。

「旅に……でるのか？」

ノマルが家を出ようとする少年に話しかけてきた。

「とめんなよオ、ジジイ」

「とめぬさ……奴とお前はそう言う所で似ておる」

ノマルは何かを懐かしむような顔をしている。

「俺が返ってくるまでにジジイは死んでるかもしれんなア」

「そしたらお主の帰ってくる場所はないぞ」

「場所……か。いずれは帰ってくるさ。このジムにな」

「私の保険金はちゃんとお前を受取人にしとるでの」

「へっ。俺が家を持つのはこのジムのジムリーダーになった時。その時だ」

そう言って少年はその場を去る。

「親に子は似るものだな。私も奴がジムリーダーになるのを見てみたかったわ……」

ノマルは少年を見ながらそう呟く。

「あのトウガと言う少年がすべての始まりとなった」

ノマルはそう言ってポケモンセンターを見る。

「あの少年があやつを動かし、今を進めようとしておる」

空を見上げる。

「欲に忠実は【人間のさが】と言っものじゃ」

歩いて行く少年を見る。

「頑張るのだぞ。レイタよ」

ノマルは旅ゆく少年レイタをただ見つめ続けるだけであった。

続く

## 第8策・1 思いの森の

「目的は達成されたようには思えぬが次の町へ行くことになる」

「カナズミシティか」

「都会って感じの所らしいですね」

三人は荷物の整理をしながらそう言っている。

「そう。そこに行くには森を通る必要がある」

《いやね、虫が多そうで》

「虫が多かろうと何かろうと突き進むのみだ」

「別にそんなの気にしねえし」

「そもそもポケモンは虫とかでできませんから」

演出上出さないといわれていたがこの頃は元から存在しないと言われ始めた

だとすればアニメなどでみんなが食べている海の幸とは……

「まあそんなことはどうでもいい。あそこはケムツソ以外のむしポケモンはあまり生息していないようだ」

「森なのにですかア」

「別にどうでもいいけどな。レンがいれば楽勝じゃん」

「火に弱い奴らばかりでしょうし」

「ナマケロもいるのだから」

そんなこんなで一行はトウカのむりに向かった。

「なんかむついな」

「ああ、むつい」

「むついです」

むついとは何だと思うだろうが以前マガジンで見た記憶のある単語だ。

なんとか町内会という作品だったはず。

「助けてくれえええ！」

助けを呼ぶ声が前から聞こえてくる。

「面倒な声が聞こえますよ」

「たしかにな。こう言う所で人を助けるのは正義馬鹿だけだ」

「そうそう。ただの偽善者です」

そう言って声が聞こえる方から離れて先に進むトウガ達。

【トウカのもり：カナズミ側出口付近】

「出口です」

「面倒事に巻き込まれなくてよかったな」

「その通りだ。目的通りに進まぬなどいいことはない」

そう言っって一行はカナズミへと向かった。

後編に続く

## 第8策・1 思いの森の（後書き）

短くてごめんなさい！  
忙しくて……

## 第8策・2 設置の不備（前書き）

感想お待ちしてるんですからね！



## 第8策・2 設置の不備

【カナズミシティ】

「ここがカナズミか」

「確かにミシロタウンに比べれば都会ですね」

ナギサは周りをきよろきよろと見る。

「やめろよそんなに周り見るの。田舎もんだと思われるだろ」

「そうだ。私の目的の妨げとなるかもしれない」

「あ、いや、すみません。昔見た所より田舎に見えて……あれ？」

その言葉を聞くとトウガは疑問の表情になる。

「昔？ お前たちは4年間はミシロとコトキ以外には行っていないはずだが」

「え？ あ、そうですね……あれ？」

「そう言えばあたしたちって記憶喪失だっけ」

「そうでしたね。なぜ忘れて……」

そもそも二人はなぜ空から降ってきて記憶喪失だったのか。それはいまだ謎。

「……」

（記憶か……）

「そんなことはどうでもいい。早くポケモンセンターに部屋を取り

に行くぞ」

そう言つてトウガは一人ポケモンセンターへ向かった。

「あ、お兄様」

「ま、待ってくれよ兄貴」

そして二人も後についていくように走った。

### 【ポケモンセンター】

「なに？ 部屋がないだど？」

「はい。今日に限つて泊まりに来るトレーナーが多く……」

「くつ。他に泊まれるところはないのか」

トウガは受付の机を叩きジョーイに問い詰める。

「あ、そうですね……あ、そうそう。あそこなら貸してくれるかも」

「あそこ？ それはどこだ」

「少しカナズミから離れますけど。サン・トウカという花屋のすぐ横にある宿屋です」

「宿屋？」

そんなものがあつただろうか。

トウガは少し思い出そうとする。

「あんまり目立たないんですけど。三姉妹が経営しているんです」

「三姉妹？」

「ええ、親に先立たれた三姉妹なんですけどね。あなたと近い年の女の子たちですよ」

「ほう……」

（親を亡くして働く姉妹か……面白い）

「ならば行くぞ。そのペンションに」

「え、森の近くにもどんの？」

「そんなこと言っていないで。戻るらしいですから戻りましょう」

そう言って一行はトウカの通りの方向へ戻ることとなった。

続く

## 第8策・2 設置の不備（後書き）

感想を待つてゐる小説には感想を書いているが  
その人たちで自分の小説は読んでくれてないのかな。

ところでホウエンのサン・トウカの三姉妹の名前ってなんでしたっ  
け。

裏第8策 双方は通行（前書き）

感想募集。

## 裏第8策 双方は通行

【トウカのもり】

「あの野郎はもう先に行きやがった見てえだなあ」

トウカのもりをうるつくレイタ。

あの野郎ことトウガを超える男になるために。

一日ほどトウカのもりを寝ずに散策していた。

「あいつより強くなる前にあいつに会うつつうのもなあ」

もう一日散策するかとトウカ方面近くに帰ろうとしたその時。

「助けてくれえええ！」

「な、なんだあ？」

前から突然男が走ってきた。

「助けてくれえ！」

「スバメの群れだあ！？」

突如スバメの群れに襲われている男がレイタめがけて走ってくる。

「なんでこっちにきやがんだあ！」

「助けてくださいいいい！」

レイタの言葉も聞かずに男はレイタめがけて走ってくる。

「めんどくせえ！ アクセラ！」  
「マッス！」

レイタが呼ぶアクセラとはあのジグザグマが進化したものだ。  
彼らは別に弱いわけではなくもうすぐ出進化するレベルだったのだ。

「やっちまええ！」  
「マッアアアス！」

突然あたりに波が現れスバメたちは波にのまれ行く。

「へっ。なみのりにのまれて死にな雑魚があ！」

ちなみに祖父の友人にもらった秘伝マシンで覚えたのだ。

「たつく。閉じこもりきりもいいがそろそろポケセンにいかねえとなあ……」

そう言つて仕方なくカナズミの方へと向かう。

ガシッ

「助けてくれてありがとうね」  
「んあ？ そう言えばそうだったなあ」

助けを求めていた男がお礼を言ってきたが  
レイタはそのことをすっかり忘れていた。

「いやあ、私の名前はシツというんだ」  
「そうか、じゃあな」

話を無視してカナズミに向かおうとするレイタ。

「いや、ちょっと話を聞いてくれよ」

「いや、俺は急いでるからあゝ」

そして無視して先に進もうとする。

ガシッ

「私はね、ポケモン解放会という会の副会長だね。会員は10人なんだけどさ」

「あーはいはい。わかったわかったあゝ」

ブウン！

「行くぞアクセラ！」

シツを振り払いレイタはカナズミ方面へとアクセラとともに駆けて行った。

「まだお礼もしてないのに……あ、カイナへの定期船に乗らないと！」

そう言ってシツはトウカ方面へかけた。

続く



## 裏第8策 双方は通行（後書き）

カイナへの定期船とはハギ老人が運営する定期船である。

## 第9策 殺意の揺れ（前書き）

あ、みなさん。

スラムツパギー

待っていてくれた読者の皆様お久しぶりです。  
始めてみてくれる方

第一部から見てください。

今日はじめてみて第一部の一壊この話まで見続けた人  
お疲れ様です。

この話を見て一から見るか考えた人  
第一部とは毛色が違いますよ。

そしてこの挨拶は後付けなのでこれ以下と  
かみ合わない感じですのでごめんなさい！

ではみなさんスラムンマラム。  
ん？ スラムンマラムだっけ？

修理に出したパソコンが返ってきた。  
初期化してデータが全部消えていた。  
バックアップしていなかったのでもはや言うことはなかった。

修理に出している間は仕方なく昔使っていたノートパソコンを使っていた

4月の28日に出た宇宙が舞台のシミュレーションゲームをしていた。

とある国を攻めていたらグロいことになった。

というわけで次は北から攻め西に攻めてクリアした。

気が付いたら二週目は50ターン削減でクリアした。

だがノーマルEDしか見てない。

なんか通常とは違う

編とか出てきた。

吐き気を催し夜寝れなくなった。

酒も飲める歳になろうというに……

ということで気晴らしにスパロボをやったらもう六週目か……

あれ、これ前書きだったっけ……

## 第9策 殺意の揺れ

「ここがペンションですか」

見上げるほどでもない大きさのペンションを見ながらナギサはそう言う。

「何か小さいなあ」

ヤヨイは正直な感想を言う。

「隣の花屋のついでという感じの建物だせ？」

ヤヨイとナギサがペンションについて話している。

「そんなことはどうでもいい。とにかく入るぞ」

トウガは二人の言い争いを抑えペンションに向かった。

「うゝ」

「なあ、兄貴。あれ……」

受付の所で小さい女の子がよだれを倒しながら寝ている。

「みょうたべられにやいによゝ」

「しかも典型的ですよお兄様」

ナギサはトウガの腕を掴んで少し揺らしながらそう言う。

「私たち位の少女たちが運営していると言っていたからな」

「親にも先立たれてたんでしたね……」

「……」

その言葉を聞くとトウガは少し顔をしかめた。

「まあいい。とにかくあの受付を起こすぞ」

そう言つてトウガ達は受付の近くによる。

「おい。起きろ」

トウガは受付の女の子の肩をつかみ揺らす。

「んにゅーにゃんですか、お姉ちゃ……なっ!？」

「どうやら現実を見たようですね」

「夢を見てたのに現実を見せられるって厳しいねえ」

現実には夢を壊すのだろうか。

「おつ、お客さんですか！ お、お姉ええちやあああん!」

どたどたと受付の女の子はカウンターの向こうにあった扉から奥へ向かっていった。

「どうやら隣の花屋とつながっているようだな」

「というかあまりお客さんが来ないみたいですよ」

「いろいろ大丈夫なのか？」

「意外と大丈夫な場合が多いと思うがな」

「も、もうしわけありませんでした」  
「いや、気にせんよ」

トウガと同じ年ぐらいの女の子を引き連れて受付の女の子は帰ってきた。

「わ、私がこのペンションのオーナーをしていますノリコです」  
「う、受付のナオコです！」  
「ペンションのほうにお客さんが来ることはめったになかったので……」

女の子たちはあたふたとしている。

「む……」  
「ん……」  
「む？ どうしたお前たち」  
「いや、ねえ……」  
「なんでもないです……」

ナギサとヤヨイは不機嫌だ。

「揺れてますよ、あの尼」  
「死ねばいいんだよ……」  
「お前たち……」

ノリコに殺意を向ける二人を見ながらトウガはやれやれという表情

をした。

続く

## 第9策 殺意の揺れ（後書き）

感想はお待ちしております。

そういや前書きのゲームの発売会社からいよいよあのシリーズの続編が出るようですね。

どれだけ戦国を周回プレイして待ったことか……

しかし公式のキャラ紹介……

これは……ちゃんと娘なんだよな？

いやだよ他の人のとか……

あと付いてくるのとほかに勝手に来る人もいるようで……

しかし確実に来るであろう再世編……

来る可能性の高いOG3……

そして再び落ちるバイトの面接……

そして来週の日曜のバイト面接……

とにかく頑張るっきゃないのか！

そっぴいこの頃ポケモンはアニメのCM以外見てねえや！



## 第10策 もはやの相部屋（前書き）

後40分早く書き始めればよかった……

なんかいろいろあつて書くのに一週間かかった……

もう何もすることないかな……

そついや友人が真剣恋愛してくれろってさ。

また当分更新しないかな……

## 第10策 もはやの相部屋

「こちらが今日お泊りになっていたく部屋になります」

ノリコの案内により止まる部屋に案内された。

「って二人部屋じゃないか！」

「二人しか寝られない部屋ってことですよね！」

ヤヨイとナギサは突然叫ぶ。

「もはや何も言うことはないが……」

そう言ってトウガは部屋を後にしようとする。

「ちょっとまってください！」

「ここは私とナギサのどちらかと……」

「もはや何も言うことは……ない」

そう言っただけでトウガは普通の人には見えない速さで首を軽くたたき。

「ふにっ！」

「くなっ！」

そう言っただけで二人は倒れた。

「もはや定番すぎる流れなのだが……」

《定番も何も確実に……》

「もはや何も言うな……」

もはや何も書くことはない。

「お姉ちゃん！」

ドタドタとナオコが走ってきた。

「もう一人泊まりたいという人が来ちゃったよー！」

「もう一人？」

「もう止まれるようにしてあるお部屋ないよ？」

「二人部屋が二つだしね」

「もはや言うこともないだろうが……私と相部屋でいいのではないかな」

その言葉を聞くとナオコが笑顔になる。

「よろしいんですか？」

ノリコがトウガに少し笑顔を聞く。

「もはや何も言わないが……笑顔で聞くものではないと思うが」  
「あつ。す、すいません！」

ノリコはあわてた顔をして頭を下げる。

「いや、いい……とにかく相部屋の件はOKだ」

「はい。では相部屋になることをおつたいしてきます」  
「きます」

そう言って二人はドタバタと受付に向かって走って行った。

「このペンションは親の遺志を継ぐために経営しているにすぎないようだな」

《維持費や生活費の稼ぎは花屋つて所のようね》

「親か……そう言えば私は死んだ父親の顔も覚えていないな……」

《私だって覚えてないわよ。知らないうちにいなくなっちゃたんだもの》

「ふむ」

《だって捕まえられちゃったもの》

「そうか」

《幸せかどうかはわからないけど。私みたいにあう人と出会えたのかは分らないけどね》

そう言つとトウガとミコトは黙った。

「おまたせしました」

《どうやら相部屋の人が来たようよ》

「そのようだ……む？」

「ああ？」

ノリコとナオコが連れてきた相部屋の相手は見覚えのある人物だった……

続く

## 第10策 もはやの相部屋（後書き）

もはや何も言うことはないけどさ。  
感想とか募集中。

追記

予約掲載したためこの小説が完成したのは0:38分  
そのため40分早く書き終わってればなど言いつてるわけすね。

## 第11策　その答え（前書き）

バトルなんて起きないけどさ。

彼らには欲がある。

それを今戦つても埋められることはないから。

## 第11策 それの答え

「んでお前がここにいんだあ？ もうカナズミについててもいいころだろつよお」

「それには理由がある。しかし貴様もやはり旅に出ていたのだな」  
「やはりだあ？」

トウガのやはりという言葉にレイタは疑問を感じた。

「弱者だからな……私もお前もだ」

「弱者だあ？」

「そうだ。私もお前も弱者にすぎない。だから欲がある」  
「欲ねえ……」

レイタにも思い当たる節はある。

トウガに負けた時に強くならなくてはならないという欲に駆られた。

「弱者は弱者だからこそ欲につられる。【人間のさが】と言うものだ」

「なんか文学的なこと言われても俺には分からないねえ」

「ふ、人類すべてが弱者なのかもしれぬがな」

「だからわかんねえよ……たくよお」

レイタは呆れる。

自分を倒した男はこんな男だったのかと。

文学的で意味不明なことを言う奴なのかと。

「意味不明な奴だぜえ」

ただレイタの頭がよくないだけかもしれない。

「あのくそろそろお部屋にご案内しても？」

ノリコが恐る恐ると二人に尋ねる。

「む、私は構わないぞ」

「別に俺もいいぜえ」

「で、では」

そう言つてノリコは二人部屋に二人を連れていった。

「二段ベットかよお……」

「別に私はどちらでも構わんのだが」

「なら上に行かせてもらうぜえ」

そう言つてレイタは上のベットに乗る。

「ふむ。なるほどな」

「何かなるほどなんだあ？」

「いや、なんでもない。とくに話すことももうないだろう。時間も遅い、今日は眠ることしよう」

そう言つてトウガもベットにはすり眠りに就いた。

「……俺あこの男に勝つために強くなりてえんだよなあ……」

レイタは小さくそう呟いた。



「お兄様と眠ることができない夜は寂しすぎました」  
「兄貴がいないと寝た気がしないんだよなあ」

次の日の朝のナギサとヤヨイの会話である。

「お前たちというものは……」  
「ちっ」

レイタが舌打ちをしている。  
もはや何も言うことはないだろう。

「朝食をいただいてカナズミへ向かうぞ」  
「はい」  
「おう」

トウガの言葉にうなづく二人。

「……」

そして何事もないように黙りながらテーブルに座るレイタ。

「お前も向かうのだろうか？」  
「ああ？」  
「一緒に行かないか？」

トウガは少し笑ったような顔でレイタに答えを問う。

「んでてめえと行かなきゃなんねんだよお」

「行き先が同じだからだ」

「別にいい。俺はあトウ力の森に戻るからよお」

「そうか……」

そう言つて二人の会話は終わる。

《恥ずかしいのかしらね彼》

「優しさを知らないのかも知れんがな……だからこそ求めか」

トウガはただそう呟きナギサとヤヨイとともにペンションを後にした。

続く

## 第11策　その答え（後書き）

てな訳で感想募集中ですよ。

「三姉妹の次女が出てこうへんやんけ！」  
という人がいるでしょうがまあまだペンション出ただけだから。

てな訳で待て、次回！

ちなみに貸してもらえるのは今日の午後に延長となった。  
素で持つてくるのを忘れたようだ。  
出会って数カ月ではこんなものか……

裏第11策 - 1 俺は俺（前書き）

もうこの頃いろいろ大変だね。

活動報告にも書いてるけどさ。

あ、感想もらえると嬉しいのでよろしくです。

裏第11策 - 1 俺は俺

「あん野郎はカナズミに帰りやがったかあ」

レイタはトウガ達が見えなくなったので自分もペンションを後にしようとした。

「なら、あいつらとはちあいたくもねえし……トウカのみにでも戻るかねえ」

そう言つて荷物を持ちトウカのもりへ向かう支度をした。

「んあ？」

ペンションを出た途端隣の建物が少し騒がしかった。

「なんかもめ事かよ。めんどくせえ」

レイタは気にせずにその場を後にしようとした。

「お前の店で買った花すぐに枯れたじゃねえかよ！」

「い、言いがかりです！ あなたの管理が悪いからですよ！」

「ああ？」

花屋で店番をしていたレイコはクレーマーに文句を言われていた。リピーターなどではなくこの間一度来ただけの客だ。

「まったくよ。これならカナズミの高級花屋で買ったほうがよかったぜ」

「っ！ まさかあなたは！」

「あ？ 何なんですか？ お前の店よりいい店紹介してるだけだぜ？」

「っ！ あなたはっ！」

ここで反抗してもレイコはまだ子供だ。

大人のそしてさらに男である相手を殴ってもあまり意味はないだろう。

『ガヤガヤ……』

周りの客もどうしていいのかわからないような状況だ。

常連の客というのもし少し歳の行った人たちばかりだ。どうするということもできない。

「おら、買った金返せ！ 後俺の心を痛めた分の慰謝料もなあ！」  
「く……っく……」

そう言っつて男はレイコの服の首元を持ち上に持ち上げる。

「この……くっ……」  
「まあ店の責任者はまあてめえじゃないようだな。責任者が来るまでこのままかなあ」

ノリコとナオコはペンションにて後片付けをしているためにここにはいない。

そのため今のこの状況を知らない。

「なんでえ周りのやつらはよあ！　こんな店で買った花なんですぐにダメになっちまうぜえ？」

偶然花を買いに来た若者などはこの男が行動に出てからすぐに逃げている。

常連客もただ見ているだけしかできない。

もはや助けようとする者はだれもいはいない。

「んなこたあねえ」

「あ？」

「駄目になっちまうのはおめえだあ！」

レイタは男がしていた光景を見ていた。

（クレマーってやつか。　かわりたくねえなあ……）

そう言つてレイタはその場を去ろうとしたが  
男とレイコのとある会話がレイタの耳に入った。

「まったくよ。これならカナズミの高級花屋で買ったほうがよかったぜ」

「っ！　まさかあなたは！」

「あ？　何なんですか？　お前の店よりいい店紹介してるだけだぜ？」

「っ！　あなたはっ！」

その会話を聞いた時レイタの心に何かが響いた。

（弱い奴をつぶすってやつかあ……）

そんなとき少し前の自分を思い出す。

トウカジムの挑戦者である弱い奴らをつぶしていた。

最強であるトウカに雑魚が挑むなど許せなかったからだ。

でもそれはただ弱いものをつぶして楽しんでいるだけだった。

（他人の視点から見えてやっとなるってことかよお……）

自分はあの男と同じだ。

弱いものを潰し、最強を守るということに固執していた。

（……そしてこの店のやつも）

その時レイタの心に何かが生まれたようだ。

（しかたねえ。やってやろうじゃねえか！）

そう思った時にはすでにレイタの体は男のほうへ向かい腕をつかんでいた。

「んなこたあねえ」

「あ？」

「駄目になっちまうのはおめえだあ！」

後半へ続く



裏第11策 - 1 俺は俺（後書き）

この小説を何度か見返すと誤字が見つかることがあるが  
とりあえず報告があるまで無視している。

まあ、別にそれでいいならいいかなって……

裏第11策・2 無知はお前（前書き）

この頃諸事情で忙しいんですがね。

少し時間が空いても手が動かないんですよえ。

すでに第三部の構想が思い付き始めたというのに。  
そこまでが書けないとは……

裏第11策・2 無知はお前

「誰だお前？」

「隣のペンションのお客ってやつだあ」

「その客がなんだあ？ヒーローのつもりかよ」

その言葉を聞いてレイタはにやりと笑う。

「違うなあーペンションで朝食とるにも隣がうるさくて仕方ねえんだよお！」

「ぷっ。はあっはっははー！ 隣の貧乏宿に泊まるほど落ちぶれたやつがいるとはなあ」

「う、うちのペンションはそんなっ！」

「てめえは黙ってるや！」

『ドカツ』

「がはっ」

「……落ちぶれてんなあてめえはよお」

「んだとお？」

「屑は屑だって言ってるんだよお！」

「てめえ！ 舐めやがつて！」

そして男は腰のボールに手を当てる。

「ポケモンバトルだ！」

「いいぜえ！ のしてやるよ！ この俺がよお！」

「行きやがれポチエナあ！」  
「チナア！」

男はポチエナを繰り出した。

「へっ」  
「何を笑っていやがる！」  
「即潰しだ！　行きやがれアクセラ！」

レイタはボールを投げる。

「マツースグ！」  
「なんだ、弱そうなポケモンじゃねえかよ」

男はマツスグマを見てそう言う。

「無知ってやつは恐ろしいもんだあ」  
「どういうことだてめえ！」  
「へ、教える必要すらねえよあ」  
「なんだと！　とりあえずバトルだ！」

男はそう言うつとポチエナに命令をし始めた。

「ポチエナ！　たいあたりだ！」  
「エナア！」  
「よけるアクセラあ！」  
「マアス」

アクセラはよける。

「ちょこまかと！ かみつくだ！」

「エナア！」

「よけるアクセラあ！」

「マアス」

再びアクセラはよける。

「ちょこまかちょこまかとお！ とにかくやってしまえ！」

「エナア！」

「戦法も何にもあつたもんじゃねえな……とにかくよけておちよくつとけえ」

「マアス！」

そしてアクセラはポチエナ攻撃をことごとくよけまくる。

「きいいい！ 逃げまくるだけしか能がないのかよその雑魚ポケモンは！」

「……はあ。無知つてのはおつそろしいねえ」

「雑魚がいきりやがつて」

「はっ……終わらしてやれ。アクセラ」

レイタが鼻で笑い、アクセラにそう命令したとき。

「エナア！？」

そこには倒れたポチエナと勝ち誇った顔をしたアクセラしかいなかった。

「そ、そんなバカなあ！？」

「俺の勝ちだ。さつさと土下座して帰れ」

「く、く、こんなの認めねえ！」

そう言つて男はレイタに殴りかかった。  
が。

『パシッ』

「無知は無知なんですかあゝ？ 格下くんよあゝ」

「ひっ！ ひiiiiiiiiい！」

そして男は倒れていたポチエナを抱えてその場から逃げだした。

「はっ……めんどくせえ戦いだつたぜ」

「あ、あの」

「あん？」

「助けてくれて……」

「はっ！ 朝食とるにも隣がつるさくて仕方なかったただけだあ」

そう言つてレイタはその場を去ろうとする。

「お礼を！ 何かお礼を！」

「ふっ。ならよ。当分あのペンションを拠点としてポケモンの修行をする。だから飯の値段を少しまけろあ」

「あ、少しつて……」

「10円位安くすればいいだけだあ」

「え？」

「さて飯にすつかあ」

そう言ってレイタはペンションに戻って行った。

「はぁぁぁ……」

レイコはただじっとレイタを見ているだけだった。

「あれ？　なんか騒いでたみたいだけど何があったのかな？」

「あら？　レイコどうしたの？　ぼーっとして……おい？」

今来た二人は何が何だか分からなかった。

続く

裏第11策・2 無知はお前（後書き）

感想お待ちしております。

そしてこの頃自分の小説を読むということをして  
昔のと比べると書き方がだいぶ変わりすぎていた……

名前「」

って書き方だったんだよなあ昔。

そんなの小説じゃねえとかさんざん言われて変えたんだよなあ。  
懐かしいなあ……

成長できてるのかなあ……



## 第12策 何かの事件（前書き）

サブタイトルそのまんまやないか！

後感想大募集……

この頃忙しいぜ……

## 第12策 何かの事件

【カナズミシイ】

「お兄様。いよいよジムに挑戦ですね」

「いよいよって言うけどさ。結局のところここに戻ってくるのに時間がかっちまったぜ？」

「まだ午後3時だ。誰かが挑戦していようとそろそろ終わるころだろう」

ペンションからカナズミへと戻ってきた三人。

「とりあえずジムに行きましょうか」

「ジムはあつちに……」

『ガゴッ！』

「む？ 今爆発音のようなものが聞こえたようだ……」

「何かあったんですかね？」

『ワァーオァー』

「逃げまどう住民たちですね。これはチャンス」

「ふ、何があったかは知らないが私が英雄になるために利用させてもらおう」

そう言ってトウガ達は騒ぎのほうへと向かって行った。

「お父様っ！ お父様っ！」

女の子が倒れている男性のそばに座りこみ泣いている。

「さて、騒ぎの現場はここか……」

「何があっただんですかね」

何があつたのかは知らないが倒れている男のそばにいる女の子にトウガ達は近寄る。

他のヤジ馬は女の子にも近づこうともしないので容易に話すことができた。

「何があつたのかな？」

「お……お父様が……お父様が……」

「お父様がどうしたんだよ」

「何者かに何かをされてそれで！」

「何者かにか……」

「それでその男は？」

「あっちに行つて……追いたいけど……お父様がっ！」

そう言つて女の子は街の上方向を指さした。

「あっちか……よし、行くぞ」

「あいあいさー」

「了解」

そう言つてトウガ達は指の差されたほうへと向かった。

『ざわ．．ざわ．．』

「おい、さっきのやつら……」

「犯人を追って行ったんじゃない？」

『ざわ．．ざわ．．』

「危険じゃないか……？」

「この街交番ないから……」

『ざわ．．ざわ．．』

「そもそも、なんで交番ないんだ……」

「デボンも頼るほどの大警備会社がいるからだろ……」

『ざわ．．ざわ．．』

「ならその警備会社は何をしているんだ……」

「そついや、なぜ……」

『ざわ．．ざわ．．』

『ザッ』

「ここで何が起こったんだろうか……」

続く

## 第12策 何かの事件（後書き）

アニメで確認したんだ。・・はちゃんと2つが正解っ！  
そのはずっ！ アニメの二期しか見てないけど確実にっ！

### 第13策 - 1 無口の男（前書き）

なんかコラボに参加することになりました。  
詳しくは活動報告で。

第13策 - 1 無口の男

【カナズミシティ 北】

「……」

男が一人段差の上に立っていた。

「……」

その男は何もしゃべらずその場に立っているだけだった。

「……」

『タッタタッ』

「ふむ。すでにりゅうせいのたきにまで付いていると思っていたが……」

トウガはサングラスに手を当てながら男を見る。

「どうやら私が速かっただけのようだな」

トウガの後ろにはナギサ達の姿はない。

「さて、ここまで来たからには逃げられんぞ……観念して私の名声の糧となるがいい」

「……」

男は腰のモンスターボールに手を当てる。

「逃げられぬとわかったらバトルか……」

そう言いながらトウガも腰にボールを当てる。

「いいだろう、受けてやろう。行くがいいレジ！」  
「タアツ」

そして男もボールを投げる。

「……」  
「コイルコイル」

男が繰り出したのはコイルだ。

「ふ、コイルか……」  
「……」  
「何もしゃべらぬか……」

何も言わず男は手を挙げる。

「コイル！」

そしてコイルが動く。

「戦いの開始か！」

そして戦いの幕が開ける。



後半に続く

### 第13策 - 1 無口の男（後書き）

トウガ君のすさまじい運動能力の一部が出ました。

男がいたところとカナズミは結構離れています。

運動能力の高いナギサ達ですらかなり時間のかかる距離です。

## 第13策 - 2 無言の男（前書き）

ポケモンはお久しぶりです！

他の小説更新してましたね！

あとポケモントレーナーの名前募集中です！

後コラボとかしてくれる人も募集中です！

## 第13策 - 2 無言の男

「……」

「コイル!」

男は何も言わないのにコイルはたいあたりを仕掛けてくる。

「無言で命令指示? あの手……」  
「ベイツ!」

そしてレジはたいあたりをよける。

「……レジ。ひのこだ」  
「ツウーベイ!」

そしてコイルの背後からひのこをはく。

「……」  
「コイル!」

そしてコイルもよける。

「またしても無言で指示を……」

男が何も言わないでもコイルは的確に攻撃を仕掛けてくる。

「これでは雑魚ならすぐにやられているだろう……」

トウガは頭に手を当てそう言う。

「コイル!」

そしてコイルはソニックブームを飛ばしてくる。

「ベイツ!」

「その程度ならば……」

レジはソニックブームを食らうがそれほどのダメージは受けていない。

「レジ。つめときだ!」

「ベイツ!」

そう言いながらレジはつめときをする。

「……」

「コイル!」

その時コイルはレジをロックオンする。

「これは……レジっ!」

「ベイツ!」

その瞬間。

「コイル!」

コイルからでんじほつが発射される!

《ガギゴオーグウスギイ!》

その攻撃はレジに命中した。

「……………」

「コイルコイル……コイル?」

勝利を確信して飛びまわっているコイルは何かに気がついた。

「…………馬鹿め。もとよりドラゴンにでんきは聞きにくい。そして」  
「ベイツ!」

「まもるをしていたレジにはダメージは皆無だ…………そして…………」  
「ベエエエイ!」

おろおろとしているコイルにレジはかわらわりをくらわせる!

《きゅうしょにあたった　こうかはばつぐんだ》

「コ、コイル……………」

そしてコイルは戦闘不能となった…………

「……………」

「無言で去ろうとしてもだめだ」

男が逃げようとしていたが既にトウガは背後にいた。

「どうやって言葉も発さずに命令を出していたかは知らないが……………」

「どうやら始末には失敗したようだな」

「……」

《ブンッ》

男は無言で殴りかかってくる。

《ガシッ》

「最後は自分でか……む？ この感触……」  
「……」

《ガキヤッ》

音がした途端にトウガが掴んでいた男の腕は外れた。

「義手か！」

そのまま男は走り去っていくが……

「追いつけないとも思っていたか！」

しかし英雄<sup>トウガ</sup>からは逃げられない。

「貴様は私の糧に……」

《カチャカチャカチッ！》

「む？」

《ブシウウウウ！》

「ぬおっ！」

その時男の首は空に向かって飛んで行った……  
そしてその場には男の体だけが残った。

「サイ……ボークか……」

「お兄様」

「兄貴」

「む、今来たか……」

男が飛んで行ったあとに二人が走ってやってきた。

「事件はこのように解決したぞ……このようにな……」

「うわっ！ 首なし！」

「こんなの持って帰ったら英雄どころじゃないですよ……」

「いや……これは……」

慌てて混乱する二人を見て何も言えなくなるトウガだった……

続く



第13策 - 2 無言の男（後書き）

キャラが少し違うような気がしますねトウガ君。  
彼だってまだ10代ですよ……

さて……

## 第14策 ジョウトの男（前書き）

連日投稿って言うかかなり短いですけど。

## 第14策 ジョウトの男

「と言うわけで、これが今回の犯人……の残骸だ」

いろいろあつたがトウガは犯人の体を持って事件の現場に戻ってきた。

「く、く、首が！」

「こいつは人間ではないようだ……」

首の方を向け人間ではないことを見せる。

「き、機械の人間……」

「き、機械人間とかすごいテクノロジーだ……」

《ざわ・・ざわ・・》

（あいつに連絡が取ればこいつのことがよくわかるかも知れんが……）

トウガはとある一人の男を思い浮かべる。

「お兄様。ホトラヤさんに連絡は取れないんですか？」

「旅に出た時から定期的に連絡はしているのだが……」

覚は頭をかく。

「ホトラヤってあれだよな？ あのにけすかないジョウト訛りの……」

「ヤヨイ。ホトラヤさんは私達の資金提供者ですよ……」

ヤヨイの言葉にナギサは少し怒ったように言う。

「いや、そこまで怒ることは……でもさあたし的にはあいつはなんか……」

「いけすかない奴だと言うのはわかりきったことだ。だがあいつは話のわかる男ではある」

そう言つてトウガはポケナビを取り出す。

「ポケギアにもポケナビで電話がつながるなんて不思議だなあ」

「ヤヨイ……あなたつて人は……」

ナギサはヤヨイの頭の悪さに頭を抱えた。

《ピピピピピピ……ピピッ》

「む、つながるとはな」

「繋がるとはなやないで、トウチャン」

「私はお前の父親ではない……それにお前の方が年上だ」

「相変わらずノリ悪いのおトウガ」

「まあ、いい……なぜ今まで連絡がつながらなかった」

「いろいろあつてん。機械との戦いとかな」

その言葉に少し顔をしかめる。

「機械との戦いだと？」

「あ、その言いよう。そっちにも出たん？」

「その通りだ。いったい何なんだ……」

「まあ、ようわからんって所やな。こっちもこっちでいろいろ忙しいからまた連絡取られへんようになると思うわ」

「そうか……」

「まったく。わいとわいの大切なことの二人旅の邪魔であゝ」

「二人旅……そうか、例の娘だな？」

「ひつどい言いようや……まあ、大事な娘やよ」

「ふ、ロリコンと言うほど年は離れているがそれ以上だからな貴様は」

「へっへっへ……まあそれもそや……おっとそろそろきるで……」  
「ああ、またな」

《ピッ》

「どうでしたか？」

「いや、調べるのは無理だな……」

「無理？　なんでよ。あいつなら……」

「いや、無理だ。あちらにも同じものが出ていたらしい」

「「あつちにも？」」

二人は驚く。

「まあ、でてきたら今度は捕まえるさ……出てくればな……」

トウガはそう言ってポケモンセンターへと向かった。

続く

## 第14策 ジョウトの男（後書き）

ホトラヤという名前には無理があつたか……

いや、あの名前の記事に来てくれた人の名前を見ながら  
考えて組み合わせた結果なんですけどね。

第15策 これからのこれから（前書き）

待たせたのだろうか……

実は待っている人なんていなかったんじゃないだろうか……

## 第15策 これからのこれから

【ポケモンセンター】

「今日襲われた男性はこの街のジムリーダーだったと？」

「ええ、結構なお歳の方でした。そろそろ娘さんとリーダーを変わるという話が」

「娘……あの女か……」

人だかりの中で男性を抱きかかえお父様と言いながら泣き叫んでいた少女を思い出す。

「実力があれば年齢は関係ないということか……しかしそれだとジムには挑戦できない」

「ええ、リーダー交代の手続きも少しかかるということです」

「けっ。迷惑だなあ今回の犯人も」

ナギサの言葉を聞きヤヨイが少し怒ったように言う。

「……犯人を捕まえてきたということでは知名度が上がったよ  
うだ」

「いい意味ですけど……でも謎も増えましたね……」

「ホトラヤも使えねえつつうんだから謎は謎のままだな」

ヤヨイは地団駄を踏む。

「今日のヤヨイは少し不機嫌だな……」

「私もですけど朝はお兄様と一緒に起きられませんでしたし。それ



にこの事件です」

「いやなこと続きで気が滅入っていると云うことか」

トウガは頭に手を当てる。

「でも今日は部屋が取れてよかったですね」

「今日の事件のせいでこの街から離れていったものも多いようだ…

…」

主にジムに挑戦に来たトレーナーや観光客などだ。

昨日まで満員が普通だったポケモンセンターにも簡単に空き部屋ができた。

「それで……どうしましょうか」

「次の目的地か……」

次のジムへ向かうにはカナシダトンネルを超えてキンセツに向かうのが一番いい。

「しかしトンネルは落盤事故により通れない」

「となると……」

「りゅうせいのかきをこえ回り道になるがキンセツに行くの？」

「ちょっと待ってください。フエンに先に行った方がいいのでは？」

姉妹が別々の目的地を言いだした。

「フエンにはロープウェイを使えば簡単に行けますよ」

「キンセツの方がいいじゃねえか！ 都会なんだぞ！」

『ぎゃん！　ぎゃん！』

「お前達……」

目の前の惨状にトウガは頭を抱える。

「……とにかくハジツゲタウンに向かう。話はそれから……」

そして時は過ぎていく……

続く

## 第15策 これからのこれから（後書き）

短すぎる……

この文書くのにどれだけかかったか……

私ってやつは……

デイスガイア2（PSP版）面白いよおおおおお！

積みゲーたまりすぎやああああ！

小説書く気力がええへんのはこのせいやああああ！

神の風終わったしトウのアナザーも終わってもまだ積があるなんて

……

## 第16策 上りの下り（前書き）

9月……いや、休みなかつたし別に何もないか……  
そんなことよりラインバレルの漫画版はアニメ版にはない  
かなりの面白さがあるなあゝ

## 第16策 上りの下り

【りゅうせいのたき】

「はあゝ疲れるよなあゝ段差を登るつてのはさ」

「ヤヨイは体力バカなのにするさいことを言いますね」

「ああにいゝ？」

「馬鹿をやっているな。先に進むぞ」

姉妹喧嘩を素通りして先に進むトウガ。

「ちよ、兄貴」

「お兄様。くつ。この愚妹のせいで」

「なつ。ナギサが愚妹だよ！」

二人はどちらが愚妹か言い争う。

二人は記憶喪失でありどちらが姉で妹かは覚えてはいない。  
どちらが妹かは分からない……

「……………」

トウガは無言で先に進む。

「兄貴黙っちゃった」

「なんか寂しいですね」

静かなのが嫌い。

二人はまだ10歳だ。

「  
……  
」

何も言わず先に進む。

「  
……  
」

進む

「  
……  
」

進んでいく。

「  
……  
」

進んで……

『ドガシギッ!』

「むっ  
」

「うおわっ!  
」

「ひゃん!  
」

「あうっ!  
」

誰かにぶつかってしまった。

「はわわ……こんなところに他に人がいるなんて……」

「く、前方不注意だったか」

「無言だからだよ」

「ですね」

他に誰かがいると言うことを考えずに進んでいたため  
通行人とぶつかり倒れてしまった。

「あう。痛い……あなた達は大丈夫ですか？」

「問題ない。そちらは？」

「あ、僕は大丈夫です」

立ち上がったトウガは倒れていた相手に手を差し出す。

「おっとつと……ありがとうございます」

「つーかあんた女一人でこんなところで何してんの？」

ヤヨイは指をさしながらそう言う。

「お、女っ！？ 僕は男です！」

その言葉に少年は怒鳴りつける！

「あ、あう……ごめんなさい……」

「ふ、軽率な発言をするから」

「ぬ、ぬう」

ナギサの言葉に何も言い返せなく  
ヤヨイはむくれてしまった。

「僕はですね。あ、まずは名前を言いましょう。僕の名前はユウッ  
て言います」

「私はトウガ。この二人はナギサとヤヨイだ」

「どうもよろしく」

「よろしくね」

全員の紹介が終わりユウが目的を話し始める。

「僕はですね、ポケモンと人間との間に生まれたという子供を探し  
ているのです！」

「ポケモンと」

「人間の間に!?!」

トウガはそれほど反応なく。

ナギサとヤヨイは驚く。

「まあ、伝説みたいな感じの噂ですけどね」

「でももそれで子供ができてるってことは誰かが獣……」

『ボカアーン!』

「ヤヨイ」

「ごめんなさい……」

「しかし、お前はなぜそんな噂を……」

「いえ、双子の兄を探していましたですね。その兄がこういう噂に  
すぐ流されるたちで……」



「このう噂をたどれば兄が見つかるか?」

「ええ、兄はこう言うの大好きで、こう言うありもしないのが一番好きですから」

ユウは頭をかきながら苦笑いをする。

「まあとにかく。神秘的なところにいるかもと言うことで、一応ここにも来たと言うわけで」

「ふむ」

「と、ただぶつかっただけなのに話が長くなってしまいましたね」

「気にしなくていい」

「いえいえ。旅の邪魔をしまして」

そう言うユウはカナズミ方面へと歩き出した。

「では、僕は兄探しの旅に戻りますので」

「見つかるといいな。お前の兄が」

「ありがとうございます。では……」

そう言うユウはその場を去って行った。

「なんかよくわからない人でしたね」

「なんかあたしが殴られたり叩かれたりしたただけだったような……」

「そうですね。楽しかったです」

「楽しんだのか!？」

ユウがいなくなると再び姉妹の争いが始まった。

「ふつ。こいつらにも互いを心配すると言っ心があるのか……」

そう言つてトウガは再びハジツケ方面へと向かつて行つた。

「あ、待つてください!」

「お、置いてかないでくれ!」

そして後ろから二人はそれを追うのであつた。

続く

## 第16策 上りの下り（後書き）

なんかこう言う話を聞いたことがあったので。

と言うわけでこんな話を思いついたと言うわけです。

さて、まあとにかくにもいろいろありました。

感想があると加速しますよ。

小説更新。

## 第17策 ボックスの姉（前書き）

いろいろな時間がかかりましたが活動報告の方のいろんな人の言葉でここまで書けたって感じです。  
これから頑張ります。

## 第17策 ポックスの姉

【114 ばんどうろ】

「あれ？ こんなところに研究所的な建物が……」

ヤヨイが建物を見つけて指をさす。

「ポケモンボックス研究所……転送システムのことですね」

「しかし私たちの目的には関係がない。次へむか……」

《ドギヤーン！》

「あ、あの……爆音が」

「どう見てもあの研究所から煙が……」

研究所からは煙が出ている。

「ここであの研究所のものと接点を作れると言っのは……ふむ……」

「行きますか？」

「すでにヤヨイが先行しているがな」

二人が話しているうちにヤヨイは研究所に走っていった。

「またですか……」

「しかしこけて倒れているな……」

研究所近くで倒れているヤヨイを指さしトウガは言う。

「いてて……靴ひもが……」

「まったく……手入れを怠るからですよ」

フツ……と笑いながらこけているヤヨイを見るナギサ。

「ナギサア！」

「ふふつ。何を怒ってるの？ とにかく研究所に行きますよ」

「お前……ふんっ！」

そう言つて二人は研究所へ向かう。

「やれやれだな……」

そう言いながらトウガも研究所に向かつて行つた。

「いてて……あゝ任されてたのにこんな惨状で……」

一人の女性が崩れた機材の中で呟いていた。

「すいませーん。なにがあつた……おうえええええ！？」

「すごい煙ですね……」

「え、なに、お客さん？」

《ガラカツ》

煙を噴く機材から女性は身を乗り出した。

「お客ではない……ただこの研究所から煙が出ていたのにな」

「あ、いやぁ……面目ない。妹からまかせられたって言うのに……」  
頭をかきながら女性は笑う。

「あ、私の名前はアズサ。本当は別のところの管理人なんだけどさ」  
「他のところの?」

「いや、当分妹が帰ってこないから代わりに管理よろしくってさ」

ケラケラと笑いながらアズサは話す。

「しかしこの惨状は大丈夫なんですか?」

「え、えへっへっへ……」

「なんだその変な笑い声は……」

笑いながらもアズサを山の方へ向かい機材を調べる。

「……あり?」

「どうしたの?」

「いや、その……パーツが壊れちゃってるんだよねえ」

ニヤハハと笑いながら頭をかくアズサ。

「それはまずいのではないか?」

「あ、あはは……どうしよう?」

「いや、どうしようて……」

そう言いながら壊れたパーツを置いてこちらを見るアズサ。

「これも何かの縁……パーツ買ってきてくれないかなあ」

「なんであたしらが!」

「お兄様。どうしますか？」

叫ぶヤヨイを横目にナギサはトウガに問う。

「……いいだろう。買ってきてやろう」

「なんと！ ありがとう！ パーツはフエンの漢方薬屋の隣で売ってるから！」

「あ、目的地決定ですね」

「困難で敗北したあゝ！」

倒れながら床を叩くヤヨイ。

それを見ながら勝ち誇るナギサ。

「お前達……」

そしていつものように呆れるトウガであった……

「てな訳でこのパーツだからね。よろしく」

「ああ……」

トウガはアズサから手紙を受け取る。

「じゃあよろしくね。私いろいろやらなきゃだから、戻るね」

《ギイ、バナーン！》

アズサは急いで研究所に帰って行った。



「さて、行くか……」

「……」

「ふふーん」

「……行くか！」

そう言つてトウガはは知つて研究所を後にした。

「ちょ、お兄様！」

「……」

ナギサは追いかけるがヤヨイは動いてなかった。

「……ほへ？ あ、ままま、まってー！」

そしてかなり離れた後に気がついたヤヨイは急いで追いかけた。

続く

## 第17策 ボックスの姉（後書き）

この頃いろいろゲームやってんですけどね。

ニコニコに実況あげたり。

専門学校で単位落としそうだったり……

人生厳しいな……

誰か1から見たとか途中まで見たでもいいから感想くれると嬉しいです。

生きる糧になります。

書くためのエネルギーじゃなくて、生きる糧に。

## 第18策 姉妹の喧嘩（前書き）

タイトルまんまの上に短すぎます。

誠に申し訳ありません。

浅門汰斗さんアザトクさん s i b u g a k i さん 霊剣荒鷹さん 松上さん

のみなさんとリレー小説を書くことになりました

そちらに集中しております。

こちらを楽しみにしていただいた方には申し訳ありません。

## 第18策 姉妹の喧嘩

【ハジツゲタウン】

「はあ、はあ……」

息を荒げるうら若き乙女。

「何がうら若き乙女なのか分からないです」

「うら若き乙女なんだよあたしは！」

息を荒げていたのはヤヨイであつた。

「なんで先に行くかな……しかもあたし靴の紐切れてるって言ったよね！」

「すべてはお兄様の御心のままに……」

「あ、兄貴」

ただ、ただヤヨイは泣くだけだった。

「……ただ走ろうと思ったから走っただけだ」

「それだけであたしをおいてきぼりに！？」

「……それだけだ」

「あ、兄貴！」

ヤヨイはただ、ただ泣くだけしかできなかった。

「とにかく今日はポケモンセンターで休むぞ」

「はい。お兄様」

「ああうわあ……」

ヤヨイは引きずられていった……

【ポケモンセンター個室 24】

「これでよしと」

「その靴ひもは先ほどのと同じですけど丈夫なんですかね？」

靴の紐を新しいものとかえにこやかにしていたヤヨイにナギサは突っ込む。

「新しいのは丈夫なの」

「そうですか、そうですか」

「気に障る言い方だなあ……」

ヤヨイはふてくされながらベットに転がる。

「なんであたしってこんなに運が悪いんだろ」

「そんな星の下にでも生まれてきたんじゃないですかね」

「そんなことあってたまるか！」

ヤヨイとナギサは殴り合いを始めた。

「何姉妹でじゃれあっている」

「「じゃれあってなんかない（ありません）！」」

二人は息ぴったりとトウガの言葉に否定する。

「それをじゃれあっていると言っただ……」

トウガはやれやれと言った感じで首を振った。

「明日にはえんとつやま経由でフエンに向かうのだ。山に登る準備でもするのだな」

そう言つてトウガは山登り用の道具の用意を始めた。

「うげ！？ あたし登山用の道具とか用意してないや！？」

「まったく……だから前の街で用意しておけと……」

「にや、にやんだとお！」

そして再びじゃれあいが始まった。

「やれやれ……」

トウガはそのまま準備を続けた

続く

## 第18策 姉妹の喧嘩（後書き）

はぁ……風邪がひどくて頭がいたいや……  
明日パワポケ14発売か……  
お金がないや……

クリスマス特別編 マサムネとミズホの戦闘記録 (前書き)

どう言う戦闘記録だ？ とかそこらは気にせんで。  
特にクリスマス臭はありません。  
私の好き勝手に書くだけです。  
久々に長い話ですよ



## クリスマス特別編 マサムネとミズホの戦闘記録

「クリスマスですよー!」

「クリスマスだな」!

クリスマスだと叫ぶマサムネとミズホ。

「と言うか久々の登場ですねえ」

「メタなことを言わなくてもさあ」

「そんなこと言ったって作者さんが『トウガ達一行は扱いにくい』  
ってことで私たちが……」

「そんな話の進まない一番の理由言っちゃだめ!」!

そう言つてマサムネはミズホの言葉をさえぎる。

「モグモグモグモグ」

「そうそうシモンが紙に書いたように設定上はオーレに行つて  
る途中なんだよ?」

「設定上とか行ってますよ……」

「あ、う……気にするなよ……」

マサムネはしどろもどろとなる。

「と言うかここ船の上ですよ」

「船上でクリスマスパーティー中だなあ」

「モグモグモグ……」 船上つて言つかあの状況は戦場だよ兄貴……

……」

そう言いながら……いや、書きながら目の前の状況を見る。

「ああ、トレーナーたちが戦っている……」

「トレーナーは目があったらこうなりますからねえ」

そう言いながら離れた場所からその惨状を見ている二人。

「クリスマスくらい二人でゆっくりしたいよなあ」

「にゅふふ……ぐへへ」

「……いつもの妄想状態に入ってしまった……」

額に手を当てながらマサムネは首を振った。

「おい、そこのお前！ バトルしようぜ！」

「ウェーイ！ 何のためにここにいたのか……」

「とにかくバトルを……」

「あなた……」

「ん？」

戦いを挑んできた青年とマサムネは声の方向を向く。

「私たち二人の幸せタイムを潰してくれてんじゃねええええええ！」

「え？ な、何？！」

「私と勝負だ！ 地獄を見せてやらあ！」

「ああ……やはり壊れてしまった……」

マサムネはその惨状を見ているしか他なかった……

「行きなさい！ トガミ！ カミコ！」

「ガメエークウス」

「ピカー！」

ミズホはトガミとカミコのコンビを繰り出した。

「そうそう。オーレ地方に近いんだからオーレの戦い方に合わせて基本はダブルバトルと」

そう言つて青年もボールを投げる。

「コアコアコア」

「プルリリリ」

青年はキングラーとスターミーを繰り出した。

「水タイプですかあ？ なめくさってますかあ？」

「戦いは戦法だ。行くぞ！」

そう言つとスターミーは高速で二匹の周りを飛び回る。

「ガメエー！？」

「ピカー！？」

「コアコアコア」

『ブンッ』

二匹がスターミーに気が取られているすきにキングラーが攻撃をする。

「ピカッ!?」

「ガメエックス!」

カミコをトガミが背中の甲羅で守る。

「ガメエツ!」

『ドカア!』

「コアコアー」

キングラーはトガミの反撃により倒れる。

「後はスターミーだけです」

「しかしこのスピードについてこられるかな?」

「くつくつく……トガミ! カミコ! あれをやりますよ!」

そう言っているとトガミとカミコは準備を始める。

「ピイイカアアア」

カミコの手の前にでんじほうが現れる。

「カメカメカメカメ」

トガミはこうそくスピンを始める。

「ピカッ!」

「ガメツ!」

そしてカミコはでんじほうを放つそして  
トガミは高速スピンからのロケットずつき  
そのロケットずつきでカミコを飛ばす！

「ピイイイカアアアア！」

そして放ったでんじほうの電気を体におびボルテッカーを決行する！

「超高速で移動のボルテッカーだと！？」

「トガミの高速性を維持しながらのボルテッカー！ でんじほうの  
高威力電気も帯びている！ これぞ必殺！ 超電磁砲【レールガン】  
！」

そしてその攻撃は高速で動くスターミーのスピードをこえスターミ  
ーに直撃する。

「プルリリリ！？」

そして戦闘不能となるスターミー。

「ざまあみろです」

「か、完敗だ……」

「しっしっ！ どうかに行ってくださいです！」  
「なんて扱いだ俺……」

そう言って青年は去って行った。

「さあて、もう個室で楽しみましょうか。ぐへへ……」  
「……あ、ハッピークリスマス！」

そう言つて二人は個室へと消えていった……

「ガ、ガメガ」

「ピカ、ピ、ピカチュ？」

「ガメガメガア？ ガメガメ」

「ピ、ピカアア！？ ピィカアチュウウウ！」

「ガ、ガメガガアアア！」

「モーグモーグ……」

残されていたポケモンたちはいつもの通りだった。

クリスマス特別編 おしまい。

クリスマス特別編 マサムネとミズホの戦闘記録（後書き）

どうだったでしょうか。久々の戦闘です。

結構前から思いついてたものでやる機会がなかったのですが……

さて、もしかしたら今回が今年最後の更新かも。

他の作品は更新するかもですが……

ではよいお年＆メリークリスマス！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6271q/>

---

ポケットモンスター ブレイカ

2011年12月25日12時45分発行